
2022年度 前期

1単位

英語論文作成ワークショップ

Brunelli Anthony

< 授業の方法 >

This class will be face-to-face.

< 授業の目的 >

This class will be taught in English and aims to help students develop good and proper academic writing skills. Students will learn various writing strategies and then use those strategies each week to write short papers on a variety of topics. In accordance with the DP of the Graduate School of Humanities and Sciences, the acquisition of these skills and knowledge will help students contribute to society with a rich cultural knowledge from a broad education.

< 到達目標 >

Through active learning, this class will focus on writing in English and will help students develop writing skills needed for success in academic writing.

< 授業のキーワード >

Academic writing, research writing, creative writing

< 授業の進め方 >

Students will be required to write short English papers each week following the information presented in class.

< 授業時間外に必要な学修 >

Weekly homework assignments will take roughly 1-2 hours per week.

< 成績評価方法・基準 >

Students will be graded as follows:

Writing assignments 50%

Participation 20%

Exam 30%

< テキスト >

The teacher will provide all necessary materials.

< 授業計画 >

Class Explanation The structure and style of the class will be presented

第2回

Writing a self-introduction Students will write a self-introduction in English

第3回

Topic sentences Students will learn how to write a good topic sentence

第4回

Topic sentence practice Students will practice writing topic sentences

第5回

Adding details Students will learn how to add details to a story

第6回

Explanation paragraphs Students will learn how to explain how or why something happens

第7回

Cause Students will learn how to explain cause of how or why something happens

第8回

Effect Students will learn how to explain the effects of something that has happened

第9回

Similarities Students will learn how to explain the similarities and differences between two or more people, places, things, or ideas

第10回

Differences Students will learn how to explain the similarities and differences between two or more people, places, things, or ideas

第11回

Sequence paragraphs Students will learn how to describe a series of events or a process in some sort of order.

第12回

Order Students will learn how to describe a series of events or a process in some sort of order.

第13回

Time Students will learn how to describe a series of events or a process based on time.

第14回

Putting it all together Pt 1 Students will learn how to combine all of the previous exercises

第15回

Putting it all together Pt 2 Students will learn how to combine all of the previous exercises

2022年度 後期

1単位

英語論文作成ワークショップ

Brunelli Anthony

< 授業の方法 >

This class will be face-to-face.

< 授業の目的 >

This class will be taught in English and aims to help students develop good and proper academic writing

ing skills. Students will learn various writing strategies and then use those strategies each week to write short papers on a variety of topics. In accordance with the DP of the Graduate School of Humanities and Sciences, the acquisition of these skills and knowledge will help students contribute to society with a rich cultural knowledge from a broad education.

<到達目標>

Through active learning, this class will focus on writing in English and will help students develop writing skills needed for success in academic writing.

<授業のキーワード>

Academic writing, research writing, creative writing

<授業の進め方>

Students will be required to write short English papers each week following the information presented in class.

<授業時間外に必要な学修>

Weekly homework assignments will take roughly 1-2 hours per week.

<成績評価方法・基準>

Students will be graded as follows:

Writing assignments 50%

Participation 20%

Exam 30%

<テキスト>

The teacher will provide all necessary materials.

<授業計画>

Introduction The structure and style of the class will be presented

第2回

The basics of academic writing Writing good topic sentences and paragraphs

第3回

Details and supporting ideas How to develop your main ideas

第4回

Your ideas and opinions Why ideas and opinions matter

第5回

Gathering ideas before writing How to get organized before writing

第6回

Setting a scene Describing a place

第7回

Describing a picture Writing about a picture

第8回

Time-Order Practice using time-order words

第9回

Describing a place Writing about an observation

第10回

The purpose and structure of a research paper Understanding the organization of a research paper

第11回

Choosing the correct topic How to keep your topic narrow for clarity

第12回

The structure of content and ideas The importance of an outline

第13回

Introductions and conclusions Understanding the relationship between the introduction and the conclusion

第14回

Writing the first draft The importance of a first draft

第15回

The abstract Understanding the academic research paper abstract

2022年度 後期

1単位

芸術文化論ワークショップ

宇野 文夫

<授業の方法>

演習(対面授業)。

<授業の目的>

<主題>

演奏会について考える。

<目的>

クラシック音楽系の芸術音楽の演奏会の実態を多面的に捉え、現在営まれている音楽会というものと、その意義や意味を考察する。

チラシや雑誌広告、インターネットといったメディアに載せられた音楽会情報から、我々の読取ることの出来る事項は、どのようなものか。自ら選択した演奏会を実際に聴取体験し、何をすることができるのか。

こういった思考活動と実体験を通じて、芸術や芸術活動というものを深く捉え直す。

更に、人間文化学研究所のDPに則り、文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献し、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができるようになる。

担当教員は、中学校教諭(音楽)、音楽専門誌への音楽評論、及び作編曲といった実務経験のある教員である。

これらの経験を柔軟に活かし、音楽に対し知識や経験の少ない一般学生に対しては極めて解り易く講じ、既に専門的な知識や経験を有する学生には更に高度な教育が可能である。

<到達目標>

メディアや社会と芸術や芸術活動との関係を把握し、深く考察することができるようになる。

<授業のキーワード>

芸術と社会、芸術とメディア、芸術の存在意義

<授業の進め方>

調査発表と音楽の鑑賞。そして討議と考察。

<履修するにあたって>

予備知識や予めの興味の深浅は問いません。授業内容の細部は、履修者の実情に応じて変化します。

<授業時間外に必要な学修>

1週間に2時間ほど。

<提出課題など>

演奏会に関連したレポート、調査発表内容のまとめ

<成績評価方法・基準>

授業に於ける積極的参加度と、調査発表内容のレベル。発表に対しては、常にレスポンスを行います。

<授業計画>

授業概要の説明と自己紹介 授業の概要の説明と、担当者、履修者の自己紹介、授業への興味などを述べ、授業内容の方向性を確認する。

第2回

演奏会情報 チラシ、雑誌、インターネットから演奏会の情報を取り上げ、情報から読み取れる様々な事柄を考察し判断する。自ら聴きに行く演奏会を選択する。

第3回

演奏会に向けての準備1 聴きに行く演奏会について、事前準備を行う。主として曲目に関して調査し、考察する。

第4回

演奏会に向けての準備2 聴きに行く演奏会について、事前準備を行う。主として演奏者について調査し、考察する。

第5回

演奏会に向けての準備3 聴きに行く演奏会について、事前準備を行う。主として演奏会場について調査し、考察する。

第6回

演奏会に向けての準備4 聴きに行く演奏会について、事前準備を行う。曲目に挙げられている作品について、研究する。

第7回

演奏会に向けての準備5 聴きに行く演奏会について、事前準備を行う。曲目に挙げられている作品について、

研究する。

第8回

演奏会体験レポート1 演奏会を体験する。複数のものに出向き、可能であれば、その内のひとつは参加者全員で行って聴取する。授業では、逐一聴取演奏会の報告を行う。

第9回

演奏会体験レポート2 演奏会を体験する。複数のものに出向き、可能であれば、その内のひとつは参加者全員で行って聴取する。授業では、逐一聴取演奏会の報告を行う。

第10回

演奏会体験レポート3 演奏会を体験する。複数のものに出向き、可能であれば、その内のひとつは参加者全員で行って聴取する。授業では、逐一聴取演奏会の報告を行う。

第11回

演奏会の報告と考察1 芸術表現と情報、そして情報を通じたコミュニケーションについて各々の考えを発表する。

第12回

演奏会の報告と考察2 芸術表現と情報、そして情報を通じたコミュニケーションについて各々の考えを発表する。

第13回

演奏会の報告と考察3 芸術表現と情報、そして情報を通じたコミュニケーションについて各々の考えを発表する。

第14回

演奏会についての総括1 授業を通して浮かび上がってくる、芸術表現を巡る様々な課題や問題を捉え考察する。

第15回

演奏会についての総括2 芸術表現を巡る様々な課題や問題の考察から、今日における芸術と情報、そしてそれらと人間の関係について考察する。

2022年度 前期～後期

4単位

芸術文化論演習（2年次）

宇野 文夫

<授業の方法>

演習（対面）

<授業の目的>

<主題> 音楽、音楽作品、現代音楽、作曲及び作曲家、演奏及び演奏解釈についての研究

<目的> 音楽作品を多角的に研究することによって、時代、社会、個人にとっての芸術の意味、芸術創作の意義、そこから時代、社会、世界に至るまで様々な事象を探求する。これらの知見を基に、修了論文の制作を行う。

更に、人間文化学研究科のDPに則り、文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献し、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができるようになる。

担当教員は、中学校教諭（音楽）、音楽専門誌への音楽評論、及び作編曲といった実務経験のある教員である。これらの経験を柔軟に活かし、音楽に対し知識や経験の少ない一般学生に対しては極めて解り易く講じ、既に専門的な知識や経験を有する学生には更に高度な教育が可能である。

<到達目標>

現代に於ける芸術の意味、芸術創作の意義を知る。

<授業の進め方>

個々の調査研究の発表と討議。音楽の研究、鑑賞と検討。履修者の課題に応じた書籍や論文の講読をも並行して行う。

<授業時間外に必要な学修>

1週間に7時間

<成績評価方法・基準>

授業に於ける積極的参加度と、芸術理解のレベル。

<テキスト>

適宜楽譜が必要となる。

<参考図書>

「現代音楽 - 1945年以降の前衛」グリフィス著（音楽之友社）。「音楽美入門」山根銀二著（岩波書店・新書）。「音楽美学」野村良雄著（音楽之友社）。「ブーレーズ作曲家論選」ブーレーズ（筑摩書房・ちくま学芸文庫）。月刊「音楽現代」誌（宇野記述部分）（芸術現代社）。

<授業計画>

現代音楽の研究 1 音楽と現代の諸問題。現代音楽を俯瞰する。現代とは何か。

第2回

現代音楽の研究 2 黎明期の現代音楽。時代の推移と音楽。ドイツ音楽の研究。ヴァーグナーからマーラーへ。

第3回

現代音楽の研究 3 黎明期の現代音楽。時代の推移と音楽。フランス音楽の研究。フォーレからドビュッシー。

第4回

現代音楽の研究 4 現代音楽の創始。シェーンベルクと新ウィーン楽派。

第5回

現代音楽の研究 5 現代音楽の創始。新ウィーン楽派の展開と影響。

第6回

現代音楽の研究 6 国民楽派から原始主義音楽へ。ストラヴィンスキーを中心に。

第7回

現代音楽の研究 7 原始主義音楽の展開と影響。東欧

の音楽。

第8回

現代音楽の研究 8 戦後前衛音楽。ブーレーズ、ノーノ、シュトックハウゼン。

第9回

現代音楽の研究 9 実験音楽について。アイヴズ、カウエルからケージまで。

第10回

現代音楽の研究 10 非ヨーロッパ圏の現代音楽。

第11回

現代音楽の研究 11 日本の現代音楽。黎明期から山田耕筰まで。

第12回

現代音楽の研究 12 武満徹とその世代。

第13回

演奏の多様性と可能性 1 演奏家と演奏解釈の多様性について考察する。

第14回

研究発表 1 履修者の研究発表と討議。

第15回

研究発表 2 履修者の研究発表と討議。

第16回

音楽の分析研究 1 現代音楽黎明期の作品から数点を取り上げ、分析研究を行う。マーラーなど。

第17回

音楽の分析研究 2 現代音楽黎明期の作品から数点を取り上げ、分析研究を行う。ドビュッシーなど

第18回

音楽の分析研究 3 新ウィーン楽派の作品から数点を取り上げ、分析研究を行う。

第19回

音楽の分析研究 4 ストラヴィンスキー作品の分析研究。

第20回

音楽の分析研究 5 前衛音楽及び実験音楽の作品から数点を取り上げ、分析研究を行う。ブーレーズ、ケージなど。

第21回

演奏の多様性と可能性 2 演奏家と演奏解釈の多様性について考察する。演奏家と作品は履修者の課題に従って選択する。

第22回

研究発表 3 履修者の研究発表と討議。論文の完成へ向けての指導。内容の査問。

第23回

研究発表 4 履修者の研究発表と討議。論文の完成へ向けての指導。前回指摘内容の是正の確認。

第24回

研究発表 5 履修者の研究発表と討議。論文の完成へ向けての指導。

第25回

研究指導 1 修了論文の完成に向けての指導。

第26回

研究指導 2 修了論文の完成に向けての指導。目的に合致した記述になっているかを確認。

第27回

研究指導 3 修了論文の完成に向けての指導。記述の一貫性と妥当性の検討。

第28回

研究指導 4 修了論文の完成に向けての指導。引用に関する適格性、妥当性の確認。

第29回

研究指導 5 修了論文の完成に向けての指導。細部と全体の内容の確認。より解りやすい記述方法の工夫。

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

芸術文化論演習（1年次）

宇野 文夫

< 授業の方法 >

演習（対面）

< 授業の目的 >

< 主題 > 音楽研究の基礎

< 目標 > 音楽研究にあたって必要な知識の実践的習得と研究

音楽の研究は、聴取、感受、鑑賞といった精神的、情操的で本質的な面と、それを可能な限り実態的、学術的に捉えようという分析、解釈といった活動に分けられる。元来芸術の研究というものは、形而上のものと形而下のものとの相克の中にあり、根本的な矛盾を抱えたものである。

履修者の現在の段階、これまでの研究と、目標を参照し、必要な知識を補い能力を身につけさせ、修士での高度な研究に導く。

更に、人間文化学研究科のDPに則り、文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献し、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができるようになる。

担当教員は、中学校教諭（音楽）、音楽専門誌への音楽評論、及び作編曲といった実務経験のある教員である。これらの経験を柔軟に活かし、音楽に対し知識や経験の少ない一般学生に対しては極めて解り易く講じ、既に専門的な知識や経験を有する学生には更に高度な教育が可能である。

< 到達目標 >

形而上のものと形而下のものとの相克にある、芸術の実

態を知り、自らの研究を位置づける。

< 授業の進め方 >

履修者の研究の発表と討議、及び音楽の鑑賞と研究指導。履修者の課題に応じた書籍や論文の講読をも並行して行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

1週間に4時間

< 成績評価方法・基準 >

研究の進捗状況。授業に於ける積極的参加度と、芸術理解のレベル。

< テキスト >

必要に応じて楽譜の準備が必要となる。

< 参考図書 >

「西洋音楽史 3 古典派の音楽」ブルーム著（白水社・白水uブックス）、「和声 - 理論と実習」島岡譲他著（音楽之友社）。「大和声学教程」長谷川良夫著（音楽之友社）。「対位法」長谷川良夫著（音楽之友社）。「楽式論」石桁真礼生著（音楽之友社）。「音楽の形式」オデル著（白水社・文庫クセジュ）。

< 授業計画 >

音楽とは何か 1 履修者のこれまでの学修・研究が、どのような芸術観、音楽観に支えられているかを、振り返り、改めて音楽の持つ様々な意味や意義を、時代や場所を超えて広く考察する。

第2回

音楽とは何か 2 私たちを取りまく現実世界との関係として、そこに存在する芸術・音楽について考察する。

第3回

音楽とは何か 3 身近なポピュラー音楽、クラシック音楽、伝統音楽など、存在する各種の音楽を俯瞰し、その意義や意味を考える。

第4回

音楽とは何か 4 履修者自らにとっての音楽についての研究・考察し、発表・討議する。

第5回

音楽とは何か 5 履修者自らにとっての音楽についての研究・考察し、発表・討議する。

第6回

クラシック音楽の基礎 1 クラシック音楽の研究を素材に、音楽研究の実際を知り、自らの研究の位置や意味を考究する。クラシックの基礎となった、バロックに属するバッハの音楽について考察する。

第7回

クラシック音楽の基礎 2 バッハの音楽の実態として、その和声と対位法の実際を観察する。

第8回

和声実習 1 和声法を実習により理解する。3和音と基本形。

第9回

和声実習 2 和声法を実習により理解する。3和音と基本形、及びカデンツ。
第10回
和声実習 3 和声法を実習により理解する。第1転回形。
第11回
和声実習 4 和声法を実習により理解する。第1転回形。様々な調性。
第12回
和声実習 5 和声法を実習により理解する。第2転回形。
第13回
和声実習と分析 1 和声法を実習により理解する。7の和音。実際の作品を和声の観点から分析する。
第14回
和声実習と分析 2 和声法を実習により理解する。9の和音。実際の作品を和声の観点から分析する。
第15回
和声と分析のまとめ 主として和声の観点から、音楽作品はどのように分析し得るかを考察する。
第16回
和声と対位法 初歩の対位法の実習と、和声との関連を考察する。
第17回
対位法 1 初歩の対位法の実習を行う。1対1。
第18回
対位法 2 初歩の対位法の実習を行う。1対2。
第19回
対位法 3 初歩の対位法の実習を行う。1対2、2対2。
第20回
対位法 4 初歩の対位法の実習を行う。1対4。
第21回
対位法実習と分析 1 バッハを素材に、対位法作品を分析する。
第22回
対位法実習と分析 2 バッハを素材に、対位法作品を分析する。3声対位法の観察と実習。
第23回
対位法実習と分析 3 バッハを素材に、対位法作品を分析する。3声対位法の観察と実習。
第24回
音楽の時間構成 1 音楽を時間構成の点から考察する方法を学修する。
第25回
音楽の時間構成 2 音楽の様々な構成を考える。
第26回
音楽の時間構成 3 様々な音楽の時間構成と、クラシック音楽の特徴を考察する。
第27回
音楽の時間構成 4 クラシック音楽におけるソナタ形

式を考察する。
第28回
音楽の時間構成 5 クラシック音楽におけるソナタ形式を考察する。ハイドン作品の分析を行う。
第29回
音楽の全体像の分析 1 改めて音楽の分析について考え、分析によって音楽の全体像を捉える。
第30回

2022年度 前期
2単位
芸術文化論特殊講義
宇野 文夫

<授業の方法>
演習・講義(対面)
<授業の目的>
<主題>
現代の創作音楽について考察する。
<目標>
現代の創作音楽、特に芸術音楽である現代音楽についての理解を深める。
<授業内容>
いわゆる「現代音楽」作品を取り上げ、その表現の魅力、特に現代ならではの意味や意義について考察する。20世紀以降の現代芸術は、近代を脱し、モダニズムの芸術運動によってその軌跡を成してきた。モダニズムの価値、その云わば呪縛は、ポスト・モダンの隆盛もあってやや弱体化したものの、安定した価値基準を持ち得ない現代芸術の宿命であるといえる。
この問題の考察により、広い視野に立って、さまざまな角度から問題を判断し、主体的な行動によって解決への道筋を提示できる能力を育む。
更に、人間文化科学研究科のDPに則り、文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献し、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができるようになる。
担当教員は、中学校教諭(音楽)、音楽専門誌への音楽評論、及び作編曲といった実務経験のある教員である。これらの経験を柔軟に活かし、音楽に対し知識や経験の少ない一般学生に対しては極めて解り易く講じ、既に専門的な知識や経験を有する学生には更に高度な教育が可能である。
<到達目標>
「現代音楽」作品の表現の魅力、そして現代ならではの意味や意義を知る。ヴァーグナーなど後期ロマン派の音楽から、マーラー、ドビュッシーを経て、ブーレーズ、シュトックハウゼンに至る音楽史の変遷と作品の実態を自ら説明できるようになる。

< 授業のキーワード >

現代音楽、モダニズム、前衛音楽、実験音楽、ポスト・モダニズム

< 授業の進め方 >

担当者の講義、及び履修者の調査研究の発表と討議。音楽の鑑賞と芸術を巡る多角的な議論。

< 履修するにあたって >

現状の中、様々な作家が、どのような感受性を持ち、どのような意図の下、どのような思考を経て、どのような意義を感じ、そしてどのような衝動に突き動かされて、芸術作品をあらしめ、芸術活動を行なっているのか。そのヴィヴィッドな実態を体験すべく、その活動の只中に講義者も受講者も身を置いて、課題を追求していく。現代音楽の前史から、歴史を辿り、前衛音楽のピエール・ブーレーズ、実験音楽のジョン・ケージ、ポスト・モダンの複数主義のアルフレッド・シュニトケ等への考察が、今日一般の状況把握の基盤となるが、更に新しい世代や、今生み出されつつある新作の演奏会にも足を運ぶ。

< 授業時間外に必要な学修 >

演奏会に出向き多数の生演奏による音楽を聴く。演奏会が不可能な場合、録音を通じて多数の音楽を聴く。平均すると1週間に2時間ほど。

< 提出課題など >

演奏会に関連したレポート、調査発表内容のまとめ

< 成績評価方法・基準 >

授業に於ける積極的参加度と、調査発表内容のレベル。及び、発表に於ける知識と認識の広さ。調査発表に関しては、常にレスポンスを行う。

< 参考図書 >

「現代音楽キーワード事典」コープ著、春秋社

< 授業計画 >

現代音楽とは何か 歴史と地域性の視点から現代音楽の存在について考察する。

第2回

現代音楽とは何か 音楽の実態、作曲の語法、技法の視点から現代の音楽の特性を考察する。

第3回

現代音楽の黎明期 後期ロマン派の音楽に現代音楽の萌芽を探る。ヴァーグナー、ブルックナー、ブラームス。

第4回

現代音楽のさきがけ マーラーとドビュッシーの音楽。

第5回

現代音楽の確立 新ヴィーン楽派。シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンの音楽。

第6回

原始主義音楽 イゴール・ストラヴィンスキー。

第7回

東欧での動き バルトーク、シマノフスキ、エネスコ。

第8回

前衛音楽 メシアン、ノーノ、ブーレーズ、シュトックハウゼン。

第9回

前衛音楽 ベリオ、シュトックハウゼン、ホリガーからファーニホウ、リンドベリまで、前衛の系譜。

第10回

実験音楽 ケージの偶然性、パッチの自作楽器、ナンカロウの自動ピアノ。

第11回

実験音楽 ミニマル・ミュージックの出現と発展。ライヒ、ライリーからB・イーノ、M・ナイマンまで。

第12回

ポスト・モダニズム A・シュニトケの音楽に観るポスト・モダンのニヒリズムと実存について考察する。

第13回

最新の現代音楽を聴く 1 世界の最新の現代音楽作品を聴く。

第14回

最新の現代音楽を聴く 2 世界の最新の現代音楽作品を聴く。

第15回

最新の現代音楽を聴く 3 世界の最新の現代音楽作品を聴く。

2022年度 前期

2単位

芸術文化論方法論

宇野 文夫

< 授業の方法 >

演習・講義（対面）

< 授業の目的 >

< 主題 > 音楽の実態の研究

< 目的 > 音楽を実態に即した分析によって捉え、その価値を考察する。

和声、対位法、楽式といった、クラシック音楽の基礎的な知識を身に付けつつ、歴史に残る作品を分析する。そのことによって深い学識を蓄積し、高度な専門性に基づく指導力を発揮できるようになる。

更に、人間文化科学研究科のDPに則り、文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献し、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができるようになる。

担当教員は、中学校教諭（音楽）、音楽専門誌への音楽評論、及び作編曲といった実務経験のある教員である。これらの経験を柔軟に活かし、音楽に対し知識や経験の少ない一般学生に対しては極めて解り易く講じ、既に専門的な知識や経験を有する学生には更に高度な教育が可能である。

<到達目標>

クラシック音楽の基礎的な知識を身に付け、作品を分析する力を付ける。

<授業のキーワード>

音楽分析、和声、対位法、楽式、楽器とその特性

<授業の進め方>

発表と音楽の鑑賞、及び討論。

<履修するにあたって>

授業にて取り上げる音楽作品は、履修者の実態や興味に
応じる。履修者は、普段から多数の音楽を聴き、音楽への
興味を深めておかなければならない。

<授業時間外に必要な学修>

和声、対位法の実習、及び多数の音楽の聴取。1週間に
3時間。

<提出課題など>

和声・対位法の実施課題、音楽分析のレポート

<成績評価方法・基準>

授業に於ける積極的参加度と、内容の理解度。発表に於
ける分析の緻密さ、和声、対位法の実習試験。発表や試
験は、その都度レスポンスを行います。

<参考図書>

「楽典－理論と実習」石桁真礼生他著（音楽之友社）。

「楽器学入門」金光威和雄著（音楽之友社）。

<授業計画>

音楽の分析とは 音楽分析概論。

第2回

音楽分析の基礎知識 音楽の分析に必要な基礎的な事柄
を確認する。

第3回

音楽の時間構成1 楽式や楽章構成等、音楽の時間構成
について考察する。

第4回

音楽の時間構成2 楽式や楽章構成等、音楽の時間構成
について考察し、実作品の多彩な表現を研究する。

第5回

和音と和声1 西洋系音楽の持つ大きな特徴である、和
音とそれの連続することによる和声に関して学修する。

第6回

和音と和声2 西洋系音楽の持つ大きな特徴である、和
音とそれの連続することによる和声に関して学習する。

第7回

対位法とポリフォニー1 線の作曲技法である対位法と、
多声部音楽について学習する。

第8回

対位法とポリフォニー2 線の作曲技法である対位法と、
多声部音楽について、実作品を素材に研究する。

第9回

楽器学と管弦楽法 管弦楽の楽譜と、管弦楽法の書物を用
い、楽器の扱いと管弦楽法を学修する。

第10回

楽曲分析1 クラシック音楽の分析研究を行う。

第11回

楽曲分析2 現代音楽の研究分析を行う。

第12回

楽曲分析3 履修者による任意の芸術楽曲の分析発表。

第13回

楽曲分析4 履修者による任意の芸術楽曲の分析発表。

第14回

楽曲分析5 履修者による任意の芸術楽曲の分析発表。

第15回

まとめ 授業を振り返って総括する。

2022年度 後期

2単位

芸術文化論方法論

宇野 文夫

<授業の方法>

演習（対面授業）。

<授業の目的>

<主題> 音楽の実態の研究

<目的> 音楽を実態に即した分析によって捉え、その価
値を考察する。

和声、対位法、楽式といった、クラシック音楽の基礎
的な知識を身に付けつつ、歴史に残る作品を分析する。
そのことによって深い学識を蓄積し、高度な専門性に基
づく指導力を発揮できるようになる。

更に、人間文化科学研究科のDPに則り、文化に関する豊
かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に
貢献し、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担
うことができるようになる。

担当教員は、中学校教諭（音楽）、音楽専門誌への音
楽評論、及び作編曲といった実務経験のある教員である。
これらの経験を柔軟に活かし、音楽に対し知識や経験の
少ない一般学生に対しては極めて解り易く講じ、既に専
門的な知識や経験を有する学生には更に高度な教育が可
能である。

<到達目標>

クラシック音楽の基礎的な知識を身に付け、作品を分析
する力を付ける。

<授業のキーワード>

音楽分析、和声、対位法、楽式、楽器とその特性

<授業の進め方>

発表と音楽の鑑賞、及び討論。

<履修するにあたって>

授業にて取り上げる音楽作品は、履修者の実態や興味に
応じる。履修者は、普段から多数の音楽を聴き、音楽への
興味を深めておかなければならない。

< 授業時間外に必要な学修 >

和声、対位法の実習、及び多数の音楽の聴取。1週間に3時間。

< 提出課題など >

和声・対位法の実施課題、音楽分析のレポート

< 成績評価方法・基準 >

授業に於ける積極的参加度と、内容の理解度。発表に於ける分析の緻密さ、和声、対位法の実習試験。発表や試験は、その都度レスポンスを行います。

< 授業計画 >

音楽の分析とは 音楽分析概論。

第2回

音楽分析の基礎知識 音楽の分析に必要な基礎的な事柄を確認する。

第3回

音楽の時間構成1 楽式や楽章構成等、音楽の時間構成について考察する。

第4回

音楽の時間構成2 楽式や楽章構成等、音楽の時間構成について考察し、実作品の多彩な表現を研究する。

第5回

和音と和声1

西洋系音楽の持つ大きな特徴である、和音とその連続することによる和声に関して学修する。

第6回

和音と和声2 西洋系音楽の持つ大きな特徴である、和音とその連続することによる和声に関して学習する。

第7回

対位法とポリフォニー1 線的作曲技法である対位法と、多声部音楽について学習する。

第8回

対位法とポリフォニー2 線的作曲技法である対位法と、多声部音楽について、実作品を素材に研究する。

第9回

楽器学と管弦楽法 管弦楽の楽譜と、管弦楽法の書物を用い、楽器の扱いと管弦楽法を学修する。

第10回

楽曲分析1 クラシック音楽の分析研究を行う。

第11回

楽曲分析2 現代音楽の研究分析を行う。

第12回

楽曲分析3 履修者による任意の芸術楽曲の分析発表。

第13回

楽曲分析4 履修者による任意の芸術楽曲の分析発表。

第14回

楽曲分析5 履修者による任意の芸術楽曲の分析発表。

第15回

まとめ 全体を総括する。

2022年度 後期

1単位

言語文化論ワークショップ

野田 春美

< 授業の方法 >

実習

< 授業の目的 >

この科目は、研究科修士課程のDPに示されている、「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」ことを目的とする。

具体的には文章表現のトレーニングを行い、論理的文章を読みやすく書くことを学ぶ。

< 到達目標 >

1 自分の考えを人に伝えるというのはどういうことか、構成を整え、読みやすい流れを作るというのはどういうことかを知り、説明できる。

2 明晰で論理的な文章を書くことができる。

< 授業の進め方 >

文章の執筆と、相互コメント・推敲を中心として進める。

< 履修するにあたって >

(1)このワークショップは、大学院生として基本的な日本語能力を有していることを前提として行うものであり、留学生向けのいわゆる「日本語教育」ではない。非母語話者が受講する場合も、非母語話者向けの特別のトレーニングは行わない。

(2)分野によっては、実験等を中心とした、独自の論文フォーマットが確立している。このワークショップは、そういった形式の論文の指導は行わない。

(3)各自、ノートPCを持参してもらうことが多い。

(4)作業量が多いこと、お互いの文章を批判的に検討し合う機会が多いことを承知のうえで受講してほしい。

< 授業時間外に必要な学修 >

改稿を宿題とすることがあるため、授業時間外での改稿作業が必要となる。(1時間程度)

< 提出課題など >

文章作成課題1～3、及び期末レポートを課す。課題1～3については他の受講生と共に、改善点を検討する。レポートはコメントを入れて返却する。

< 成績評価方法・基準 >

授業への参加態度40%、提出課題・期末レポート60%で評価する。

なお、期末レポートが締切日までに提出されない場合は、評価の対象としない。

< 参考図書 >

必要に応じて指示する。

< 授業計画 >

文章表現力の確認 テスト形式。

第2回

課題文1の構想 議論しながら課題文1の構想を練り、
執筆を始める。執筆完成は次回までの宿題とする。

第3回

課題文1の相互コメント 課題1の相互コメントを行い、
自分の文章の問題点を認識する。改稿は次回までの宿題
とする。

第4回

課題1の改訂版の相互コメント・完成 課題1の改訂版
の相互コメントを再び行い、それをふまえて完成させる。

第5回

課題文2の構想 議論しながら課題文2の構想を練り、
執筆を始める。執筆完成は次回までの宿題とする。

第6回

課題文2の相互コメント 課題2の相互コメントを行い、
自分の文章の問題点を認識する。改稿は次回までの宿題
とする。

第7回

課題2の改訂版の相互コメント・完成 課題2の改訂版
の相互コメントを再び行い、それをふまえて完成させる。

第8回

課題文3の構想 議論しながら課題文3の構想を練り、
執筆を始める。執筆完成は次回までの宿題とする。

第9回

課題文3の相互コメント 課題3の相互コメントを行い、
自分の文章の問題点を認識する。改稿は次回までの宿題
とする。

第10回

課題3の改訂版の相互コメント・完成 課題3の改訂版
の相互コメントを再び行い、それをふまえて完成させる。

第11回

期末レポートの構想 議論しながら期末レポートの構想
を練り、執筆を始める。草稿完成は次々回までの宿題と
する。

第12回

期末レポートの途中段階の報告と検討 期末レポートの
途中段階の報告を行い、問題点などを検討する。

第13回

期末レポート草稿の相互コメント 草稿の相互コメント
を行い、自分の文章の問題点を認識する。改稿は次回ま
での宿題とする。

第14回

期末レポート改訂版の相互コメント・完成 改訂版の相
互コメントを行い、それをふまえて完成させる。完成版
が期末レポートとなる。

第15回

期末レポートの相互披露・まとめ 完成した期末レポー
トを相互に披露し、学んできた内容をふりかえる。

2022年度 前期

1単位

言語文化論ワークショップ

出水 孝典

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

この授業は、大学院人間文化科学研究科のディプロマ・ポ
リシーである、2.広い視野に立って、さまざまな角度か
ら実社会の問題を判断し、妥当な解決への道筋を提示で
きる能力をもった人。/ 3.自ら問題を発見し、その解決
に向かって主体的に行動し、望ましい成果を達成する能
力をもった人、に関連したものである。

具体的には、「会話に見られるある種の特徴」とはどう
いうことかについて、社会言語学者Robin Lakoff, Debo
rah Tannenによる論文からの抜粋を精読しながら学んで
いく。

本ワークショップでは、会話に見られる興味深い特徴と
してどのようなものがあり、それがどのような役割を果
たし、その違いによってどのように会話が特徴付けられ
るのかといった点に注目し、テキストを精読しながら考
えていく。

<到達目標>

- ・会話に見られる特徴とその意義について理解を深める。
- ・原書講読の基本を身につける。

<授業のキーワード>

グライスの協調の原理、レイコフのポライトネス3原則、
高関与スタイル、高配慮スタイル、力、連帯、類似と差
異、間接性、割り込み、話題提起、対立

<授業の進め方>

テキストを精読し内容を検討していく。

毎回、担当を決めて予習をしてきてもらう。担当者はテ
キストの該当部分の日本語訳を作成し、それを全員で検
討し、自然な日本語に直していく。その後、内容に関し
て議論をする。

<履修するにあたって>

英文の精読の仕方、自然な訳し方などについては、参考
図書にある表三郎氏の参考書を見て下さい。

<授業時間外に必要な学修>

授業中に担当分として指示されたテキストの箇所を丹念
に繰り返し読んで、日本語に訳した上で授業に臨んで下
さい。(90分程度)

<提出課題など>

期末レポート

<成績評価方法・基準>

授業での発表等(60%)と期末レポート(40%)をもとに評価
する。

<テキスト>

プリントで参考図書に挙げてある洋書文献の抜粋を配布する。

< 参考図書 >

Deborah Tannen. (2005) *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends* (New Edition) Oxford: Oxford University Press.

Deborah Tannen. (1994) *Gender and Discourse*. Oxford: Oxford University Press.

Robin Tolmach Lakoff. (2017) *Context Counts: Papers on Language, Gender, and Power*. Oxford: Oxford University Press.

表三郎. (1991) 『スーパー英文読解法』(上). 東京: 論創社.

表三郎. (1994) 『スーパー英文読解法』(下). 東京: 論創社.

富士哲也. (1996) 『スーパー英文読解演習』. 東京: 論創社.

富士哲也. (1996) 『スーパー英文読解演習』. 東京: 論創社.

富士哲也. (1997) 『スーパー英文読解演習』. 東京: 論創社.

< 授業計画 >

導入 授業のテーマ・目的・方針について説明する。

第2回

The logic of politeness; or, Minding your P's and Q's (1) Lakoff (2017: 42-44)を精読し、be clearがどういうことが確認する。

第3回

The logic of politeness; or, Minding your P's and Q's (2) Lakoff (2017: 44-46)を精読し、be politeがどういうことが確認する。

第4回

Stylistic Strategies: Involvement and Considerateness Tannen (2005: 17-19)を精読し、Lakoffの主張を再確認する。

第5回

Features of High-Involvement Style Tannen (2005: 40-42)を精読し、high-involvement styleとhighconsiderateness styleについて確認する。

第6回

Power and Solidarity (1) Tannen (1994: 22-24)を精読し、powerとsolidarityについて確認する。

第7回

Power and Solidarity (2) Tannen (1994: 24-28)を精読し、powerとsolidarityの特性について確認する。

第8回

Similarity/Difference (1) Tannen (1994: 28-31)を精読し、similarityとdifferenceについて確認する。

第9回

Indirectness Tannen (1994: 31-34)を精読し、indirectnessについて確認する。

第10回

interruption Tannen (1994: 34-36)を精読し、interruptionについて確認する。

第11回

silence vs volubility Tannen (1994: 36-39)を精読し、silenceとvolubilityについて確認する。

第12回

Topic Raising Tannen (1994: 39-41)を精読し、topic raisingについて確認する。

第13回

adversativeness (1) Tannen (1994: 41-43)を精読し、adversativenessについて確認する。

第14回

adversativeness (2) Tannen (1994: 43-46)を精読し、adversativenessについてさらに確認する。

第15回

まとめ Tannen (1994: 46-47)のconclusionを精読し、これまで学んだ内容を整理する。

2022年度 前期～後期

4単位

言語文化論演習(E) (2年次)

出水 孝典

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この授業は、大学院人間文化科学研究科のディプロマ・ポリシーである、2.広い視野に立って、さまざまな角度から実社会の問題を判断し、妥当な解決への道筋を提示できる能力をもった人。/ 3.自ら問題を発見し、その解決に向かって主体的に行動し、望ましい成果を達成する能力をもった人、に関連したものである。修士課程1年次までにやってきたことをまとめる形で自己の研究テーマをさらに追求し、修士論文を完成させることを目的とする。

< 到達目標 >

修士論文作成に必要な知識・能力を身につけ、それをもとに修士論文を完成させる。

< 授業のキーワード >

自動詞と他動詞、非対格動詞と非能格動詞、言語類型論

< 授業の進め方 >

履修者の提示する、修士論文に関する資料を検討したり、それに基づいて履修者が少しずつ執筆を進めている修士論文を検討し、必要であれば助言、修正を行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

修士論文に関連する資料の収集、文献の精読、それらに

基づく修士論文の一部の執筆（90分）。

< 提出課題など >

夏期休暇終了後に修士論文の進捗状況報告を兼ねて、それまで書いた部分を提出してもらう。また、完成させた修士論文を、教務事務室提出前に、担当者に提出してもらう。

< 成績評価方法・基準 >

毎回の履修者の報告50%、夏期休暇終了後の報告25%、修士論文の下書き25%

< 授業計画 >

研究テーマの確認 履修者の研究テーマに関して確認をする。前年度に、計画していた修士論文の執筆計画がどの程度進捗したのかを報告してもらう。

第2回

学術的意義について 修士論文のテーマとして掲げた研究内容について学術的意義を検討する。

第3回

言語資料の再検討 これまでに収集した言語資料を改めて検討する。英語を他言語への翻訳と比較した場合に、どのような共通点と差異が見られるのかを考える。

第4回

テーマ設定1 これまでに収集した言語資料と、蓄積してきた先行研究からの知見を参照し、テーマを絞り込む方向で議論する。

第5回

テーマ設定2 テーマの絞り込みに関して、さらに議論する。

第6回

テーマ設定3 テーマをある程度確定する。

第7回

修士論文執筆への予備作業1 修士論文執筆に向けて、今一度、収集した言語資料と理論的知見を見直し、構成を考える。

第8回

修士論文執筆への予備作業2 修士論文執筆に向けて、収集した言語資料と理論的知見の見直しから考えた構成をさらに検討し、妥当性、問題点などを議論する。問題点があれば、どのように修正するのかも考えていく。

第9回

修士論文作成1 修士論文を書く場合に、本体(Body)から執筆を開始し、その後最終章の結論(Conclusion)、1章の導入部(Introduction)という順序で書いていくことを再確認する。

第10回

修士論文作成2 言語学の修士論文の場合、本体(Body)の初めの章は、どのような言語現象を扱い、それにどのような先行研究が存在するのかを紹介する部分となる。その部分をどのように執筆するのかを検討する。

第11回

修士論文作成3 言語学の修士論文の場合、本体(Body)の2つ目の章は、自分の収集した言語資料の分類を示す部分となる。その部分をどのように執筆するのか検討する。

第12回

修士論文作成4 言語学の修士論文の場合、本体(Body)の3つ目の章は、言語学理論によって、自分の収集した言語資料の分類がどう分析できるのかを示す部分となる。その部分をどのように執筆するのか検討する。

第13回

修士論文作成5 言語学の修士論文の場合、本体(Body)の4つ目の章を立てる場合、言語学理論によって、自分の収集した言語資料の分類を分析した結果、何が分かり、そこからさらにどのようなことを明らかにできるのかを示す部分となる。その部分をどのように執筆するのか検討する。

第14回

修士論文作成6 本体(Body)の執筆を踏まえて、最後の章である結論(Conclusion)を書いてみて、それが妥当で学問的に意義のあるものか否かを検討する。場合によっては、これまでの執筆部分の修正案を提示する。

第15回

修士論文作成7とまとめ 本体(Body)と結論(Conclusion)を踏まえて、導入部(Introduction)をどう執筆するのか議論する。全体を俯瞰した上で、夏期休暇中にどのような加筆・修正による改善が可能なのかも考える。

第16回

夏期休暇中の進捗状況の確認 第15回で提示した内容によって、修士論文執筆がどのように進んでいるのか報告してもらう。

第17回

修士論文テーマの再確認 研究テーマと研究内容に齟齬がないか、また研究内容に妥当性があるか、方向性が間違っていないかをもう一度確認する。

第18回

修士論文執筆の重要事項の確認1 引用している言語資料にきちんと出典が示されているのか、もう一度確認する。

第19回

修士論文執筆の重要事項の確認2 引用している辞書の記述や先行研究に、きちんと出典が示されているか、引用の仕方が不適切でないかといったことを再確認する。

第20回

修士論文執筆の重要事項の確認3 すでに同じような研究がなされていないか、他人のアイデアを無断で借用していないかといった、論文の独創性や剽窃に関わる部分を再確認する。

第21回

修士論文執筆の重要事項の確認4 最終的に導かれた結論は妥当か、結論と言っているが単なる主観的な意見

になっていないか、といった修士論文の学術的な妥当性を再検討する。

第22回

全体的内容の再検討と修正1 修士論文全体の内容を再検討し、瑕疵や齟齬がないか、ある場合にどう修正すべきかといった点を議論する。

第23回

全体的内容の再検討と修正2 修士論文全体の内容を再検討し、瑕疵や齟齬がないか、ある場合にどう修正すべきかといった点を議論する。

第24回

全体的内容の再検討と修正3 修士論文全体の内容を再検討し、瑕疵や齟齬がないか、ある場合にどう修正すべきかといった点を議論する。

第25回

全体的内容の再検討と修正4 修士論文全体の内容を再検討し、瑕疵や齟齬がないか、ある場合にどう修正すべきかといった点を議論する。

第26回

全体的内容の再検討と修正5 修士論文全体の内容を再検討し、瑕疵や齟齬がないか、ある場合にどう修正すべきかといった点を議論する。

第27回

修士論文の内容確認 論の立て方、話の持って行き方が、読者にスムーズに理解できる構成になっているかどうかを確認する。

第28回

修士論文の下書きの検討1 修士論文の下書きに関して、書式や用語の統一といった形式的な面を確認する。

第29回

修士論文の下書きの検討2 修士論文の下書きに関して、誤植・誤記といった形式上の細かな点を確認する。

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

言語文化論演習(E) (1年次)

出水 孝典

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この授業は、大学院人間文化学研究科のディプロマ・ポリシーである、2. 広い視野に立って、さまざまな角度から実社会の問題を判断し、妥当な解決への道筋を提示できる能力をもった人。 / 3. 自ら問題を発見し、その解決に向かって主体的に行動し、望ましい成果を達成する能力をもった人、に関連したものである。修士論文作成に向けて、研究の基礎を固めをする。卒業研究を見直し、新たな課題を模索するのか、もしくは卒業研究で取り上

げた問題点をさらに追究するのかといったことを検討する。

< 到達目標 >

修士論文の執筆に必要な基礎知識を蓄積する。データの収集、データ分析に用いる理論の学習などを行いながら、修士論文執筆に向けて進んでゆく。

< 授業のキーワード >

自動詞と他動詞、非対格動詞と非能格動詞、言語類型論

< 授業の進め方 >

修士論文執筆に向けて、資料の講読、調査内容の報告をする。担当者はそれに対するコメント、問題点の指摘、修正案の提示といったことを行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

修士論文に関連する資料の収集、文献の精読、それらに基づく修士論文の一部の執筆(90分)。

< 提出課題など >

年度末に修士論文の進捗状況報告を兼ねて、それまで書いた部分を提出してもらう。

< 成績評価方法・基準 >

毎回の履修者の報告50%、夏期休暇終了後の報告25%、次年度に向けての研究計画25%

< 授業計画 >

卒業研究の再考 卒業研究でどのようなことを行ったのか、振り返る。そこから、どのように修士論文執筆へと進んでいくのかを議論する。

第2回

研究方法模索1 言語学研究でどのような理論があるのか、履修者の関心に従って紹介する。特に当該分野のどんな点に興味があるのかを見極めていく。

第3回

研究方法模索2 言語学研究に用いる資料の調査方法を学ぶ。特に、英語で書かれた小説を、その日本語訳、中国語訳、フランス語訳、ドイツ語訳などと比較することで、類型論的資料が得られることを確認する。

第4回

研究方法模索3 言語学研究に用いる資料の分析方法を学ぶ。収集した資料を、目的語の有無、修飾語の有無といった、統語的な基準によって、どのようにタグ付けできるのかを確認する。

第5回

研究方法模索4 言語学研究に用いる資料の分析方法を学ぶ。収集した資料の主語、目的語がどのようなものをカテゴリー化することによって、意味論的なタグ付けができることを確認する。

第6回

研究課題決定1 研究課題に必要な資料を確認する。図書館や担当者が所蔵していない資料に関しては、所蔵機関、入手方法を確認する。

第7回

研究課題決定2 どのように言語資料を集め、どのよう

な理論によって分析するのかを確認する。

第8回
報告1 研究の進捗状況を報告してもらう。

第9回
報告2 研究の進捗状況を報告してもらう。

第10回
報告3 研究の進捗状況を報告してもらう。

第11回
中間の確認1 それまでに報告してもらった内容に関して、担当者と履修者で議論する。現在の研究方法で正しいのか、問題がある場合は、どのように修正すべきなのかを検討する。

第12回
報告4 研究の進捗状況を報告してもらう。

第13回
報告5 研究の進捗状況を報告してもらう。

第14回
報告6 研究の進捗状況を報告してもらう。

第15回
展望 長期休暇中に何をするのか、今後の研究方法について確認する。

第16回
夏期休暇中の進捗状況の報告 夏期休暇中に、研究がどのように進展したのかを、言語資料の収集、分析に用いる理論に関して報告してもらう。

第17回
言語資料の分析の確認1 収集した言語資料がどのようなもので、統語的・意味論的にどのような分類ができるのかを提示してもらう。問題があれば担当者が修正案を提示する。

第18回
言語資料の分析の確認2 収集した言語資料がどのようなもので、統語的・意味論的にどのような分類ができるのかを提示してもらう。問題があれば担当者が修正案を提示する。

第19回
言語資料の分析の確認3 収集した言語資料がどのようなもので、統語的・意味論的にどのような分類ができるのかを提示してもらう。問題があれば担当者が修正案を提示する。

第20回
分析に用いる理論の確認1 収集した言語資料を分類したものに関して、どのような理論を用いた分析が可能なのかを提示してもらう。問題があれば担当者が修正案を提示する。

第21回
分析に用いる理論の確認2 収集した言語資料を分類したものに関して、どのような理論を用いた分析が可能なのかを提示してもらう。問題があれば担当者が修正案を提示する。

第22回
分析に用いる理論の確認3 収集した言語資料を分類したものに関して、どのような理論を用いた分析が可能なのかを提示してもらう。問題があれば担当者が修正案を提示する。

第23回
中間の確認2 それまでに提示してもらった内容に関して、担当者と履修者で議論する。現在の研究方法で正しいのか、問題がある場合は、どのように修正すべきなのかを検討する。

第24回
修士論文の構成の確認1 修士論文の構成をどのようにするのかを議論する。これまでに収集した言語資料、その分析に援用する理論などを踏まえた上で、どのような構成にするのかを検討する。

第25回
修士論文の構成の確認2 修士論文の構成をどのようにするのかを議論する。これまでに収集した言語資料、その分析に援用する理論などを踏まえた上で、どのような構成にするのかを検討する。

第26回
修士論文の構成の確認3 修士論文の構成をどのようにするのかを議論する。これまでに収集した言語資料、その分析に援用する理論などを踏まえた上で、どのような構成にするのかを検討する。

第27回
確認 これまでの言語資料とその分析、それに基づく修士論文執筆の計画に関して報告する。

第28回
展望 今後の研究計画についての展望を報告する。

第29回
計画 次年度へ向けて、今後の研究計画を作成する。

第30回

2022年度 前期～後期
4単位
言語文化論演習（J）（2年次）
野田 春美

<授業の方法>
演習
<授業の目的>
この科目は、地域文化論専攻修士課程のDPに示されている「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」こと、「独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元することができる」こと、「将来にわたって、学問・研究への関心をもちつづけ、さまざまな実践現場で専門知識や技能にもとづいた貢献を果たすことができる」ことを目的とします。

具体的には、この科目では、言語文化論講座において修士論文の執筆を目指す受講生が、自らの収集した言語データを分析し、論を構築し、自らの主張を論文として完成させていきます。したがって、具体的な内容は、受講生の研究テーマに即したものとなります。

<到達目標>

- 1 分析を重ね、独創的で説得力のある論が構築できる
- 2 協調的・建設的な議論ができる
- 3 客観性・論理性・説得力のある明晰な論文が執筆できる

<授業の進め方>

受講生の発表と、それをめぐる議論を中心とします。

<授業時間外に必要な学修>

授業外でも継続的に修士論文の執筆を進める必要がある。

<提出課題など>

進捗状況にあわせた課題を課す。前期の学期末にはレポートを課す。課題やレポートについては随時コメントを入れて返却する。

<成績評価方法・基準>

提出課題40%、期末レポート60%で評価する。

なお、期末レポートが締切日までに提出されない場合は、評価の対象としない。

<参考図書>

受講生の修士論文のテーマにあわせて紹介する。

<授業計画>

研究計画の確認、研究倫理の確認 研究計画を確認する。研究倫理についても確認する。

前期第2回

仮説の設定とその適切性の検討 仮説を設定し、その適切性を検討する。

前期第3回

仮説の設定とその適切性の検討 仮説を設定し、その適切性を検討する。

前期第4回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第5回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第6回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第7回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第8回

論文の構成案の検討 論文の構成案を検討する。

前期第9回

論文の構成案の検討 論文の構成案を検討する。

前期第10回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第11回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第12回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第13回

分析結果の発表とその妥当性の検討 分析結果を発表し、その妥当性を検討する。

前期第14回

進捗状況を確認 前期終了時における進捗状況を確認する。

前期第15回

今後の執筆計画の検討 今後の執筆計画を検討する。

後期第1回

執筆状況の確認 夏季休暇中の進捗状況、執筆状況を確認する。

後期第2回

研究論文の執筆に関する基本 1 研究論文の執筆のための文章表現技術やPC技術を確認し習得する。

後期第3回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第4回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第5回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第6回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第7回

研究論文の執筆に関する基本 2 研究論文の執筆に関する文章表現技術やPC技術を確認し習得する。

後期第8回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第9回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第10回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第11回

既執筆部分の報告と検討 既執筆部分について報告を行い、問題点を検討する。

後期第12回

内容の最終確認 修士論文の内容の最終確認を行う。
後期第13回
推敲作業 修士論文の推敲作業を行う。
後期第14回
推敲作業 修士論文の推敲作業を行う。
後期第15回

2022年度 前期～後期

4単位

言語文化論演習（J）（1年次）

野田 春美

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、地域文化論専攻修士課程のDPに示されている「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立する」ことを目的とします。

具体的には、言語文化論講座において修士論文の執筆を目指す受講生が、自らの研究テーマを確定し、そのテーマにふさわしい研究方法を検討し、自らの研究のための言語データ収集方法・分析方法を学びます。したがって、具体的な内容は、受講生の研究テーマに即したものとなります。

< 到達目標 >

- 1 体系的な知識に基づいて、研究課題を決定できる
- 2 研究課題に適した研究方法を決定できる
- 3 協調的・建設的な議論ができる
- 4 研究課題に適した言語データの収集・分析を実践できる

< 授業の進め方 >

受講生の発表と、それをめぐる議論を中心とします。

< 授業時間外に必要な学修 >

修士論文執筆のため、授業外でも常に研究を進める必要がある。

< 提出課題など >

進捗状況にあわせた課題を課す。学期末にはレポートを課す。課題やレポートについては随時コメントを入れて返却する。

< 成績評価方法・基準 >

提出課題40%、期末レポート60%で評価する。

なお、期末レポートが締切日までに提出されない場合は、評価の対象としない。

< 参考図書 >

受講生の修士論文のテーマにあわせて紹介する。

< 授業計画 >

希望研究テーマ・方法の確認、研究倫理の確認 希望する研究テーマ・方法について、理解・認識を確認する。研究倫理についても確認する。

前期第2回

研究動向の把握 希望研究テーマに関する最近の研究動向を把握する。

前期第3回

研究史上の意義についての議論 研究テーマの研究史上の意義について議論する。

前期第4回

研究史上の意義についての議論 研究テーマの研究史上の意義について議論する。

前期第5回

関連する先行研究の検討 研究テーマに関連する先行研究を検討する。

前期第6回

関連する先行研究の検討 研究テーマに関連する先行研究を検討する。

前期第7回

関連する先行研究の検討 研究テーマに関連する先行研究を検討する。

前期第8回

関連する先行研究の検討 研究テーマに関連する先行研究を検討する。

前期第9回

研究テーマの妥当性の再検討 研究テーマが修士論文に値するものであるか、先行研究にない新規性があるか否かの検討を重ねる。

前期第10回

研究テーマの妥当性の再検討 研究テーマが修士論文に値するものであるか、先行研究にない新規性があるか否かの検討を重ねる。

前期第11回

研究テーマの妥当性の再検討 研究テーマが修士論文に値するものであるか、先行研究にない新規性があるか否かの検討を重ねる。

前期第12回

研究方法の検討 研究テーマに適した研究方法を検討する。

前期第13回

研究方法の検討 研究テーマに適した研究方法を検討する。

前期第14回

研究方法の検討 研究テーマに適した研究方法を検討する。

前期第15回

研究テーマと研究方法の確定 研究テーマと研究方法を確定する。

後期第1回

研究テーマと研究計画の確認 夏季休暇中の研究進捗状況を確認し、研究テーマと研究計画を確認する。

後期第2回

言語データの収集方法を検討 現代日本語研究における言語データの種類、収集の方法を、先行研究を参考に

検討する。

後期第3回
言語データの収集方法を検討 現代日本語研究における言語データの種類，収集の方法を，先行研究を参考に検討する。

後期第4回
データ収集方法の決定と作業開始 研究テーマにふさわしいデータの種類，収集の方法を検討し，データ収集を開始する。

後期第5回
データの分析方法を検討 現代日本語研究におけるデータの分析方法を，先行研究を参考に検討する。

後期第6回
データの分析方法を検討 現代日本語研究におけるデータの分析方法を，先行研究を参考に検討する。

後期第7回
データの分析方法を検討 現代日本語研究におけるデータの分析方法を，先行研究を参考に検討する。

後期第8回
データの分析方法を検討 現代日本語研究におけるデータの分析方法を，先行研究を参考に検討する。

後期第9回
研究テーマに適したデータの分析方法を検討 研究テーマにふさわしいデータの分析方法を検討する。

後期第10回
研究テーマに適したデータの分析方法を検討 研究テーマにふさわしいデータの分析方法を検討する。

後期第11回
データ分析の試行，および問題点の検討 データ分析を試行し，問題点を検討する。

後期第12回
データ分析の試行，および問題点の検討 データ分析を試行し，問題点を検討する。

後期第13回
データ分析の試行，および問題点の検討 データ分析を試行し，問題点を検討する。

後期第14回
データ分析の試行，および問題点の検討 データ分析を試行し，問題点を検討する。

後期第15回

2022年度 前期

2単位

言語文化論特殊講義 (E)

出水 孝典

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

この授業は、大学院人間文化科学研究科のディプロマ・ポリシーである、2.広い視野に立って、さまざまな角度から実社会の問題を判断し、妥当な解決への道筋を提示できる能力をもった人。/ 3.自ら問題を発見し、その解決に向かって主体的に行動し、望ましい成果を達成する能力をもった人、に関連したものである。具体的には、Beth Levin とMalka Rappaport Hovav という2人の言語学者がこれまで提唱してきた、事象スキーマ（事象構造類型）に基づいて動詞の語彙意味表示を作り出す理論を取り上げ、履修者が自ら収集した言語データに、その理論を援用した研究ができるようにすることが目的である。

<到達目標>

動詞の語彙分解、事象スキーマに基づく動詞の意味分析について理解し、それを援用して言語データを分析した研究を行うことができる。

<授業のキーワード>

様態動詞、結果動詞、様態・結果の相補性、自動詞、他動詞、使役交替、移動とその言語化

<授業の進め方>

毎回少しずつ、出水孝典『動詞の意味を分解する 様態・結果・状態の語彙意味論』を一緒に読み、そこで扱われている英語のデータについて検討・議論する。

<授業時間外に必要な学修>

毎回、次回の授業で取り上げる部分に関してしっかり読むという形で予習し、できる限り理解してくる（60分）。また、授業後は、その回で学んだ内容に関してきちんと復習し、理解を定着させる（60分）。

<提出課題など>

講義の内容に関する期末レポートを提出する。

<成績評価方法・基準>

授業中の様々な内容に関する検討への参加度合い（70%）、期末レポート（30%）

<テキスト>

出水孝典．(2018) 『動詞の意味を分解する 様態・結果・状態の語彙意味論』(開拓社 言語・文化選書71) 東京：開拓社．ISBN 978-4-7589-2571-6

<授業計画>

導入 動詞の意味について、どのような考え方ができるのかについて、「家来が王を殺した」「家来が王を刺した」という2つの文を例として取り上げ、何が読み取れ、何が読み取れないのかについて考える。その後、どのよ

うに進めていくのかについて知る。

第2回

第1章 様態と結果って何？ 様態動詞と結果動詞の違いについて、日本語の推理小説に出てきそうな文を検討しながら理解する。

第3回

第2章 動詞の意味を割り算する！ 動詞の意味には2種類の要素（つまり、さまざまな動詞に共通する意味的公約数のような部分と、各動詞固有の意味成分）があることをまず確認する。そして、事象スキーマという公約数的部分を表す鋳型に、動詞固有の意味を表す語根を埋め込むことによって語彙意味表示ができ、それがそれぞれの意味要素を巧みに表示し分けていることを確認する。

第4回

第3章 参加者は動詞が描く場面の登場人物だ！（1）動詞が描く場面の登場人物である参加者という概念を導入し、それが動詞の意味表示とどのように関連するのかを確認する。特に、移動様態動詞の事象スキーマと意味表示について検討する。

第5回

第3章 参加者は動詞が描く場面の登場人物だ！（2）移動結果動詞（有方向移動動詞）の事象スキーマと意味表示を見た上で、動詞が表す参加者を指し示すために、事象スキーマになかった項が追加されることがあり、それを語根項ということ学ぶ。

第6回

第4章 事象スキーマへ語根を入れる！（1）他動詞の様態動詞（行為動詞）に含まれる語根項を取り上げた後、もう一度さまざまな意味グループの動詞に関して、事項スキーマへ語根が関連づけられる仕組みを見ていく。

第7回

第4章 事象スキーマへ語根を入れる！（2）到達動詞の予備段階についてまず確認する。その予備段階が、推論によって動詞の意味に含まれるように感じられるものの、実際には動詞の意味としては語彙化されていないということについて考える。

第8回

第5章 状態動詞も見ていこう！（1）様態動詞と結果動詞（これらをまとめて動作動詞と呼ぶ）とはまったく異なり様態も結果も意味に含まず、ある状態が続いていることだけを表す状態動詞の事象スキーマと意味表示を見ていく。

第9回

第5章 状態動詞も見ていこう！（2）状態動詞が起動相的解釈（到達動詞の意味）を表す場合があること、それがどのような意味表示によって表されるのかということを見ていく。

第10回

第6章 事象スキーマと語根ってどれだけあるの？ 事

象スキーマと語根の根本的性質について学びながら、それまで見てきたことをまとめていく。

第11回

第7章 移動様態動詞 + 前置詞句はどのようなもの？（1）移動様態動詞 + 前置詞句の意味をどのように分析し、どう表示すべきなのかという問題に取り組む。

第12回

第7章 移動様態動詞 + 前置詞句はどのようなもの？（2）Demizu（2015）を発展させた形で、移動様態動詞 + 前置詞句の意味をどう表示すべきなのかを見ていく。

第13回

第8章 状態変化動詞の自動詞形はどうするの？（1）The door opened. と John opened the door. のような状態変化動詞の自他交替（これは使役交替とよく呼ばれる）を取り上げ、それぞれがどのような意味表示をもつのかを見ていく。

第14回

第8章 状態変化動詞の自動詞形はどうするの？（2）状態変化動詞の使役交替を説明する場合、自動詞から他動詞を派生する仕組み、他動詞から自動詞を派生する仕組みのいずれもうまくいかないことを確認する。

第15回

第9章 非派生的な事象スキーマへの組み込み 構文文法だ！ 状態変化動詞の自他交替を説明する一つの案として、H?rtl（2003）による自動詞形と他動詞形の使用条件を参考にしながら、語根のプロファイルされる範囲によって組み込まれる事象スキーマが変わってくるという認知言語学的な発想を取り入れた仕組みを見ていく。そして、そうした語彙意味論的研究に認知言語学の知見を取り込むという発想が動詞の意味論研究でどのような意味をもつのかを最後に確認する。

2022年度 前期

2単位

言語文化論特殊講義（J）

建石 始

<授業の方法>

講義形式 + 演習形式

<授業の目的>

この科目は、地域文化論専攻修士課程のDPに示されている、「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」を目的とします。具体的には、コーパスについての理解を深め、実際に使用できることを目指します。

<到達目標>

1. コーパスを使った日本語研究を理解する。（知識）
2. それらの研究を行うために必要なコーパスやツールを取り上げ、その使い方を身につける。（技能）

<授業の進め方>

一方向的な講義ではなく、双方向的な授業を行います。また、実際にコーパスを使用し、さまざまなツールを使うこともあるので、受講生は積極的に授業に参加する心構えで受講してください。

<履修するにあたって>

パソコンを使って実際に作業を行うこともあるので、受講を希望する学生はパソコンの操作に慣れていることが望ましいです。

<授業時間外に必要な学修>

毎回の授業内容を理解し、復習するのに1時間程度の時間が必要となります。

<成績評価方法・基準>

授業への参加度(取り組み、課題、確認テスト)70%、レポート30%とします。

<授業計画>

コーパスを使った日本語研究とは(授業の概要説明)
コーパスを使った日本語研究を簡単に紹介するとともに、授業の概要を説明します。

第2回

コーパスを使った日本語研究の紹介(その1) 受講生と相談しながら、コーパスを使った日本語研究に関する文献を講読します。

第3回

コーパスを使った日本語研究の紹介(その2) 受講生と相談しながら、コーパスを使った日本語研究に関する文献を講読します。

第4回

「少納言」と「中納言」を使ったBCCWJの分析-基本操作編- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の基本操作を学びます。

第5回

「中納言」を使ったBCCWJの分析(その1) 修飾する表現編 中納言を利用して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を分析します。主に、修飾する表現を扱います。

第6回

「中納言」を使ったBCCWJの分析(その2) コロケーション編 中納言を利用して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を分析します。主に、コロケーションを扱います。

第7回

「中納言」を使ったBCCWJの分析(その3)-機能語分析編- 中納言を利用して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を分析します。主に、機能語の分析を行います。

第8回

書き言葉と話し言葉に関する日本語研究の紹介(その1) 受講生と相談しながら、書き言葉と話し言葉の違いを分析した文献を講読します。

第9回

書き言葉と話し言葉に関する日本語研究の紹介(その2) 受講生と相談しながら、書き言葉と話し言葉の違いを分析した文献を講読します。

第10回

書き言葉と話し言葉に関する日本語研究の紹介(その3) 受講生と相談しながら、書き言葉と話し言葉の違いを分析した文献を講読します。

第11回

「中納言」を使った書き言葉と話し言葉の分析(その1) 中納言を利用して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を分析します。その際、書き言葉と話し言葉の違いについての分析を行います。

第12回

「中納言」を使った書き言葉と話し言葉の分析(その2) 中納言を利用して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を分析します。その際、書き言葉と話し言葉の違いについての分析を行います。

第13回

コーパスを使った日中対照研究(その1) コーパスを使った日中対照研究がどのようなものか、およびどのような意義があるのかについて解説を行います。

第14回

コーパスを使った日中対照研究(その2) 日本語母語話者コーパスとして『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を分析し、中国語母語話者コーパスとして『北京大学中国語コーパス』を分析します。

第15回

これまでのまとめ これまでのまとめを行います。

2022年度 後期

2単位

言語文化論特殊講義 (E)

出水 孝典

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

この授業は、大学院人間文化科学研究科のディプロマ・ポリシーである、2.広い視野に立って、さまざまな角度から実社会の問題を判断し、妥当な解決への道筋を提示できる能力をもった人。/ 3.自ら問題を発見し、その解決に向かって主体的に行動し、望ましい成果を達成する能力をもった人、に関連したものである。具体的には、Beth Levin と Malka Rappaport Hovav という2人の言語学者がこれまで提唱してきた、事象スキーマ(事象構造型)に基づいて動詞の語彙意味表示を作り出す理論を取り上げ、履修者が自ら収集した言語データに、その理論を援用した研究ができるようにすることが目的である。

<到達目標>

動詞の語彙分解、事象スキーマに基づく動詞の意味分析

について理解し、それを援用して言語データを分析した研究を行うことができる。

< 授業のキーワード >

様態動詞、結果動詞、様態・結果の相補性、多義性、目的動詞、他動性

< 授業の進め方 >

毎回少しずつ、出水孝典『続・動詞の意味を分解する 変化の尺度・目的動詞・他動性』を一緒に読み、そこで扱われている英語のデータについて検討・議論する。

< 授業時間外に必要な学修 >

毎回、次回の授業で取り上げる部分に関してしっかり読むという形で予習し、できる限り理解してくる(60分)。また、授業後は、その回で学んだ内容に関してきちんと復習し、理解を定着させる(60分)。

< 提出課題など >

講義の内容に関する期末レポートを提出する。

< 成績評価方法・基準 >

授業中の様々な内容に関する検討への参加度合い(70%)、期末レポート(30%)

< テキスト >

出水孝典.(2019)『続・動詞の意味を分解する 変化の尺度・目的動詞・他動性』(開拓社 言語・文化選書 82) 東京:開拓社. ISBN 978-4-7589-2582-2

< 授業計画 >

導入 動詞の意味による分類にどのような意義があるのかを、まず考えてみる。

第2回

第1章 「動詞の意味を分解する」を振り返る!(1) 出水(2018)の内容を振り返る形で概説する。様々な動詞の意味の中に、多くの動詞に共通して見られる部分(構造的部分)と、それぞれの動詞ごとに異なる部分(語彙固有の部分)の2種類があることを確認した上で、それらを合わせた形で表す意味表示のパターンが7種類あることを見ていく。

第3回

第1章 「動詞の意味を分解する」を振り返る!(2) 前回見た意味表示の、もとなる事象スキーマが4種類であることを見た上で、意味表示内にあるx やy のような主語や目的語に対応する要素を項と呼ぶこと、項には構造項と語根項の2種類があることを確認し、7種類の意味表示と4種類の事象スキーマの対応関係を再整理する。

第4回

第2章 様態とか結果って結局何なの?(1) 様態動詞の元になる様態語根が表すのは尺度のない変化であるのに対して、結果動詞の元になる結果語根が表すのは尺度のある変化だということを理解する。

第5回

第2章 様態とか結果って結局何なの?(2) 尺度には特性尺度と経路尺度があり、状態変化動詞の結果語根が

特性尺度を含むのに対して、移動結果動詞(有方向移動動詞)の結果語根は経路尺度を含むことを見ていく。

第6回

第2章 様態とか結果って結局何なの?(3) 様態語根に含まれる尺度のない変化に、変化が複数あるため単一の尺度が抽出できないものと、表す内容が漠然としているため単一の尺度が抽出できないものの2種類あるということを理解する。

第7回

第3章 目的動詞って動作動詞の第3の分類?(1) Fel Ibaum (2013)が目的動詞というカテゴリーを設定する根拠とした、動詞間に見られる2種類の上下関係を見た上で、前回様態動詞と対応付けた尺度のない変化という概念が目的動詞にも当てはまること、従来言われてきたような狭い意味での様態動詞とは異なり目的動詞の使用に当たっては主観的な解釈が必要だということを理解する。

第8回

第3章 目的動詞って動作動詞の第3の分類?(2) Sem in とFielder という社会心理学者が導入した記述行為動詞・解釈行為動詞という分類を導入し、それが狭義の様態動詞・目的動詞の区別に近いものであることを確認した上で、定義の一部を応用する。それに基づき、これまで見ていた動詞の分類を再整理する。最後に、目的動詞の使用に関わる解釈の主観性について、用例に基づく吟味を行う。

第9回

第4章 多くの意味がある動詞ってなんでそうなってるの?(1) 語根のフレーム意味論とそこからのプロファイルとはどういうことなのかを、出水(2018)の第9章で説明している内容をさらに補足しながら確認する。その上で、語の多義性とはそもそもどういうものなのかを、吉村(2004)を参考に学ぶ。

第10回

第4章 多くの意味がある動詞ってなんでそうなってるの?(2) 日本語の動詞「走る」を例に取り、事象スキーマに語根を関連づけて意味表示を作る語彙意味論で、多義性がどのように説明できるのかを考える。さらに、英語動詞runに関して自動詞用法・他動詞用法の両方を取り上げ、同様の説明方法を適用できるか検討する。

第11回

第5章 動詞の強いやつと弱いやつ!(1) Ritter and Rosen (1996)による動詞の強弱という概念を用いて動詞runとwalkの違いを考える。動詞run とwalkの意味的・統語的な共通点と差異に着目した上で、そこから意味指定の強弱という概念を導入する。

第12回

第5章 動詞の強いやつと弱いやつ!(2) run やwalk

などふつうの動詞だけでなく、動詞を含むイディオムから助動詞に至るまで、動詞的要素をもつ述語がすべて、意味的な強さによって順序づけられることを見く。さらに、動詞の強弱という概念を動詞kill とその類義語であるmurder, assassinate に適用する。また、kill とassassinate に関するさらに興味深い言語事実を検討する。

第13回

第6章 他動詞らしさって何かあるの？(1) 他動性(transitivity) (平たく言えば他動詞らしさ) とは何かを、古典的なHopper and Thompson (1980)、それを発展させた「中核的他動詞」(core transitive verb) という概念を提示したLevin (1999) を見ながら考えていく。

第14回

第6章 他動詞らしさって何かあるの？(2) 使役事象の取る目的語の中に、被動目的語と呼ばれるふつうのもの以外に、達成目的語と呼ばれる特殊なものがあることを見ていく。

第15回

第6章 他動詞らしさって何かあるの？(3) 中核的他動詞でない動詞、つまり非中核的他動詞は、中核的他動詞の特徴をもたないものだと定義するしかないほど雑多なものであることを確認した上で、中核的他動詞を特徴付ける非影響度を判別するテストを用いて言語データを検討する。

2022年度 後期

2単位

言語文化論特殊講義 (J)

建石 始

< 授業の方法 >

講義形式 + 演習形式

< 授業の目的 >

この科目は、地域文化論専攻修士課程のDPに示されている、「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」を目的とします。具体的には、語彙研究や類義語分析についての理解を深め、実際に研究できることを目指します。

< 到達目標 >

1. 語彙研究の意義や類義語分析の方法を理解する。(知識)

2. それらの研究を行うために必要なコーパスやツールを取り上げ、その使い方を身につける。(技能)

< 授業の進め方 >

一方向的な講義ではなく、双方向的な授業を行います。また、実際にコーパスなどを使用し、さまざまなツールを使うことになるので、受講生は積極的に授業に参加する心構えで受講してください。

< 履修するにあたって >

パソコンを使って実際に作業を行うこともあるので、受講を希望する学生はパソコンの操作に慣れていることが望ましいです。

< 授業時間外に必要な学修 >

毎回の授業内容を理解し、復習するのに1時間程度の時間が必要となります。

< 成績評価方法・基準 >

授業への参加度(取り組み、課題、確認テスト)70%、レポート30%とします。

< 授業計画 >

日本語における語彙研究(授業の概要説明) 日本語における語彙研究を簡単に紹介するとともに、授業の概要を説明します。

第2回

語彙に関する研究とは 受講生と相談しながら、語彙研究に関する文献を講読します。

第3回

語彙研究の重要性 受講生と相談しながら、語彙研究の重要性を示した文献を講読します。

第4回

Web茶まめを使った語彙リスト作成 Web茶まめを利用して、身近な文章から語彙リストを作る方法を学びます。

第5回

形態素解析ウェブアプリを使った語彙リスト作成 形態素解析ウェブアプリを利用して、身近な文章から語彙リストを作る方法を学びます。

第6回

複数の語彙リストの比較 第4回と第5回の内容を踏まえて、複数の語彙リストを比較する方法を学びます。

第7回

類義語に関する研究 受講生と相談しながら、類義語に関する文献を講読します。

第8回

類義表現に関する研究 受講生と相談しながら、類義表現に関する文献を講読します。

第9回

NLBを使った類義語分析 NLBを利用して、類義語分析の方法を学びます。

第10回

類義語分析のチェックリスト(その1) 類義語分析を行うためには、どのような観点に気をつけなければいけないのかを学びます。

第11回

類義語分析のチェックリスト(その2) 類義語分析を行うための観点の一つとして、「話題」も取り入れられることを解説します。

第12回

一語から始まる小さな日本語学(その1) ある一語に着目し、その一語に対する違和感や「気になる」「面白い」という気持ちから研究をスタートさせることの意義

を伝えるとともに、語彙研究を積極的に行うことを提案します。

第13回

一語から始まる小さな日本語学(その2) ある一語に着目し、その一語に対する違和感や「気になる」「面白い」という気持ちから研究をスタートさせることの意義を伝えるとともに、語彙研究を積極的に行うことを提案します。

第14回

一語から始まる小さな日本語学(その3) ある一語に着目し、その一語に対する違和感や「気になる」「面白い」という気持ちから研究をスタートさせることの意義を伝えるとともに、語彙研究を積極的に行うことを提案します。

第15回

これまでのまとめ これまでのまとめを行います。

2022年度 前期

2単位

言語文化論方法論 (E)

出水 孝典

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

この授業は、大学院人間文化科学研究科のディプロマ・ポリシーである、2.広い視野に立って、さまざまな角度から実社会の問題を判断し、妥当な解決への道筋を提示できる能力をもった人。/ 3.自ら問題を発見し、その解決に向かって主体的に行動し、望ましい成果を達成する能力をもった人、に関連したものである。具体的には、英語の動詞を、日本語・中国語・フランス語・ドイツ語などの対応する動詞と比較・考察する際に必要となる、語彙意味論について学んでゆく。具体的には、影山太郎(1996)『動詞意味論』で展開されている、Vendlerのアスペクト分類を取り込んだ、語彙概念構造(lexical conceptual structure)に基づく理論について学び、履修者が自ら収集した言語データに、その理論を援用した研究ができるようにすることが目的である。

<到達目標>

動詞の語彙アスペクト、語彙分解に基づく動詞の語彙概念構造について理解し、それを援用して言語データを分析した研究を行うことができる。

<授業のキーワード>

動詞の語彙アスペクト、語彙分解、語彙概念構造

<授業の進め方>

毎回少しずつ、影山太郎『動詞意味論』を一緒に読み、そこで扱われている英語・日本語のデータについて検討・議論する。場合によっては、『動詞意味論』の翻訳である『動词语义学：语言与认知的接点』を参照しながら、

中国語のデータも取り扱う。

<授業時間外に必要な学修>

毎回、次回の授業で取り上げる部分に関してしっかり読むという形で予習し、できる限り理解してくる(60分)。また、授業後は、その回で学んだ内容に関してきちんと復習し、理解を定着させる(60分)。

<提出課題など>

学期末に、授業で学んだ理論を用いて、自分の収集したデータを分析したレポートを提出してもらう。

<成績評価方法・基準>

授業中の検討・議論への参画70%、期末レポート30%

<参考図書>

影山太郎(1996)『動詞意味論』東京：くろしお出版。

<授業計画>

導入 語彙意味論とはどういうものか、動詞の意味分析はどのようにして行われてきたのかについて簡単に説明し、この授業で取り扱う理論の背景を紹介する。

第2回

序章 0.1.語彙意味論、0.2.日英語の動詞語彙と表現法を扱う

第3回

第1章 非対格性 ナル型動詞とスル型動詞 (1) 1.1. 非対格性の仮説を扱う

第4回

第1章 非対格性 ナル型動詞とスル型動詞 (2) 1.2. 日英語における非対格性の現れを扱う

第5回

第1章 非対格性 ナル型動詞とスル型動詞 (3) 1.3. 非対格性の普遍性と意味的性質を扱う

第6回

第2章 語彙概念構造 動詞の意味タイプ (1) 2.1. 意味役割と述語分解を扱う

第7回

第2章 語彙概念構造 動詞の意味タイプ (2) 2.2. 語彙的アスペクトによる動詞分類を扱う

第8回

第2章 語彙概念構造 動詞の意味タイプ (3) 2.3. 事象の把握を扱う

第9回

第2章 語彙概念構造 動詞の意味タイプ (4) 2.4. 語彙概念構造の基本形を扱う

第10回

第2章 語彙概念構造 動詞の意味タイプ (5) 2.5. 語彙概念構造から項構造へのリンキングを扱う

第11回

第4章 自動詞と他動詞 使役主の取り付けと取り外し (1) 4.1. 英語：能格動詞と非対格動詞のうち、4.1.1. 能格動詞における反使役化までを扱う

第12回

第4章 自動詞と他動詞 使役主の取り付けと取り外し

(2) 4.1.英語：能格動詞と非対格動詞のうち、4.1.2.能格動詞主語の二重役割を扱う。

第13回

第4章 自動詞と他動詞 使役主の取り付けと取り外し

(3) 4.1.英語：能格動詞と非対格動詞のうち、4.1.3.反使役化の意味的・認知的条件を扱う

第14回

第4章 自動詞と他動詞 使役主の取り付けと取り外し

(4) 4.2.日本語の自動詞と他動詞のうち、4.2.2.他動詞から自動詞への転換までを扱う

第15回

第4章 自動詞と他動詞 使役主の取り付けと取り外し

(5)とまとめ 4.2.日本語の自動詞と他動詞のうち、4.2.3.自動詞から他動詞への転換、4.3.まとめまでを扱ったのち、全体のまとめをする

2022年度 前期

2単位

言語文化論方法論 (J)

野田 春美

< 授業の方法 >

講義・演習

< 授業の目的 >

この科目は、研究科修士課程のDPに示されている、「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」ことを目的とします。具体的には、言語に関わる修士論文の執筆を予定し、国語教育・英語教育・日本語教育に携わろうとする受講生が、日本語の文法の知識と注意点を確認しながら、自身の研究テーマとの関連、国語教育・英語教育・日本語教育への応用について考えます。

< 到達目標 >

1 日本語文法に関する基本的事項と注意点を説明できる(知識)

2 自身の研究や教育に、文法知識を生かすことができる(技能)

< 授業の進め方 >

関連文献を参考にして知識と注意点を確認し、その応用について受講生相互の意見交換を行います。

< 履修するにあたって >

(1)やむをえず欠席する場合は、Eメールなどで連絡すること。

(2)日本語学および日本語教育についての基礎知識があることを前提とする。

< 授業時間外に必要な学修 >

扱う項目に関する基礎知識が不足している場合は予習によって補うこと。授業後は復習によって、知識を定着させること。(1時間～1.5時間程度)

< 提出課題など >

学期末にはレポートを課す。レポートは希望に応じ、コメントを入れて返却する。そのほか、随時、宿題を課すことがある。

< 成績評価方法・基準 >

授業への参加態度(宿題を含む)70%、期末レポート30%で評価する。なお、期末レポートが締切日までに提出されない場合は、評価の対象としない。

< テキスト >

使用しない。プリントを配布する。

< 参考図書 >

必要に応じて紹介する。

< 授業計画 >

文の基本構造 文の基本構造に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第2回

形態論 形態論に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第3回

格助詞と構文 格助詞と構文に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第4回

ヴォイス ヴォイスに関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第5回

アスペクト アスペクトに関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第6回

テンス テンスに関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第7回

肯定否定 肯定否定に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第8回

モダリティ モダリティに関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第9回

とりたて とりたてに関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第10回

主題 主題に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第11回

副詞 副詞に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第12回

複文 複文に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第13回

指示表現 指示表現に関する知識と注意点を確認し、研

究・教育への応用を考える。

第14回

接続表現 接続表現に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

第15回

待遇表現 待遇表現に関する知識と注意点を確認し、研究・教育への応用を考える。

2022年度 後期

2単位

言語文化論方法論 (E)

出水 孝典

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この授業は、大学院人間文化学研究科のディプロマ・ポリシーである、2. 広い視野に立って、さまざまな角度から実社会の問題を判断し、妥当な解決への道筋を提示できる能力をもった人。 / 3. 自ら問題を発見し、その解決に向かって主体的に行動し、望ましい成果を達成する能力をもった人、に関連したものである。具体的には、英語の動詞を、日本語・中国語・フランス語・ドイツ語などの対応する動詞と比較・考察する際に必要となる、語彙意味論について学んでゆく。具体的には、影山太郎(1996)『動詞意味論』で展開されている、Vendlerのアスペクト分類を取り込んだ、語彙概念構造(lexical conceptual structure)に基づく理論について学び、履修者が自ら収集した言語データに、その理論を援用した研究ができるようにすることが目的である。

< 到達目標 >

動詞の語彙アスペクト、語彙分解に基づく動詞の語彙概念構造について理解し、それを援用して言語データを分析した研究を行うことができる。

< 授業のキーワード >

動詞の語彙アスペクト、語彙分解、語彙概念構造

< 授業の進め方 >

毎回少しずつ、影山太郎『動詞意味論』を一緒に読み、そこで扱われている英語・日本語のデータについて検討・議論する。場合によっては、『動詞意味論』の翻訳である『動詞語義学：语言与认知的接点』を参照しながら、中国語のデータも取り扱う。

< 授業時間外に必要な学修 >

毎回、次回の授業で取り上げる部分に関してしっかり読むという形で予習し、できる限り理解してくる(60分)。また、授業後は、その回で学んだ内容に関してきちんと復習し、理解を定着させる(60分)。

< 提出課題など >

学期末に、授業で学んだ理論を用いて、自分の収集したデータを分析したレポートを提出してもらう。

< 成績評価方法・基準 >

授業中の検討・議論への参画70%、期末レポート30%

< 参考図書 >

影山太郎(1996)『動詞意味論』東京：くろしお出版。

< 授業計画 >

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (1) 5.1. 日英語の結果構文を扱う

第2回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (2) 5.2. 結果構文と非対格性を扱う

第3回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (3) 5.3. 状態変化動詞と結果述語を扱う

第4回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (4) 5.4. 結果状態と到達位置を扱う

第5回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (5) 5.5. 結果状態と結果様態を扱う

第6回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (6) 5.6. 働きかけ動詞と結果述語を扱う

第7回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (7) 5.7. 日本語複合動詞の派生を扱う

第8回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (8) 5.8. 英語における概念構造の合成を扱う

第9回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (9) 5.9. 日英語の比較を扱う

第10回

第5章 結果構文 働きかけと結果の合成 (10) 5.10. 使役移動を扱う

第11回

第6章 概念構造と視点 スル型・ナル型を超えて (1) 6.1. 英語におけるスルからナルへの拡大を扱う

第12回

第6章 概念構造と視点 スル型・ナル型を超えて (2) 6.2. 日本語におけるナルからスルへの拡大を扱う

第13回

第6章 概念構造と視点 スル型・ナル型を超えて (3) 6.3. 「切っても切れない」式の表現の本質を扱う

第14回

第6章 概念構造と視点 スル型・ナル型を超えて (4) 6.4. むすびを扱う

第15回

全体のまとめ それまでに読んで学んできたことを総括する

2022年度 後期

2単位

言語文化論方法論 (J)

野田 春美

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、研究科修士課程のDPに示されている、「自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる」ことを目的とします。具体的には、中上級の日本語教育で取り上げられる項目について、コーパスを活用して、適切な例文を作る方法を学びます。

< 到達目標 >

1 日本語教育研究分野におけるコーパスの活用方法を説明できる(知識)

2 コーパスを活用した例文づくりを実践できる(技能)

< 授業の進め方 >

コーパスを活用した例文づくりについて、論文内容を把握したうえで、実践します。

< 履修するにあたって >

(1) やむをえず欠席する場合は、Eメールなどで連絡すること。

(2) 日本語学および日本語教育についての基礎知識があることを前提とする。

< 授業時間外に必要な学修 >

毎回、事前に授業で扱う箇所を読み、例文を試作してから授業に臨むこと。(1時間程度)

< 提出課題など >

受講生が毎回交代で、各章の概要をまとめた配布資料を準備する。

学期末にはレポートを課す。レポートは希望に応じ、コメントを入れて返却する。

< 成績評価方法・基準 >

授業への参加態度(配布資料作成を含む)70%、期末レポート30%で評価する。なお、期末レポートが締切日までに提出されない場合は、評価の対象としない。

< テキスト >

山内博之・中俣尚己(2017)『コーパスから始まる例文作り』くろしお出版(2,400円+税)

< 参考図書 >

必要に応じて紹介する。

< 授業計画 >

導入 必要な基礎知識を確認する。

第2回

「コーパスを活用した例文づくり」の趣旨の把握
序章 コーパスを活用した例文作りのための研究をど

う進めるか」の内容確認

第3回

方法論の把握と実践1 「第1章 話題・対象を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第4回

方法論の把握と実践2 「第2章 状況・場合を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第5回

方法論の把握と実践3 「第3章 時を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第6回

第5回までの内容の確認 第5回までの内容の理解を確認します。

第7回

方法論の把握と実践4 「第4章 様子・予想・傾向を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第8回

方法論の把握と実践5 「第5章 条件・逆接条件を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第9回

方法論の把握と実践6 「第6章 原因・理由を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第10回

方法論の把握と実践7 「第7章 逆接を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第11回

第7回～第10回の内容の確認 第7回～第10回までの内容の理解を確認します。

第12回

方法論の把握と実践8 「第8章 意志・願望・判断を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第13回

方法論の把握と実践9 「第9章 伝聞を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第14回

方法論の把握と実践10 「第10章 否定を表す表現」の内容確認と例文作り実践

第15回

まとめ 講義の内容をふりかえり、各自のレポートのテーマと進め方を確認します。

2022年度 前期

1単位

社会関係論ワークショップ

用田 政晴

< 授業の方法 >

講義・演習・実習

< 授業の目的 >

本授業においては、本学大学院修士課程におけるディブ

ロマ・ポリシーにある「広い視野に立って深い学識を備え、専攻分野における研究または高度な専門性を必要とする職業を担うための知識や技能を身につける」（知識・技能）ために、「高度な知識や技能を活用して、課題を発見し、多角的に考察して解決の方法を見出すことができる」（思考・判断・表現）ことを目指します。

そして、広く人文科学研究全般に有効となる「地域における有効な歴史遺産保存と独自の文化政策を確立する調査・分析などの方法論を実践的に学ぶ」ことをこの授業では社会関係論ワークショップと呼んでいきます。

<到達目標>

文化財をめぐる法律・法令等、博物館・図書館等の社会教育施設、地域の開発と発掘調査、遺跡の保存・活用など主に歴史環境をめぐる社会の制度的な側面を中心に分析して、フィールドあるいはフィールドワークへとつなげます。そして、地域独自の実践的な歴史遺産保存論と文化政策論の立案を目指します。

<授業のキーワード>

文化政策 歴史環境 文化財保護 発掘調査 遺跡公園 博物館

<授業の進め方>

当初は、講義形式の中で事例をいくつか紹介し、問題の設定、調査・分析方法、結論と今後の課題などを見ていくと同時に、論文の書き方や体裁など研究者としての基礎的な部分を実践の中で学びます。また、学外でのフィールドワーク、社会教育施設研修を2~3箇所で行います（未定）。その後、新聞・雑誌・文献・ウェブなどから課題を検索し、各自で調査・分析しながら、最終的に小論文執筆と様々な形での発表（口頭、論文、ポスターセッションなど）を試行していきます。

<履修するにあたって>

実際のフィールドワークを行うにあたって、必要な交通費は各自負担となり、また授業を土日に振り替えることがあります。

<授業時間外に必要な学修>

新聞やテレビ、インターネットなどからの情報の中から、歴史、文化遺産、地域社会に関する出来事の意味や問題点を見つける姿勢が必要となります。そんな時間を毎日30分から1時間ほどを授業の予習と復習に充ててください。

<提出課題など>

授業後半は、毎回、発表資料の配布を求めます。また、最終的に成果物として小論文を提出していただきます。毎回の資料や成果物等については、授業中に論評するなどのフィードバックを行います。

<成績評価方法・基準>

授業で提出を求める資料40%、最終小論文40% 授業参加への積極性など20%。

最終小論文についての詳細は、授業の中で改めて説明します。

<テキスト>

使用しません。

<参考図書>

田中 琢『考古学で現代を見る』（岩波現代文庫）岩波書店、2015年

田中 琢・佐原 真『考古学の散歩道』（岩波新書）岩波書店、1993年

藤尾慎一郎『日本の先史時代』（中公新書）中央公論新社、2021年

小畑弘己ほか『ジュニア日本の歴史 国のなりたち』小学館、2010年

<授業計画>

ガイダンス 教員・受講生の自己紹介、授業の進め方、課題、研究のルール・マナー、成績評価などについての案内・説明を行います。

第2回

論文作成の基本 タイトル、構成、文体、漢字とひらがな表記、図面・写真の掲載、引用・文献表記、差別表現、著作権などの基本的事項を学びます。

第3回

フィールドワーク（1） 神戸市垂水区の五色塚古墳と資料館を訪問し（予定）、遺跡の保存と遺跡公園・資料館の実態を学びます。

第4回

研究調査事例（1） 教員が課題抽出、分析・調査、報告などの事例（1）を紹介します。

第5回

研究調査事例（2） 教員が課題抽出、分析・調査、報告などの事例（2）を紹介します。

第6回

研究調査事例（3） 教員が課題抽出、分析・調査、報告などの事例（3）を紹介します。

第7回

研究課題の検索・設定 この授業時までに新聞・文献・インターネット等をもとに地域社会の問題を抽出しておき、この回に研究課題となるか、全員でそれぞれのテーマ案を検討します。

第8回

フィールドワーク（2） 可能であれば、神戸市西区の吉田王塚古墳と吉田郷土館を訪ね、文化庁の管轄下にある五色塚古墳と宮内庁の管理下にある陵墓参考地の王塚古墳の違いと共通項を学びますが、学内での講義形式に振り替える場合もあります。

第9回

調査・研究作業（1） 先行研究の分析と取りまとめ、文献検索、資料収集と整理、分析と解釈などを行います。

第10回

調査・研究作業（2） 先行研究の分析と取りまとめ、文献検索、資料収集と整理、分析と解釈などを行います。

第11回

調査・研究作業(3) 先行研究の分析と取りまとめ、文献検索、資料収集と整理、分析と解釈などを行います。
第12回

調査・研究作業(4) 先行研究の分析と取りまとめ、文献検索、資料収集と整理、分析と解釈などを行います。
第13回

フィールドワーク(3) 播磨町にある兵庫県立考古博物館・兵庫県まちづくり技術センター・播磨町郷土資料館および大中遺跡公園を訪ね、文化財の保護・保存の総合的な在り方の実態を知る。

第14回

フィールドワーク(補足)と小論文作成(1) 橋の科学館、野島断層保存館、竹中大工道具館など身近にある小規模博物館を概観し、博物館・資料館の見方・評価の仕方を知る一方で、小論文作成準備を行う。

第15回

小論文作成(2)と研究発表 各自の課題について小論文を取りまとめ、必要な方法で発表を行い、全員で批評・評価してみます。

2022年度 前期～後期

4単位

社会関係論演習(2年次)

金 益見

<授業の方法>

対面授業、ディスカッション、発表

<授業の目的>

社会関係論方法論 では、社会関係を社会的に捉えるために、まずは論文をいくつか読みます。

その中で、代表的な理論をいくつか紹介し、それを現代の社会関係につなげて考えていきます。

後半は、前半に学んだ理論と受講生の研究テーマを結びつけた発表を行います。

講義を通して、人文学部ディプロマポリシーに掲げられた、「複数の分野の基礎知識を教養として身につけている。」および「獲得した知識と体験と技能を活用して、自らが設定した課題や問題点を論理的な分析と考察をとおして解決・解明へと導くことができる。」ことが可能になります。

<到達目標>

社会的視点を養う

学んだ理論を自身の研究に当てはめ、社会構造や問題点を明らかにする力を養う

<授業の進め方>

授業は、前半は論文を元にした議論が中心です。

後半は、履修学生の発表を中心に行います。

発表する際は、発表用パワーポイント、発表の流れと関連資料等を整理したレジュメを作成してください。

<授業時間外に必要な学修>

前半は、論文講読を行いますので、指定された論文を必ず読み込んできてください。後半は発表がありますので、その準備が必要です。

学習に必要な時間は、論文を読むスピードにもよりますが1? 3時間、発表前は4? 6時間を要することもあると思います。

<提出課題など>

毎回授業内容の感想を出席カードに書いてもらいます。記入された内容は、受講者の理解を深めるために、次の授業のはじめに共有します。

<成績評価方法・基準>

出席20点、毎回のディスカッションレポート30点、発表50点、合計100点満点で評価します。

<テキスト>

なし

<授業計画>

ガイダンス これからの授業のやり方や評価方法を説明します。また、3回目から始まる論文講読のための論文を紹介します。

第2回

社会学とは どのような立場や関心からでも共通して必要とされる社会学の基本的な考え方について、説明します。

第3回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第4回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第5回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第6回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第7回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第8回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第9回

発表準備 次回からの発表にむけての準備をします。

第10回

発表 受講生の発表を通して、社会的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第11回

発表 受講生の発表を通して、社会的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第12回

発表 受講生の発表を通して、社会的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第13回

発表 受講生の発表を通して、社会的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第14回

発表 受講生の発表を通して、社会学的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第15回

全体のまとめ これまでの授業で学んだことを振り返り、要点の整理をします。

2022年度 前期～後期

4単位

社会関係論演習（1年次）

金 益見

< 授業の方法 >

対面授業、ディスカッション、発表

< 授業の目的 >

社会関係論方法論 では、社会関係を社会的に捉えるために、まずは論文をいくつか読みます。

その中で、代表的な理論をいくつか紹介し、それを現代の社会関係につなげて考えていきます。

後半は、前半に学んだ理論と受講生の研究テーマを結びつけた発表を行います。

講義を通して、人文学部ディプロマポリシーに掲げられた、「複数の分野の基礎知識を教養として身につけている。」および「獲得した知識と体験と技能を活用して、自らが設定した課題や問題点を論理的な分析と考察をとおして解決・解明へと導くことができる。」ことが可能になります。

< 到達目標 >

社会学的視点を養う

学んだ理論を自身の研究に当てはめ、社会構造や問題点を明らかにする力を養う

< 授業の進め方 >

授業は、前半は論文を元にした議論が中心です。

後半は、履修学生の発表を中心に行います。

発表する際は、発表用パワーポイント、発表の流れと関連資料等を整理したレジュメを作成してください。

< 授業時間外に必要な学修 >

前半は、論文講読を行いますので、指定された論文を必ず読み込んでください。後半は発表がありますので、その準備が必要です。

学習に必要な時間は、論文を読むスピードにもよりますが1? 3時間、発表前は4? 6時間を要することもあると思います。

< 提出課題など >

毎回授業内容の感想を出席カードに書いてもらいます。記入された内容は、受講者の理解を深めるために、次の授業のはじめに共有します。

< 成績評価方法・基準 >

出席20点、毎回のディスカッションレポート30点、発表50点、合計100点満点で評価します。

< テキスト >

なし

< 授業計画 >

ガイダンス これからの授業のやり方や評価方法を説明します。また、3回目から始まる論文講読のための論文を紹介します。

第2回

社会学とは どのような立場や関心からでも共通して必要とされる社会学の基本的な考え方について、説明します。

第3回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第4回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第5回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第6回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第7回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第8回

論文講読 代表的な論文を読み、それを元に議論します。

第9回

発表準備 次回からの発表にむけての準備をします。

第10回

発表 受講生の発表を通して、社会学的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第11回

発表 受講生の発表を通して、社会学的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第12回

発表 受講生の発表を通して、社会学的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第13回

発表 受講生の発表を通して、社会学的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第14回

発表 受講生の発表を通して、社会学的アプローチがどのように活かせるのかを検討していきます。

第15回

全体のまとめ これまでの授業で学んだことを振り返り、要点の整理をします。

2022年度 前期

2単位

社会関係論特殊講義

矢嶋 巖

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

人間は、集団で集落を形成し、社会生活を営んできた。本講義は、人間が生活の舞台としてきた村落、都市に注目する。村落では、もともと農業や林業、漁業といった第一次産業を主な生業として生計を立ててきたが、現代日本の村落居住者は、村落外で第二次・第三次産業に就業している場合が少なくない。一方、都市では第二次・第三次産業が発達し、とくに産業革命以降、都市は大規模化してきた。現代日本では、都市人口が過半を占めるに至っている。本講義は、近世、近代、現代にかけての日本の村落、都市化地域、歴史的都市、都市を取り上げ、その地域構造の変貌について論じ、日本の都市と村落がどのようにして現在の姿に至ったのか、先行研究に基づいて理解することを目的とする。具体的には、村落において環境がどのように利用されて生業が営まれ生活の舞台とされてきたのか、高度経済成長期に生じた著しい都市化がいかなる問題を生じさせたのか、第二次世界大戦後、日本の歴史的都市において景観や文化がいかに破壊され、いかに保存されようとしているのか、そして、近代において産業革命の進展にともない形成された巨大都市において発生した種々の都市問題にどのような政策で対応しようとしたのか、研究書をもとに事例を紹介する。これにより、人間文化学研究科のディプロマポリシーにある、自ら発見した問題に対する広い視野とさまざまな角度からの検討を行い、妥当な解決への道筋を提示するための能力の修得を目指す。

<到達目標>

文献読解力を修得する。

現代の村落、都市化地域、歴史的都市、都市を構成する要素の意味を読み解く能力を修得する。

応用的フィールドワークの実践能力を修得する。

<授業の進め方>

研究書をもとに、村落における生業と環境との関係、高度経済成長期に生じた著しい都市化がもたらした問題、第二次世界大戦後、伝統的景観が破壊されてきた日本の歴史的都市における景観や文化の保存の取り組み、近代において産業革命の進展にともない形成された巨大都市における種々の都市問題への対策としての都市政策について、研究書をもとに事例を紹介する。なお、研究書は受講生の研究分野によって適宜変更する。また、村落、都市化地域、歴史的都市、都市についての理解を深めるため、事例となる地域を実際に訪れて観察するフィールドワークを土日祝日に実施する。

<履修するにあたって>

文献発表とフィールドワーク参加とを必須とする。

<授業時間外に必要な学修>

授業で担当する内容について事前研究を行ない、発表することを課し、1時間程度が見込まれる。授業後に1時間程度の復習が必要である。また、学外フィールドワークへの参加のため、一定の時間を要する。

<提出課題など>

事前研究内容の発表、フィールドワークレポート、研究総括レポート。事前研究内容の発表は、授業時に内容について批評する。フィールドワークレポートは、次の講義において、内容について批評する。研究総括レポートは批評を返却する。

<成績評価方法・基準>

最終レポート70%、授業ごとに実施する小レポート30%の割合で評価します。

<参考図書>

神田 孝治・森本 泉・山本理佳編（2021）『現代観光地理学への誘いー観光地を読み解く視座と実践』ナカニシヤ出版

河野通博（1991）『光と影の庶民史 瀬戸内に生きたびと』古今書院

矢嶋 巖（2013）『生活用水・排水システムの空間的展開』人文書院

鯉坂学・小松秀雄編（2008）『京都の「まち」の社会学』世界思想社

松本 茂章編著（2020）『文化で地域をデザインする：社会の課題と文化をつなぐ現場から』学芸出版社

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹（2008）『モダン都市の系譜 地図から読み解く社会と空間』ナカニシヤ出版

<授業計画>

導入 本講義の方針について説明する。

第2回

兼業化と村落の変貌 その1 研究書を精読し、瀬戸内の村落社会に生きた人々の暮らしの変貌について考える。

第3回

兼業化と村落の変貌 その2 研究書を精読し、瀬戸内の村落社会に生きた人々の暮らしの変貌について考える。

第4回

兼業化と村落の変貌 その3 研究書を精読し、瀬戸内の村落社会に生きた人々の暮らしの変貌について考える。

第5回

人口急増に見舞われた都市化地域 その1 研究書を精読し、人口急増に見舞われた京阪神大都市圏の郊外都市に発生した問題を事例に、都市化について理解する。

第6回

人口急増に見舞われた都市化地域 その2 研究書を精読し、人口急増に見舞われた京阪神大都市圏の郊外都市に発生した問題を事例に、都市化について理解する。

第7回

人口急増に見舞われた都市化地域 その3 研究書を精読し、人口急増に見舞われた京阪神大都市圏の郊外都市に発生した問題を事例に、都市化について理解する。

第8回

歴史的都市の破壊と保存 その1 専門書を精読し、第二次世界大戦後、伝統的景観が破壊されてきた日本の歴史的都市における景観や文化の保存の取り組みについて

理解する。

第9回

歴史的都市の破壊と保存 その2 専門書を精読し、第二次世界大戦後、伝統的景観が破壊されてきた日本の歴史的都市における景観や文化の保存の取り組みについて理解する。

第10回

歴史的都市の破壊と保存 その3 専門書を精読し、第二次世界大戦後、伝統的景観が破壊されてきた日本の歴史的都市における景観や文化の保存の取り組みについて理解する。

第11回

都市政策 その1 研究書を精読し、近代において産業革命の進展にともない形成された巨大都市における種々の都市問題への対策としての都市政策の意義について明らかにする。

第12回

都市政策 その2 研究書を精読し、近代において産業革命の進展にともない形成された巨大都市における種々の都市問題への対策としての都市政策の意義について明らかにする。

第13回

都市政策 その3 研究書を精読し、近代において産業革命の進展にともない形成された巨大都市における種々の都市問題への対策としての都市政策の意義について明らかにする。

第14回

都市政策 その4 研究書を精読し、近代において産業革命の進展にともない形成された巨大都市における種々の都市問題への対策としての都市政策の意義について明らかにする。

第15回

日本における都市・村落の成り立ち 講義を振り返り、近世、近代、現代にかけての日本の村落、都市化地域、歴史的都市、都市の変貌について総括する。

2022年度 後期

2単位

社会関係論特殊講義

金 益見

< 授業の方法 >

講義形式（前半）、講読・議論（後半）

< 授業の目的 >

ピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』を購読します。

なぜ「格差」や「階級」は生まれるのか。それはどのようなメカニズムで機能し続けているのか。

ブルデューの研究から、それらの問題を紐解き、現代社会の問題み繋げて議論したいと思います。

ここでは、人文学科のディプロマ・ポリシーに示された「獲得した知識と体験と技能を活用して、自らが設定した課題や問題点を論理的な分析と考察をとおして解決・解明へと導くことができる」および「人文学の知見にもとづき、知的好奇心をもって、自立的に深く学修できる」能力を養います。

< 到達目標 >

社会学的視点を養う。

難解な文章を読み解く力をつける。

現代の社会問題を、理論を用いて構造的に理解する力をつける。

< 授業の進め方 >

前半は講義形式で、後半は受講生と共に読書会のような形で進めていきたいと思えます。

< 授業時間外に必要な学修 >

前半は講義なので、内容をノートにまとめ、復習を行ってください（1?2時間程度）。

後半は実際に本を読んで議論をするため、最初に作ったノートを参考にしながら『ディスタンクシオン』を熟読してきてください（ページは指定します）。本を読む速さにもよりますが、内容を理解するだけではなく、自分の意見も熟考して授業に臨んでいただきたいので、後半に入ると、毎週2?3時間程度は予習・復習に要すると思えます。

< 成績評価方法・基準 >

授業に参加する皆さんと共同で勉強していく形態をとりますから、積極的な姿勢を特に重視します。

授業への参加態度70%、発表30%をあわせて評価します。

< テキスト >

高価な本なので、『ディスタンクシオン』は図書館で借りてください。足りない分はこちらで用意します。

第6回の話し合いの中で、テキストが必要になれば、適宜指示します。

< 授業計画 >

ガイダンス 授業の進め方や評価方法について説明します。

第2回

「ハビトゥス」という概念 まず最初に、ブルデューという人物の背景に迫ります。

ピエール・ブルデューは、フランス南西部で郵便局員の息子として生まれました。階級社会の底辺に出自があるブルデューだからこそ、「ハビトゥス」という概念を編み出すことができたのかもしれませんが。後半では、「ハビトゥス」がどういった概念なのかを読み解いていきます。

第3回

「界」のメカニズム 前回は、私たちの趣味や趣向が、学歴や出身階層によっていかに規定されているかということ、を、「ハビトゥス」という概念から読み解きました。今回は、私たちが「趣味」を通して何を行っているかを、

「界」のメカニズムを解き明かしながら考えていきます。

第4回

「文化資本」について これまでの講義では、私たちが「ハビトゥス」を通して、言葉遣いや趣味といった文化能力をも相続していくことを明らかにしました。そうやって相続されたもののうち、経済的利益に転換できるものを「文化資本」と呼びます。

今回は、「文化資本」という概念を通して、文化がいかに人々の行為を規定し、社会に影響を及ぼしていくのかを考えていきます。

第5回

ブルデューが伝えたかったこととは ブルデューは、社会の構造とその生成のしくみを明らかにすることを目指しました。

そこで明らかになったのは、私たちが気づかずに内面化していたあらゆるものが階層に関わっていたということです。

そこでブルデューは、何を伝えたかったのか、これまでの講義を振り返りながら考えてきます。

第6回

読書会の方法 次回から始まる『ディスタンクシオン』の読書会について、担当回や方法を話し合います。

難解な箇所もあるので、テキストを併用しながら読んでいくかどうかを受講生と相談して決めます。

第7回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第8回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第9回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第10回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第11回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第12回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第13回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第14回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

第15回

『ディスタンクシオン』を読む 『ディスタンクシオン』を読み、その内容について議論します。

』を読み、その内容について議論します。

2022年度 前期

2単位

社会関係論方法論

金 益見

< 授業の方法 >

講義形式

< 授業の目的 >

社会関係論方法論 では、家族と社会をめぐる関係に着目します。

「家族」は社会を構成する基本単位でありながら、現在の家族観は大きく変貌してきています。

ひとり親家庭の増加、未婚化の進行、代理母出産等、家族関係も多様化・複雑化しており、社会システムも法整備もこうした現状に対応できていない状況です。

本講義では、現代の家族関係を取り巻く諸問題を取り上げ、その本質について考察します。また「家族」をキーワードに社会問題を考察する方法を学びます。

この授業を通じて、ディプロマ・ポリシーに基づき「人間の行動や文化に関する専門知識と技能を総合的、体系的に身につけている」および、「獲得した知識と体験と技能を活用して、自らが設定した課題や問題点を論理的な分析と考察をとおして解決・解明へと導くことができる」能力を養うことを目的とします。

< 到達目標 >

多様化する現代の家族、家族関係を理解できる

現代の家族を取り巻く問題の現状と課題について理解できる

社会問題を考察する方法論を身に付けることができる

< 授業の進め方 >

教員が作成するスライドに沿って講義すると共に、新聞記事やTV番組等を資料として話題提供していきます。授業は講義とともに演習形式でも行います。家族について調べたことを授業内で発表したり、現代家族を取り巻く問題についても同様に調べて発表を行っていただきます。

< 授業時間外に必要な学修 >

予習1時間、復習1時間程度必要です。

< 提出課題など >

毎回授業内容に関する課題を出し、出席カードに書いてもらいます。

記入された内容の一部は、受講者の理解を深めるために、次の授業のはじめに共有します。

また、発表の際は発表担当部分のレジюмеを必ず用意し提出してください。

< 成績評価方法・基準 >

発表70%、質問・議論への参加30%で評価します。発表日の無断欠席があった場合、評価無しとします。

<テキスト>

なし

<参考図書>

永田夏来, 松木洋人編『入門家族社会学』新泉社(2017)

<授業計画>

ガイダンス 授業の進め方や、成績評価についてお話し
します。研究倫理についても確認します。

第2回

家族とは何か 「家族とは何か」ということについて、
ディスカッションしながら考えていきます。

第3回

日本社会の家族変動 日本の家族はどう変化してきた
のか。「いえ」の概念の移り変わりから現代の家族にい
たるまでを数回に分けてレクチャーします。

第4回

日本社会の家族変動 明治期の「家」から戦後の新し
い家族の誕生までをレクチャーします。

第5回

日本社会の家族変動 高度経済成長期の家族から現代
の家族までをレクチャーします。

第6回

家族を取り巻く問題について 今までレクチャーしてき
た家族変動の中で起きてきた問題と、現在の家族を取り
巻く問題をディスカッションします。

その中でそれぞれが関心のあるテーマを見つけ出し、発
表内容・発表日を決めます。

第7回

家族を取り巻く問題(方法論) 家族を取り巻く問題
について、家族社会学の知見を元に、その方法論を学び
ます。

第8回

家族を取り巻く問題(方法論) 家族を取り巻く問題
について、家族社会学の知見を元に、その方法論を学び
ます。

第9回

家族を取り巻く問題(方法論) 家族を取り巻く問題
について、家族社会学の知見を元に、その方法論を学び
ます。

第10回

家族を取り巻く問題(方法論) 家族を取り巻く問題
について、家族社会学の知見を元に、その方法論を学び
ます。

第11回

発表 受講生が関心のある家族を取り巻く社会問題に
ついて、その詳細を調べて発表します。

第12回

発表 受講生が関心のある家族を取り巻く社会問題に
ついて、その詳細を調べて発表します。

第13回

発表 受講生が関心のある家族を取り巻く社会問題に
ついて、その詳細を調べて発表します。

第14回

発表 受講生が関心のある家族を取り巻く社会問題に
ついて、その詳細を調べて発表します。

第15回

総括 これまでの授業の内容を振り返りながら、これか
らの家族関係についてディスカッションします。

2022年度 後期

2単位

社会関係論方法論

矢嶋 巖

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

人間は、集団で集落を形成し、社会生活を営んできた。
本講義は、人間が生活の舞台としてきた村落、都市に注
目する。深刻な過疎・過密化、人口減少、グローバル化
の進展のなかで、日本の都市と村落は著しい変貌を示し
ている。本講義は、近年刊行された村落や都市の実像に
迫る研究書に基づき、さまざまな外的・内定要因に翻弄
される日本の都市・村落の実情を理解することを目的と
する。これにより、人間文化学研究科のディプロマポリ
シーにある、自ら発見した問題に対する広い視野とさま
ざまな角度からの検討を行い、妥当な解決への道筋を提
示するための能力の修得を目指す。

<到達目標>

文献読解力を修得する。

現代の都市・村落の姿を読み解く能力を修得する。

応用的フィールドワークの手法修得に迫る。

<授業の進め方>

受講生が近年刊行された都市および村落の研究書を読
解して授業において発表し、深刻な過疎・過密化、人口
減少、グローバル化の進展のなかで、変貌する現代日本
の都市や村落の実像に迫る。研究書は受講生の関心領域
に合わせて選定するが、なければ参考図書を使用する。

<履修するにあたって>

文献研究発表とフィールドワーク参加を必須とする。

<授業時間外に必要な学修>

テキストで取り上げる内容について事前研究を行ない、
発表することを課し、1時間程度が見込まれる。授業後
に1時間程度の復習が必要である。必要に応じて、本講
義に関係するフィールドワークへの参加を求めたり、学
術学会の研究会出席を求めたりすることがある。

<提出課題など>

事前研究内容の発表、研究総括レポート。事前研究内
容の発表は、授業時に内容について批評する。研究総括レ
ポートは批評を返却する。

< 成績評価方法・基準 >

研究書の読解発表60%、最終レポート40%

< 参考図書 >

家中茂・藤井正・小野達也・山下博樹（2019）『新版地域政策入門 地域創造の時代に』ミネルヴァ書房

神谷浩夫（2018）『ベーシック都市社会地理学』ナカニシヤ出版

田中治彦・枝廣淳子・久保田崇（2019）『SDGsとまちづくり 持続可能な地域と学びづくり』学文社

堤研二（2015）『人口減少・高齢化と生活環境新装版 山間地域とソーシャル・キャピタルの事例に学ぶ』九州大学出版会

中澤高志（2019）『住まいと仕事の地理学』旬報社

中藤康俊（2018）『過疎地域再生の戦略改訂版』大学教育出版

松本 茂章編著（2020）『文化で地域をデザインする 社会の課題と文化をつなぐ現場から』学芸出版社

吉田国光（2015）『農地管理と村落社会 社会ネットワーク分析からのアプローチ』世界思想社

山田浩之・赤崎盛久編（2019）『京都から考える都市文化政策とまちづくり』ミネルヴァ書房

< 授業計画 >

導入 本講義の方針について説明する。

第2回

村落に関する研究書の読解 その1 現代日本の村落に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第3回

村落に関する研究書の読解 その2 現代日本の村落に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第4回

村落に関する研究書の読解 その3 現代日本の村落に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第5回

村落に関する研究書の読解 その4 現代日本の村落に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第6回

村落に関する研究書の読解 その5 現代日本の村落に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第7回

村落に関する研究書の読解 その6 現代日本の村落に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第8回

村落に関する研究書の読解 その7 現代日本の村落に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第9回

都市に関する研究書の読解 その1 現代日本の都市に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。

第10回

都市に関する研究書の読解 その2 現代日本の都市に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。
第11回

都市に関する研究書の読解 その3 現代日本の都市に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。
第12回

都市に関する研究書の読解 その4 現代日本の都市に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。
第13回

都市に関する研究書の読解 その5 現代日本の都市に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。
第14回

都市に関する研究書の読解 その6 現代日本の都市に関する研究書を解読して報告し、内容について検討する。
第15回

現代の都市・村落問題 講義を振り返り、取り上げた研究書から明らかになった現代日本の都市および村落が抱えている問題について総括する。

2022年度 後期

1単位

社会構造論ワークショップ

三田 牧

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本授業では、人類学的手法を用いながら調査・研究を行うスキルを学びます。

この授業は人間文化学研究科のディプロマ・ポリシー「自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる。」を目指すものです。

社会構造論講座における位置づけとしては、フィールド調査をもとにした研究力を養う場です

< 到達目標 >

人類学的フィールドワークを用いて、自分の関心を深めることができる。

「人から学ぶ」調査の基礎を身に付けることができる。

< 授業のキーワード >

人類学的フィールドワーク

< 授業の進め方 >

それぞれが課題をたて、人類学的なフィールドワークを用いた研究を立案し、実施します。その成果は各自発表し、授業で合評します。何をテーマにするかは、大学院生の研究テーマに合わせて調整することができます。

< 授業時間外に必要な学修 >

自分の研究課題をたて、フィールドワークを用いた調査を実際に行ってもらいます。（60時間程度）

< 提出課題など >

研究成果は授業内で発表してもらいます。合評し、コメントします。

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組み、その内容を評価します。割合はおおよそ以下の通りです。プレゼンテーションの充実度・完成度40%、授業への積極的参加度20%、小論文の充実度・完成度40%。

< テキスト >

なし

< 参考図書 >

授業において適宜紹介します

< 授業計画 >

イントロダクション、人類学的研究について 授業について解説します。人類学的研究の調査方法について解説します。

第2回

人類学的調査研究の入門書を読む 人類学的調査方法に関し、入門書を読みます

第3回

研究倫理・研究計画 研究倫理について学びます。また、この授業において取り組む課題を各自考え、研究計画を立てます。

第4回

聞き取り調査(1) 人類学の調査スキルの一つである聞き取り調査について、練習します。

第5回

聞き取り調査(2) 聞き取り調査の練習をします

第6回

フィールド調査 外に出て、社会事象の観察をします

第7回

観察してきたことの報告 観察してきたことの報告をします

第8回

先行研究の調査(1) 課題に関し、先行研究を収集します

第9回

先行研究の調査(2) 課題に関し、先行研究を収集します

第10回

データの整理・分析(1) これまで集めてきたデータや資料の整理・分析をします

第11回

データの整理・分析(2) これまで集めてきたデータや資料の整理・分析をします

第12回

小論文の作成(1) この授業で取り組んできた課題について小論文を執筆します。

第13回

小論文の作成(2) この授業で取り組んできた課題につ

いて小論文を執筆します。

第14回

小論文の作成(3) この授業で取り組んできた課題について小論文を執筆します。

第15回

研究発表と合評 研究の発表と合評をします

2022年度 前期～後期

4単位

社会構造論演習 (2年次)

三田 牧

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この授業は、学生一人一人が修士論文に向けた研究を行っていくことをサポートするものであり、人類学的研究の手法、先行研究の学び方、問題の立て方、フィールドワーク、および得られたデータの分析、論文の執筆など、総合的に研究を遂行する力を身につけることを目的とします。

人間文化学研究科ディプロマ・ポリシーのなかでも、「自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる。」および人間行動論専攻のディプロマ・ポリシー「実践的かつ柔軟な思考能力を養い、社会のさまざまな分野で適切な貢献ができる」をめざします。

なお、本授業は社会構造論専攻における研究指導の場という位置づけです。

< 到達目標 >

適切な研究課題および研究計画を立て、フィールドワークに基づいた人類学的研究を実践できる。

自らの研究課題に関連して先行研究でどのような議論がなされてきたかを適切にレビューできる。

調査で得たデータや知見を適切に組み立て、論文に結実させることができる。

< 授業のキーワード >

フィールドワーク、文献調査、論文執筆

< 授業の進め方 >

ゼミですので、学生の研究の進捗状況に合わせて行います。フィールド調査および文献調査の内容をいかに論文に結実させていくか、そこへの指導が中心です。

< 授業時間外に必要な学修 >

研究に関連する文献のリーディング(1日30分、1週間に2時間程度)

論文の執筆(80時間程度)

研究成果報告の準備(20時間程度)

< 提出課題など >

研究の成果を随時報告してもらいます。

授業後半に関しては、執筆途中の論文をほぼ毎週提出し

てもらいます。

双方とも、随時コメントをして指導します。

<成績評価方法・基準>

論文の充実度 90%

研究報告など授業内の発表の充実度 10%

<テキスト>

なし

<参考図書>

なし

<授業計画>

研究倫理 / 研究の進捗状況報告 研究倫理についてレクチャーします。また、研究の進捗状況を聞き、今後の研究計画を立てます。

第2回

調査内容の検討 これまでに得てきた調査データをもとに、何が言えるか、また、何が必要か検討します

第3回

先行研究のまとめ(1) 先行研究をまとめます

第4回

先行研究のまとめ(2) 先行研究をまとめます

第5回

先行研究のまとめ(3) 先行研究をまとめます

第6回

先行研究のまとめ(4) 先行研究をまとめます

第7回

論文指導(1) 修士論文執筆指導や添削をします

第8回

論文指導(2) 修士論文執筆指導や添削をします

第9回

論文指導(3) 修士論文執筆指導や添削をします

第10回

論文指導(4) 修士論文執筆指導や添削をします

第11回

研究発表の準備(1) 研究中間発表に向けてプレゼンテーションの準備をします

第12回

研究発表の準備(2) 研究中間発表に向けてプレゼンテーションの準備をします

第13回

研究発表の準備(3) 研究中間発表に向けてプレゼンテーションの準備をします

第14回

研究発表の準備(4) 研究中間発表に向けてプレゼンテーションの準備をします

第15回

研究計画の再検討 夏の調査に向けて、研究計画を練り直します

第16回

夏季休暇中の調査進捗状況の報告 夏の間、研究がどのように進んだか、報告をてもらいます

第17回

論文指導(5) 修士論文執筆指導や添削をします

第18回

論文指導(6) 修士論文執筆指導や添削をします

第19回

論文指導(7) 修士論文執筆指導や添削をします

第20回

論文指導(8) 修士論文執筆指導や添削をします

第21回

論文指導(9) 修士論文執筆指導や添削をします

第22回

論文指導(10) 修士論文執筆指導や添削をします

第23回

論文指導(11) 修士論文執筆指導や添削をします

第24回

論文指導(12) 修士論文執筆指導や添削をします

第25回

論文指導(13) 修士論文執筆指導や添削をします

第26回

論文指導(14) 修士論文執筆指導や添削をします

第27回

論文指導(15) 修士論文執筆指導や添削をします

第28回

論文指導(16) 修士論文執筆指導や添削をします

第29回

論文指導(17) 修士論文執筆指導や添削をします

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

社会構造論演習 (1年次)

三田 牧

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この授業は、学生一人一人が修士論文に向けた研究を行っていくことをサポートするものであり、人類学的研究の手法、先行研究の学び方、問題の立て方、フィールドワーク、および得られたデータの分析など、総合的に研究を遂行する力を身につけることを目的とします。

人間文化科学研究科ディプロマ・ポリシーのなかでも、「自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる。」および人間行動論専攻のディプロマ・ポリシー「実践的かつ柔軟な思考能力を養い、社会のさまざまな分野で適切な貢献ができる」をめざします。

なお、本授業は社会構造論専攻における研究指導の場という位置づけです。

<到達目標>

適切な研究課題および研究計画を立て、フィールドワークに基づいた人類学的研究を実践できる。

自らの研究課題に関連して先行研究でどのような議論がなされてきたかを適切にレビューできる。

<授業のキーワード>

フィールドワーク、文献調査、論文執筆

<授業の進め方>

ゼミですので、学生の研究の進捗状況に合わせて行います。適切な研究課題と研究計画を立てるところからはじめ、実際に研究を開始してからは、(文献・フィールド)調査の成果報告と、それへの指導となります。

<履修するにあたって>

自律的に研究を進めていくことを求めます。ゼミにおいて助言をしますが、研究を進めるのは学生自身であることを忘れないでください。

<授業時間外に必要な学修>

研究に関連する文献のリーディング(1日30分、1週間に2時間程度)

エッセイや予備論文の執筆(1週間に2時間程度)

文献リストの作成(1週間に1時間程度)

研究成果報告の準備(1週間に1時間程度)

<提出課題など>

研究の成果を随時報告してもらいます。

文献リストを作成していきます。

研究プロポーザルを作成します。

エッセイや予備論文を執筆します。

これらは、口頭発表、作成物の提出、いずれかの形で報告してもらいます。

こちらからは、随時コメント、および指導します。

<成績評価方法・基準>

研究計画の実現性・具体性 10%

エッセイ(文章の正確さ) 20%

研究報告書の充実度 40%

研究報告など授業内の発表の充実度 30%

<テキスト>

なし

<参考図書>

なし

<授業計画>

卒業研究の振り返りと関心の所在の表明 卒業研究を振り返ります。また、次のステップとして何を研究の課題にするか、検討します

第2回

研究計画の策定。研究倫理 研究計画を策定します。研究倫理について学びます。

第3回

文献調査・講読(1) 研究課題に関連する文献リストを作成し、それらの読み込みを始めます。

第4回

文献調査・講読(2) 研究課題に関連する文献リストを作成し、それらの読み込みを始めます。

第5回

文献調査・講読(3) 研究課題に関連する文献リストを作成し、それらの読み込みを始めます。

第6回

研究の進捗状況報告およびエッセイの添削 研究の進捗状況を報告し、何が必要かを検討します。また、課題のエッセイについて、添削し、的確な文章の書き方の指導をします

第7回

文献講読(1) 先行研究論文を読みます

第8回

文献講読(2) 先行研究論文を読みます

第9回

文献講読(3) 先行研究論文を読みます

第10回

研究発表 研究成果の報告をします

第11回

論文の構想 修士論文の構想を練ります

第12回

文献講読(4)

先行研究論文を読みます

第13回

文献講読(5) 先行研究論文を読みます

第14回

文献講読(6) 先行研究論文を読みます

第15回

研究の進捗状況の報告およびエッセイの添削

調査計画の策定 研究の進捗状況を報告し、何が必要かを検討します。

また、課題のエッセイについて、添削し、的確な文章の書き方の指導をします

第16回

夏季休暇中に実施した調査の報告 夏季休暇中に実施した調査の報告をしてもらいます

第17回

データの整理・分析(1) 調査から得たデータの整理・分析をします

第18回

データの整理・分析(2) 調査から得たデータの整理・分析をします

第19回

データの整理・分析(3) 調査から得たデータの整理・分析をします

第20回

予備論文の執筆(1) 修士論文の予備論文を執筆します

第21回

予備論文の執筆(2) 修士論文の予備論文を執筆します
第22回
予備論文の執筆(3) 修士論文の予備論文を執筆します
第23回
予備論文の執筆(4) 修士論文の予備論文を執筆します
第24回
予備論文の執筆(5) 修士論文の予備論文を執筆します
第25回
予備論文の執筆(6) 修士論文の予備論文を執筆します
第26回
文献講読(7) 先行研究論文を読みます
第27回
文献講読(8) 先行研究論文を読みます
第28回
文献講読(9) 先行研究論文を読みます
第29回
文献講読(10) 先行研究論文を読みます
第30回

2022年度 前期

2単位

社会構造論特殊講義

早木 仁成

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この科目は人間文化学研究科修士課程のDP1に示される知識・技能およびDP2に示される思考・判断・表現力の習得を目指しています。

人類は、霊長類のなかでも大型類人猿と同じグループに属しますが、600万～700万年前にチンパンジーやボノボとの共通の祖先から分かれて独自の進化の道を歩んできました。この授業では、過去の進化の過程で人類に刻み込まれた遺産について考えながら、人類の歴史と社会を再考します。

< 到達目標 >

・進化の過程で人類が獲得したものを説明することができる。

・人類の社会を成立させるさまざまな要因について説明することができる。

< 授業のキーワード >

霊長類、人類進化、社会の進化

< 授業の進め方 >

・受講者は、ジャレド・ダイヤモンド著『若い読者のための第3のチンパンジー：人間という動物の進化と未来』（草思社文庫、2015年）を分担して読み、それをレジュメ等にまとめて発表します。担当者が補足の解説を加えたのちに、受講者全員で討論をします。

< 履修するにあたって >

発表者は文献を熟読して、しっかりと説明できるように準備すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

発表者は文献を熟読してレジュメを作成することが必要です。

1回の授業に対して2時間程度の予習と復習が目安です。

< 提出課題など >

発表用レジュメ。口頭発表については、合評します。

< 成績評価方法・基準 >

発表50%、議論（質問や意見等の表明）50%

< テキスト >

テキストとして、

ジャレド・ダイヤモンド著『若い読者のための第3のチンパンジー：人間という動物の進化と未来』（草思社文庫、2015年）

を用います。

< 参考図書 >

なし

< 授業計画 >

イントロダクション 受講者の自己紹介の後、授業の計画について説明する。

第2回

ありふれた大型類人猿 人類の生物学上の位置づけについて確認する。

第3回

人類進化の概要 人類進化の概要を確認する。

第4回

奇妙なライフスタイル ヒトの性行動について考える。

第5回

奇妙なライフスタイル2 人種の起源について考える。

第6回

奇妙なライフスタイル3 老化について考える。

第7回

人間らしさ 言葉の誕生について考える。

第8回

人間らしさ2 芸術の誕生について考える。

第9回

人間らしさ3 農業がもたらした光と影を考える。

第10回

人間らしさ4 嗜好品について考える。

第11回

世界の征服者 最後のファーストコンタクト

第12回

世界の征服者2 家畜化について考える。

第13回

世界の征服者3 ジェノサイドについて考える。

第14回

一晩でふりだしに マダガスカル島、イースター島、新世界での絶滅について考える。

第15回

まとめ 人類の歴史から何を学ぶのかを考える。

2022年度 後期

2単位

社会構造論特殊講義

早木 仁成

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この科目は人間文化学研究科修士課程のDP1に示される知識・技能およびDP2に示される思考・判断・表現力の習得を目指しています。

人類は、霊長類のなかでも大型類人猿と同じグループに属しますが、600万～700万年前にチンパンジーやボノボとの共通の祖先から分かれて独自の進化の道を歩んできました。この授業では、過去の進化の過程で人類に刻み込まれた遺産について考えながら、人類の歴史と社会を再考します。

< 到達目標 >

・進化の過程で人類が獲得したものを説明することができる。

・人類の社会を成立させるさまざまな要因について説明することができる。

< 授業のキーワード >

霊長類、人類進化、社会の進化

< 授業の進め方 >

・受講者は、ユヴァル・ノア・ハラリ著『サピエンス全史(上)』(河出書房新社、2016年)を分担して読み、それをレジュメ等にまとめて発表します。担当者が補足の解説を加えたのちに、受講者全員で討論をします。

< 履修するにあたって >

発表者は文献を熟読して、しっかりと説明できるように準備すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

発表者は文献を熟読してレジュメを作成することが必要です。

1回の授業に対して2時間程度の予習と復習が目安です。

< 提出課題など >

発表用レジュメ。口頭発表については、合評します。

< 成績評価方法・基準 >

発表50%、議論(質問や意見等の表明)50%

< テキスト >

テキストとして、

ユヴァル・ノア・ハラリ著『サピエンス全史(上)』(河出書房新社、2016年)

を用います。

< 参考図書 >

なし

< 授業計画 >

イントロダクション 受講者の自己紹介の後、授業の計画について説明する。

第2回

霊長類とヒトの進化 人類の生物学上の位置づけについて確認する。

第3回

唯一生き延びた人類種 第1章をもとに、人類進化の概要を確認する。

第4回

虚構が協力を可能にした 第2章をもとに、虚構と協力について考える。

第5回

狩猟採集民の豊かな暮らし 第3章をもとに、狩猟採集生活について考える。

第6回

史上最も危険な種 第4章をもとに、人類の拡散と生物種の絶滅について考える。

第7回

認知革命 これまでの話をもとに、認知革命について再考する。

第8回

農耕がもたらした繁栄と悲劇 第5章をもとに、農耕の発生について考える。

第9回

神話による社会の拡大 第6章をもとに、神話という物語の意味を考える。

第10回

書記体系の発明 第7章をもとに、書記体系について考える。

第11回

想像上のヒエラルキーと差別 第8章をもとに、大規模な協力ネットワークを維持するための想像上の秩序について考える。

第12回

統一へ向かう世界 第9章をもとに、社会の大規模化について考える。

第13回

貨幣 貨幣の発明とその意味について考える。

第14回

帝国の出現 第11章をもとに、グローバル化と「私たち/彼ら」の対立について考える。

第15回

まとめ 人類の歴史から何を学ぶのかを考える。

2022年度 前期
2単位
社会構造論方法論
三田 牧

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この講義では、社会科学の研究姿勢において必要な批判的思考力を鍛えることを目的とします。今日的な話題をテーマとし、議論をしながら、思考を深めていきます。この授業は人間文化学研究科ディプロマポリシーの「自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる。」および人間行動論専攻ディプロマポリシー「広い学識と高度な専門知識ならびに適切な技能を用いて、現代社会の多様な要求にこたえることができる。」をめざします。

< 到達目標 >

一つの問題について、多角的視野から考えることができる。批判的思考を身に着けることができる。

< 授業のキーワード >

多角的視野、批判的思考

< 授業の進め方 >

学生同士のディスカッションや、発言の機会が多いです。積極的かつ主体的な参加を求めます。

< 授業時間外に必要な学修 >

期末課題に向けた情報収集や文献調査と、期末課題の執筆をしてもらいます。(計60時間程度)

< 提出課題など >

授業後にリアクションペーパーの提出を求めます。また、期末課題(小論文)を課します。

< 成績評価方法・基準 >

主体的参加 30パーセント

リアクションペーパー 30パーセント

期末課題 40パーセント

期末課題の成績評価基準：思考の深さ40パーセント/記述の適切さ 20パーセント/独自性 20パーセント/課題の理解 20パーセント

< テキスト >

特に指定しません

< 参考図書 >

随時紹介します

< 授業計画 >

イントロダクション この講義の進め方や内容について説明をします。また、教員と受講生のバックグラウンドを共有しつつ、一つの課題を異なる立場から多角的に考えるとはどういうことか、イメージトレーニングをしま

す

第2回

「歴史」再考1 様々な主体から見た「歴史」について、原爆の事例から考えます

第3回

「歴史」再考2 様々な主体から見た「歴史」について、原爆の事例から考えます

第4回

「歴史」再考3 様々な主体から見た「歴史」について、原爆の事例から考えます

第5回

「歴史」再考4 歴史表象をめぐる抗争について沖縄の事例から考えます

第6回

「歴史」再考5 歴史表象をめぐる抗争について沖縄の事例から考えます

第7回

「歴史」再考6 歴史表象をめぐる抗争について沖縄の事例から考えます

第8回

環境と技術と倫理1 技術と倫理について、遺伝子操作の事例から考えます

第9回

環境と技術と倫理2 技術と倫理について、遺伝子操作の事例から考えます

第10回

環境と技術と倫理3 地球温暖化の事例から、人間の暮らしと倫理について考えます

第11回

環境と技術と倫理4 地球温暖化の事例から、人間の暮らしと倫理について考えます

第12回

多文化共生1 多文化共生についてフランスの事例から考えます

第13回

多文化共生2 多文化共生について日本の問題を考えます

第14回

多文化共生3 多文化共生はいかに可能か、考えます

第15回

総括 世界の現代的問題についてどのような思考が可能か、ともに考えます

2022年度 後期

2単位

社会構造論方法論

早木 仁成

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この科目は人間文化学研究科の修士課程DP1に示される知識・技能およびDP2に示される思考・判断・表現力を習得することを目指しています。

授業のテーマは、霊長類の社会構造を探る方法を修得することです。自然環境の中に生きる霊長類社会の構造を探るためには、人類学のみならず、進化論、生態学、行動諸科学、認知諸科学等の諸分野の成果を取り入れながら、総合的な理解をめざすことが不可欠です。本講義では、霊長類学のパイオニア伊谷純一郎の足跡をたどり、学術雑誌に掲載されたいくつかの論文を購読しながら、霊長類社会を体系的に理解する方法の修得をめざします。

< 到達目標 >

- ・ 霊長類の野外調査のための計画を立てることができる。
- ・ 霊長類の社会構造に関する基礎的概念を説明することができる。
- ・ 霊長類の社会に関する基礎的文献をあげて説明することができる。

< 授業のキーワード >

霊長類学、野外調査、社会構造

< 授業の進め方 >

毎回、指定の文献を各自でまとめてきて発表し、その内容について議論をする。

< 履修するにあたって >

霊長類の社会を実際に研究する大学院生向けの授業ですので、霊長類の社会や行動に関する基礎的な知識をもっていることを前提としています。

発表者はレジュメ等を用意すること

< 授業時間外に必要な学修 >

受講者は論文を熟読してレジュメを作成することが必要です。

1回の授業に対して2時間程度の予習と復習が目安です。

< 提出課題など >

発表のレジュメ。口頭発表については、合評します。

< 成績評価方法・基準 >

発表60%、議論への参加（質問や意見など）40%で評価します。

< テキスト >

なし

< 参考図書 >

なし

< 授業計画 >

イントロダクション 受講者の自己紹介の後、授業の計画を説明します。

第2回

伊谷純一郎の足跡をたどる1 伊谷純一郎の霊長類の社会構造に関する研究の足跡をたどる。

第3回

伊谷純一郎の足跡をたどる2 伊谷純一郎の霊長類の

社会構造に関する研究の足跡をたどる。

第4回

伊谷純一郎の足跡をたどる3 伊谷純一郎の霊長類の社会構造に関する研究の足跡をたどる。

第5回

伊谷純一郎の足跡をたどる4 伊谷純一郎の霊長類の社会構造に関する研究の足跡をたどる。

第6回

伊谷純一郎の足跡をたどる5 伊谷純一郎の霊長類の社会構造に関する研究の足跡をたどる。

第7回

霊長類社会に関する文献を読む1 いくつかの霊長類社会に関する代表的な文献を読み、理解を深める。

第8回

霊長類社会に関する文献を読む2 いくつかの霊長類社会に関する代表的な文献を読み、理解を深める。

第9回

霊長類社会に関する文献を読む3 いくつかの霊長類社会に関する代表的な文献を読み、理解を深める。

第10回

霊長類社会に関する文献を読む4 いくつかの霊長類社会に関する代表的な文献を読み、理解を深める。

第11回

最新の論文を読む1 霊長類の社会と行動に関する最新の論文を読み、理解を深める。

第12回

最新の論文を読む2 霊長類の社会と行動に関する最新の論文を読み、理解を深める。

第13回

最新の論文を読む3 霊長類の社会と行動に関する最新の論文を読み、理解を深める。

第14回

最新の論文を読む4 霊長類の社会と行動に関する最新の論文を読み、理解を深める。

第15回

まとめ 受講者各自が授業に参加して修得した事柄について、発表してまとめる。

2022年度 前期

2単位

人間環境論特殊講義

香西 克俊

< 授業の方法 >

課題確認を含む講義

< 授業の目的 >

衛星リモートセンシングとその陸域応用について考える
輪読形式の双方向講義である。衛星リモートセンシングの特徴を理解しながら、土地利用、農業、林業、自然環境、災害などへの応用について考察する。(Diploma Po

licy 知識、技能、表現力)

<到達目標>

- ・衛星リモートセンシングの特徴について説明できる。
- ・様々な陸域応用分野の衛星画像について説明できる。
- ・他者を理解し、身勝手な解釈に陥らない思考ができる。
- ・協調的かつ建設的な議論ができる。

<授業のキーワード>

衛星リモートセンシング、陸域応用

<授業の進め方>

本や論文の輪読形式の授業

すべての特別警報または暴風警報発令の場合(大雨、洪水警報などは対象外)の本科目の取り扱いについて→授業を実施します。

ただし避難指示、避難勧告が発令されている場合はご自身の安全を最優先し、自治体の指示に従って行動してください。

<履修するにあたって>

- ・大学は「学びの場」であることを自覚して受講すること。
- ・輪読形式なので、各自の積極的な準備と議論参加が必要。

<授業時間外に必要な学修>

次の輪読ページの予習と前回の復習(2時間程度)

<提出課題など>

担当発表の説明資料

<成績評価方法・基準>

- ・授業参加状況40%、担当説明30%、期末レポート30%
- ・質疑応答などの積極的な受講姿勢が望まれる。
- ・2/3以上の出席が必要。
- ・遅刻回数は出席回数に関係ないが、遅刻したときは減点する。
- ・冠婚葬祭、急病、部活、就活、教育実習、事故などによる欠席は出席扱い(確認書類提出必要)

<参考図書>

2回目授業までに決定する。

<授業計画>

ガイダンス 授業の注意点と配点の説明

第2回

輪読資料決定 輪読で用いる本や論文を決定する。

第3回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第4回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第5回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第6回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第7回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第8回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第9回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第10回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第11回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第12回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第13回

輪読と討論 1人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。得られた知見を

基に討論を行う。

第14回

まとめ 輪読を通して得られた知識と考察についてまとめる。

第15回

まとめ 輪読を通して得られた知識と考察についてまとめる。

2022年度 後期

2単位

人間環境論特殊講義

飯田 聡子

<授業の方法>

課題確認を含む講義。

<授業の目的>

水生植物と水環境、生物多様性について考える輪読形式の講義である。

水生植物と水環境（ため池、湖沼、河川）や水辺の生物多様性の現状を理解し、人および人間活動と水生植物との関わりを考察していく。

人文学部のディプロマ・ポリシーの知識、理解、思考力、判断力と関連する。

<到達目標>

- ・水生植物について説明できる
- ・水辺の生物多様性の現状について説明できる
- ・事実に基づく協動的かつ建設的な議論ができる

<授業のキーワード>

植物、水環境、生物多様性

<授業の進め方>

本や論文の輪読形式の授業。

<履修するにあたって>

輪読形式なので、各自の積極的な準備と議論参加が必要。

<授業時間外に必要な学修>

次回の輪読ページの予習と前回の復習（2時間程度）

<提出課題など>

担当発表の説明資料

<成績評価方法・基準>

・授業への参加状況40%、担当説明30%、期末レポート30%

・質疑応答などの積極的な受講姿勢が望まれる

・2/3以上の出席が必要

・遅刻回数は出席回数に関係ないが、遅刻したときは減点する

・病気や事故などによる欠席は考慮（確認書類提出必須）

<授業計画>

ガイダンス 授業の注意点と配点の説明。

第2回

輪読資料決定 輪読で用いる本や論文を決定する。

第3回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第4回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第5回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第6回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第7回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第8回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第9回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第10回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第11回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第12回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第13回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第14回

まとめ 輪読を通して得られた知識と考察についてまとめる。

第15回

まとめ 輪読を通して得られた知識と考察についてまとめる。

2022年度 前期

2単位

人間環境論方法論

堀江 好文

<授業の方法>

課題確認を含む講義。

<授業の目的>

自然界や人間社会の諸現象を理解するのに不可欠なデータ・資料の整理と解析方法を学ぶ。具体的には、Excelなどを用いたデータ・資料の解析方法を習得する。可能であればそれらを効果的に用いる方法を開発する。

<到達目標>

- ・Excelを用いた基礎的なデータ解析ができる
- ・協動的かつ建設的な議論ができる

<授業のキーワード>

バイオアッセイ、生物実験

< 授業の進め方 >

Excelなどのアプリケーションを用いた実習もあるので、各自のノートパソコンがあると望ましい。特別警報(すべての特別警報)または暴風警報発令の場合(大雨、洪水警報等は対象外)の本科目の取扱いについて

授業を実施します。

ただし、避難指示、避難勧告が発令されている場合はご自身の安全を最優先にし、自治体の指示に従って行動してください。

< 履修するにあたって >

大学は「学びの場」であることを自覚した上での受講が要求される。授業外で課題を確実にこなすことが大切である。

< 授業時間外に必要な学修 >

次回のデータ・資料の整理と解析についての予習と前回の復習課題(2時間程度)

< 提出課題など >

期末レポートを行い最終日に講評する。

< 成績評価方法・基準 >

- ・ 授業参加状況40%、担当説明30%、期末レポート30%
- ・ 2/3以上の出席が必要
- ・ 冠婚葬祭、急病、部活、就活、教育実習、事故などによる欠席は出席扱い(確認書類提出必須)

< 授業計画 >

はじめに 自己紹介と授業の注意点、また、配点の説明。

第2回

データ・資料の探索 解析対象とするデータ・資料を探す。

第3回

データ・資料の決定 解析対象とするデータ・資料を決定する。

第4回

データ・資料の入手 データ・資料の入手方法を検討し、入手する。

第5回

データ・資料の整理 データ・資料の整理を行う。解析の前に十分整理することは重要である。

第6回

データ・資料の整理 データ・資料の整理を行う。解析の前に十分整理することは重要である。

第7回

データ・資料の解析 データ・資料を解析する。主にExcelを用いる。

第8回

データ・資料の解析 データ・資料を解析する。主にExcelを用いる。

第9回

データ・資料の解析 データ・資料を解析する。主にExcelを用いる。

第10回

データ・資料の解析 データ・資料を解析する。主にExcelを用いる。

第11回

データ・資料の考察 データ・資料の解析結果から考察する。

第12回

データ・資料の考察 データ・資料の解析結果から考察する。

第13回

データ・資料の考察 データ・資料の解析結果から考察する。

第14回

まとめ 解析結果と考察を基にまとめを行う。

第15回

まとめ 解析結果と考察を基にまとめを行う。期末レポートの講評。

2022年度 後期

2単位

人間環境論方法論

飯田 聡子

< 授業の方法 >

課題確認を含む講義。

< 授業の目的 >

生物多様性とその保全方法について考える輪読形式の講義である。

保全生態学の教科書や絶滅危惧種の保全に関する文献の輪読を通し、生物多様性の捉え方、生物多様性の保全の具体的な方法について学び、将来の課題について考えていく。

人文学部のディプロマ・ポリシーの知識、理解、思考力、判断力と関連する。

< 到達目標 >

- ・ 生物多様性の危機の現状について説明できる
- ・ 野生生物の保全方法について例を挙げて説明できる
- ・ 生物保全について事実に基づく協調的かつ建設的な議論ができる

< 授業の進め方 >

本や論文の輪読形式の授業。

< 履修するにあたって >

輪読形式なので、各自の積極的な準備と議論参加が必要。

< 授業時間外に必要な学修 >

次回の輪読ページの予習と前回の復習 (2時間程度)

< 提出課題など >

担当発表の説明資料

< 成績評価方法・基準 >

- ・ 授業への参加状況40%、担当説明30%、期末レポート30%

%

- ・ 質疑応答などの積極的な受講姿勢が望まれる
- ・ 2/3以上の出席が必要
- ・ 遅刻回数は出席回数に関係ないが、遅刻したときは減点する
- ・ 病気や事故などによる欠席は考慮（確認書類提出必須）

< 授業計画 >

ガイダンス 授業の注意点と配点の説明。

第2回

輪読資料決定 輪読で用いる本や論文を決定する。

第3回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第4回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第5回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第6回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第7回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第8回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第9回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第10回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第11回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第12回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第13回

輪読と討論 一人づつ一定数のページを担当しながら輪読を進める。

得られた知見を基に討論を行う。

第14回

まとめ 輪読を通して得られた知識と考察についてまとめる。

第15回

まとめ 輪読を通して得られた知識と考察についてまとめる。

2022年度 後期

1単位

人間形成論ワークショップ

井上 豊久

< 授業の方法 >

講義と演習

質問等のメールアドレスはtinoue@human.kobegakuin.ac.jpです。

< 授業の目的 >

広い学識と高度な専門的知識を用いて現代社会の多様な要求に応えることが出来る力量を形成する(DP)。実践現場で指導的役割を果たすことを目指し、生涯学習についてのテーマを中心に最新の状況を検討及びワークショップ指導力の育成を図る。DP専攻分野において、高度な知識や技能を活用して、課題を発見し、多角的に考察して解決の方法を見出すことができる力量形成を目指す。

< 到達目標 >

実践的かつ柔軟な思考能力を養い、社会貢献できるように(DP)各発達段階の生涯学習の理解、生涯学習研究の技能獲得、ワークショップ実践力の向上を図る。

< 授業の進め方 >

生涯学習についてのテーマの説明・検討とワークショップ学習

< 授業時間外に必要な学修 >

課題提出、自己研究を基本とし、180分の授業外学修を必須とする。

< 提出課題など >

ミニレポート、最終レポート、提出物は成績評価に反映させるほか、適宜、匿名にて論評を行う。

< 成績評価方法・基準 >

各回レポート40%、最終レポート60%の総合判断

< 参考図書 >

随時指定

< 授業計画 >

オリエンテーション 授業の目標・内容と方法、評価の説明

第2回
教育・生涯学習研究の方法1 問題意識、仮説設定、研究方法の説明

第3回
教育・生涯学習研究の方法2 事例研究と統計処理

第4回
世界の教育・生涯学習、日本の教育・生涯学習、資料収集と整理 海外の教育の紹介、データ利用

第5回
生涯学習に関するワークショップ・レポート作成の基本 課題の検討、ワークショップ・課題レポート作成の基本について説明

第6回
事例研究・ワークショップ・レポート作成実習1 ワークショップ事例等の検討、課題説明、研究レポート作成について

第7回
事例研究・ワークショップ・レポート作成実習2 ワークショップ事例等の検討、課題説明、研究レポート作成について

第8回
ワークショップ・レポート作成実習1 ワークショップ、課題説明、研究レポート作成について

第9回
ワークショップ・レポート作成実習2 ワークショップ、課題説明、研究レポート作成について

第10回
ワークショップ・レポート作成実習3 ワークショップ、課題説明、研究レポート作成について

第11回
ワークショップ・レポート作成実習4 ワークショップ、課題説明、研究レポート作成について

第12回
ワークショップ・レポート作成実習5 ワークショップ、課題説明、研究レポート作成について

第13回
ワークショップ・レポート作成実習6 課題説明、研究レポート作成の実習、プレゼンテーションの仕方

第14回
発表とまとめ1 各自の研究成果をレポート発表し、研究課題をまとめ、改善していく

第15回
発表とまとめ2 各自の研究成果を発表し、研究課題をまとめ、改善していく

2022年度 前期～後期

4単位

人間形成論演習（2年次）

立田 慶裕

<授業の方法>

講義

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）

の本科目の取扱いについて

授業を実施します。

ただし、避難指示、避難勧告が発令されている場合はご自身の安全を最優先にし、自治体の指示に従って行動してください。

<授業の目的>

人間形成論をめぐるテーマについて、個別のテーマを決定し、研究構想に基づく研究活動に入る。

第1に、研究テーマをめぐる先行文献を関連専門分野から収集し、重要な先行研究を発表する。第2に、専攻演習で行った、エビデンスを収集するための調査方法から、研究に必要な質問紙を作成する。第3に、質問紙に基づく調査を個別に実施し、エビデンスの収集を行う。第4に、得られたエビデンスの分析と考察を行う。最後に、その結果から、個人別の論文の作成を目指す。その成果として、人間文化研究科DPにある、知識・技能として、専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対する確かな応用力、思考・判断・表現として、自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる力、意欲・態度として、次世代の「生きる力」を育み、多様な実践現場の人々と協働して、高い倫理観と高度な専門性にもとづいた貢献を果たすことを目的とする。

<到達目標>

本演習を通じて、次の人間形成研究の専門的知識とスキル、科学的で社会的な態度の習得をめざす。

1. 理論的仮説に基づく研究法が習得できる
2. 質問紙が作成できるようになる
3. 数量的調査の分析と考察ができるようになる。
4. 体系的な論文が作成できるようになる。
5. 専門文献リストが作成できる。

<授業のキーワード>

フィールドワーク、質問紙調査、研究計画書、先行文献、論文執筆

<授業の進め方>

本講義では、当初より、eLearning システムのmanabaを用いて、教材コンテンツの提供を行い、受講者とのコ

コミュニケーションを図る。できるだけ、講義時間内での参加を推奨し、アクセスを行ってください。

manaba上の画面で、各論文に応じた毎回のコメント課題を指定します。

各自で、データベースを用いた先行文献リストの作成、フィールドワークや質問紙調査の作成を行います。

質問紙調査を実施予定の人については、質問紙を5月中に作成して、別講義の学生にアンケート形式で実施する予定です。昨年度のデータを利用しても結構です。新たなデータを取る予定の人は、早めに申告してください。講義は、2チーム形式で、2つのチームの割り振りは、manabaに掲示します。

進捗状況に応じて、相談日程は、柔軟に対応いたします。

各チームの論文指導を、講義時間に行いますが、事前の日にできるだけ完成した分の論文を、立田宛に送付しておいてください。コメントをつけて、返却いたします。各チームの相談日程は、コンテンツ上に掲示します。

5月第2週より開始します。

< 授業時間外に必要な学修 >

論文作成用のノートを作り、その項目として、毎回、研究上の不明点について指導教官と相談を行い、不明点を解決ながら、論文を作成する。その準備に2時間以上を要すること。フィールドワークの方法によるが、質問紙調査を主とする者は、授業前に調査の内容を指導教官と検討し、授業外でデータの入力も行う。事例調査、文献調査を主とする者は、毎回、必ず、その進展状況を文章化し、報告すると共に、指導後は、その指導内容にそった研究時間を毎週2時間以上は設けること。

< 提出課題など >

修士論文としての提出を行う。

< 成績評価方法・基準 >

論文構成案、データと資料から作成した図表、参考文献リストのそれぞれについて、30%、40%、30%での配点で評価する。

< 授業計画 >

研究計画の作成 前年度に作成した研究計画書に従い、研究日程を作成する。

第2回

研究計画の修正(1) 研究計画の発表(1)

第3回

研究計画の修正(2) 研究計画の発表(2)

第4回

フィールドワーク 質問紙作成及び実地調査

第5回

中間発表会(1) 中間発表(1)

第6回

研究作業(1) 収集データと資料のチェック作業

第7回

研究作業(2) 収集データの入力作業と事例分析の発表(1)

)

第8回

研究作業(3) 収集データの分析と事例研究発表(2)

第9回

研究作業(4) 収集データに基づく発表資料の作成(1)

第10回

研究作業(5) 収集データに基づく発表資料の作成(2)

第11回

執筆作業(1) 先行文献研究の整理と文章作成

第12回

執筆作業(2) 調査データの分析と考察部分の執筆

第13回

執筆作業(3) 目次、調査データのまとめ、あとのきの執筆

第14回

中間発表会(2) 中間発表(2)

第15回

講師による中間評価と相互評価 受講者の相互評価と講師による中間評価

第16回

研究計画の修正 中間評価を受けて論文作成に向けて計画を再修正する。

第17回

文献の追加 修正に応じた先行文献の追加作業を行う

第18回

先行統計データの整理 公表されている先行統計文献を整理し、図表化する。

第19回

前期発表データの追加分析(1) 前期発表データに追加資料作成のため、データの統計分析作業を行う。

第20回

前期発表データの追加分析(2) データの統計分析作業を続ける。

第21回

作成データの分析と考察(1) 作成データからの発表と評価(1)

第22回

作成データの分析と考察(2) 作成データの発表と評価(2)

第23回

執筆作業(1) 論文前半部分の執筆と評価

第24回

執筆作業(2) 論文中間部分の発表と評価

第25回

執筆作業(3) 論文後半部分の執筆と評価

第26回

論文案の提出 提出された論文案の評価

第27回

論文の修正と提出 完成論文の見直しと提出

第28回

論文の発表資料の作成(1) 論文発表会に向けた発表資料案の提出と評価

第29回

論文の発表資料の作成(2) 発表資料案の修正と完成

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

人間形成論演習 (2年次)

井上 豊久

< 授業の方法 >

講義と演習

質問等のメールアドレスはtinoue@human.kobegakuin.ac.jpです。

< 授業の目的 >

専門的論文作成のための研究を行う。ディプロマポリシーに沿って、高い倫理性と強固な責任感をもって継続的に研究に取り組み、多様な人々と協働して学会や専門分野で理論や応用に重要な貢献を行うことができる力量形成を目指す。

< 到達目標 >

自律的研究能力の獲得を目指す

< 授業の進め方 >

研究、発表、論議等により研究能力のさらなる向上を目指すと同時に論文作成の力量を確実に身につける

< 授業時間外に必要な学修 >

各回180分以上の自宅研究を基本とする

< 成績評価方法・基準 >

毎回の発表レポート50%、最終レポート50%

< 授業計画 >

オリエンテーション 授業の概要説明と自己診断、研究倫理についても確認する

第2回

研究発表と論議 研究の基礎・基本の理解と研究計画の構想発表

第3回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第4回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第5回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第6回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、

論議、次回への考察

第7回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第8回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第9回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第10回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第11回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第12回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第13回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第14回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第15回

前期総括 前期総括と最終レポート確認

第16回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第17回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第18回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第19回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第20回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第21回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第22回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第23回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、

論議、次回への考察

第24回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、
論議、次回への考察

第25回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、
論議、次回への考察

第26回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、
論議、次回への考察

第27回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、
論議、次回への考察

第28回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、
論議、次回への考察

第29回

研究発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、
論議、次回への考察

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

人間形成論演習（1年次）

立田 慶裕

< 授業の方法 >

講義

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）

の本科目の取扱いについて

授業を実施します。

ただし、避難指示、避難勧告が発令されている場合はご自身の安全を最優先にし、自治体の指示に従って行動してください。

< 授業の目的 >

人間形成論をめぐるテーマについて、個別のテーマを決定し、研究構想に基づく研究活動に入る。

第1に、研究テーマをめぐる先行文献を関連専門分野から収集し、重要な先行研究を発表する。第2に、専攻演習で行った、エビデンスを収集するための調査方法から、研究に必要な質問紙を作成する。第3に、質問紙に基づく調査を個別に実施し、エビデンスの収集を行う。第4に、得られたエビデンスの分析と考察を行う。最後に、その結果から、個人別の論文の作成を目指す。その成果として、人間文化研究科DPにある、知識・技能として、専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対する的確な応用力、思考・判断・表現として、自ら発見した問題に対して、

広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる力、意欲・態度として、次世代の「生きる力」を育み、多様な実践現場の人々と協働して、高い倫理観と高度な専門性にもとづいた貢献を果たすことを目的とする。本講義は、10年以上の社会教育リーダーの経験と国立教育政策研究所における生涯学習研究の実務経験を有する講師が担当し、その経験を理論と実践の講義に活用する。

< 到達目標 >

本演習を通じて、次の人間形成研究の専門的知識とスキル、科学的で社会的な態度の習得をめざす。

1. 理論的仮説に基づく研究法が習得できる
2. 質問紙が作成できるようになる
3. 数量的調査の分析と考察ができるようになる。
4. 体系的な論文が作成できるようになる。
5. 専門文献リストが作成できる。

< 授業のキーワード >

フィールドワーク、質問紙調査、研究計画書、先行文献、論文執筆

< 授業の進め方 >

本講義では、当初より、eLearning システムのmanabaを用いて、教材コンテンツの提供を行い、受講者とのコミュニケーションを図る。できるだけ、講義時間内での参加を推奨し、アクセスを行ってください。

manaba上の画面で、各論文に応じた毎回のコメント課題を指定します。

各自で、データベースを用いた先行文献リストの作成、フィールドワークや質問紙調査の作成を行います。質問紙調査を実施予定の人については、質問紙を5月中に作成して、別講義の学生にアンケート形式で実施する予定です。昨年度のデータを利用しても結構です。新たなデータを取る予定の人は、早めに申告してください。講義は、2チーム形式で、2つのチームの割り振りは、manabaに掲示します。

進捗状況に応じて、相談日程は、柔軟に対応いたします。

各チームの論文指導を、講義時間に行いますが、事前の日にできるだけ完成した分の論文を、立田宛に送付しておいてください。コメントをつけて、返却いたします。各チームの相談日程は、コンテンツ上に掲示します。

5月第2週より開始します。

< 授業時間外に必要な学修 >

論文作成用のノートを作り、その項目として、毎回、研究上の不明点について指導教官と相談を行い、不明点を解決しながら、論文を作成する。その準備に2時間以上を要すること。フィールドワークの方法によるが、質問紙調査を主とする者は、授業前に調査の内容を指導教官と検討し、授業外でデータの入力も行う。事例調査、文献調査を主とする者は、毎回、必ず、その進展状況を文章

化し、報告すると共に、指導後は、その指導内容にそった研究時間を毎週2時間以上は設けること。

< 提出課題など >

修士論文としての提出を行う。

< 成績評価方法・基準 >

論文構成案、データと資料から作成した図表、参考文献リストのそれぞれについて、30%、40%、30%での配点で評価する。

< 授業計画 >

研究計画の作成 前年度に作成した研究計画書に従い、研究日程を作成する。

第2回

研究計画の修正(1) 研究計画の発表(1)

第3回

研究計画の修正(2) 研究計画の発表(2)

第4回

フィールドワーク 質問紙作成及び実地調査

第5回

中間発表会(1) 中間発表(1)

第6回

研究作業(1) 収集データと資料のチェック作業

第7回

研究作業(2) 収集データの入力作業と事例分析の発表(1)

第8回

研究作業(3) 収集データの分析と事例研究発表(2)

第9回

研究作業(4) 収集データに基づく発表資料の作成(1)

第10回

研究作業(5) 収集データに基づく発表資料の作成(2)

第11回

執筆作業(1) 先行文献研究の整理と文章作成

第12回

執筆作業(2) 調査データの分析と考察部分の執筆

第13回

執筆作業(3) 目次、調査データのまとめ、あしがきの執筆

第14回

中間発表会(2) 中間発表(2)

第15回

講師による中間評価と相互評価 受講者の相互評価と講師による中間評価

第16回

研究計画の修正 中間評価を受けて論文作成に向けて計画を再修正する。

第17回

文献の追加 修正に応じた先行文献の追加作業を行う

第18回

先行統計データの整理 公表されている先行統計文献を整理し、図表化する。

第19回

前期発表データの追加分析(1) 前期発表データに追加資料作成のため、データの統計分析作業を行う。

第20回

前期発表データの追加分析(2) データの統計分析作業を続ける。

第21回

作成データの分析と考察(1) 作成データからの発表と評価(1)

第22回

作成データの分析と考察(2) 作成データの発表と評価(2)

第23回

執筆作業(1) 論文前半部分の執筆と評価

第24回

執筆作業(2) 論文中間部分の発表と評価

第25回

執筆作業(3) 論文後半部分の執筆と評価

第26回

論文案の提出 提出された論文案の評価

第27回

論文の修正と提出 完成論文の見直しと提出

第28回

論文の発表資料の作成(1) 論文発表会に向けた発表資料案の提出と評価

第29回

論文の発表資料の作成(2) 発表資料案の修正と完成

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

人間形成論演習 (1年次)

井上 豊久

< 授業の方法 >

講義と演習、ワークショップ等

質問等のメールアドレスはtinoue@human.kobegakuin.ac.jpです。

< 授業の目的 >

専門的論文作成のための研究を行う。ディプロマポリシーに沿って、高い倫理性と強固な責任感をもって継続的に研究に取り組み、多様な人々と協働して学会や専門分野で理論や応用に重要な貢献を行うことができる力量形成を目指す。

< 到達目標 >

現在の教育に関する研究内容の基本を理解するとともに研究の基礎能力を身につける

< 授業のキーワード >

研究能力の基礎・基本、世界の教育、日本の教育課題
 < 授業の進め方 >
 講義と演習、発表、論議し、研究能力の向上を図っていく
 < 授業時間外に必要な学修 >
 各回 180 分程度の自宅研究が必須
 < 成績評価方法・基準 >
 毎回の小レポートと研究発表50%、最終レポート50%で総合的に評価する
 < 授業計画 >
 オリエンテーション 授業概要の説明、研究倫理についても確認する

第2回
 世界の教育1 世界の教育について史的側面から検討する

第3回
 世界の教育2 世界の教育について史的側面から検討する

第4回
 世界の教育3 世界の教育の現状と課題について検討する

第5回
 世界の教育4 世界の教育の現状と課題について検討する

第6回
 世界の教育5 世界の教育の現状と課題について検討する

第7回
 日本の教育1 日本の教育の現状と課題について検討する

第8回
 日本の教育2 日本の教育の現状と課題について検討する

第9回
 日本の教育3 日本の教育の現状と課題について検討する

第10回
 日本の教育4 日本の教育の現状と課題について検討する

第11回
 日本の教育5 日本の教育の現状と課題について検討する

第12回
 現代教育の在り方1 現代教育の現状と課題、今後の在り方について検討する

第13回
 現代教育の在り方2 現代教育の現状と課題、今後の在り方について検討する

第14回
 現代教育の在り方3 現代教育の現状と課題、今後の在

り方について検討する

第15回
 総括 総括と最終レポート作成を行う

第16回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第17回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第18回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第19回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第20回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第21回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第22回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第23回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第24回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第25回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第26回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第27回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第28回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第29回
 発表と論議 研究発表、研究内容・方法等の検討、論議、次回への考察

第30回

2022年度 後期

2単位

人間形成論特殊講義

井上 豊久

< 授業の方法 >

講義(対面授業および遠隔授業併用)

< 授業の目的 >

乳幼児から高齢者にいたる人間形成についてのテーマを中心に、参加型の学習についての問題意識を培うのが本講の目的です。今期は、生涯学習論の中でも、先端的な学習理論に焦点を当て、世界の学習理論の先端的な研究について、講義を行います。その成果として、DPに示された人間行動領域での人間形成に関わる専門知識とスキルを習得し、高度な課題解決能力と、研究者としての高い倫理性や協働的な力を身につけ、科学的・社会的態度の形成を目指します。

< 到達目標 >

(1)人間形成の各段階の発達課題への問いを持つことができる、(2)研究のスキルを習得できる、(3)各テーマについての専門的知識を習得できる。特にこの講義から、先端的な学習理論についての認識を深めることにより、広い国際的な研究の視点を持つことができるようになる。

< 授業の進め方 >

オンラインにおけるレポート提出と検討・添削等により、受講生のテーマに即して、重要な文献を紹介しつつ、関連文献情報の収集スキルや研究法のスキルを指導し、研究者としての基本的な知識とスキルを学んでいく

< 授業時間外に必要な学修 >

課題について180分以上の自宅研究を行う

< 提出課題など >

(1)毎回、主題についてのミニッツレポートを作成。(2)定期的にまとめと補足を加えた情報整理の中間レポートを提出。(3)期末に総括評価のための課題達成レポートを提出。提出物は成績評価に反映させるほか、適宜、匿名にて論評を行う。

< 成績評価方法・基準 >

毎回のレポート15回(50%)、中間課題レポート1回(25%)、最終課題レポート(25%)の総合判断。

< 授業計画 >

オリエンテーション 講義の目標、内容と方法、評価の説明

第2回

教育研究について 国内外の教育的課題を概観する

第3回

21世紀の学習環境 学習環境の研究枠組みを考える

第4回

学習概念の発展 20世紀の学習理論と基本的な概念を整理し、学習の最新の理解を行う

第5回

学習の認知的な視点 学習の認知的アプローチを論じる

第6回

学習への動機付け 学習への動機付け、特に、人間の感情が果たす役割を考える

第7回

脳や心の学習 遺伝や経験、脳や心の学習が言葉や数学的思考に及ぼす影響を考える

第8回

形式的なアセスメント 総括的評価に対する形式的アセスメントの重要性和意義を考える。

第9回

共同学習1 教育方法として近年重視される共同学習の理論と方法を考える

第10回

共同学習2 共同学習の多様な方法を学びながら、共同学習の効果や成果を考える

第11回

テクノロジーを活用した学習 人がテクノロジーを利用してどのように学ぶのか、その支援と成果、問題点を考える

第12回

調べ学習 調べ学習の歴史的な視点や学習の重要性を考える

第13回

サービスラーニング 学校環境としての地域との交流学习や、生徒の地域参加がもたらす教育的意義や効果を考える

第14回

家庭と学校のパートナーシップ 家族が学習者に及ぼす影響、学校の成果の家族への影響を考える

第15回

まとめ 上記の検討を通じて、学習の実践的な研究はイノベティブな学習環境の創出をめざしている。世界各国でのその状況について、総括的に考える

2022年度 前期

2単位

人間形成論方法論

立田 慶裕

< 授業の方法 >

基本的には研究についての個別指導の演習を中心とするが、データベース作成や研究法については、講義形式を取る。調査方法として、質問紙の作成、実施、分析とその考察を行う。分析にあたっては、統計的な基礎知識と分析法を指導する。

< 授業の目的 >

方法論1では、実践的かつ柔軟な思考能力を養い、社会

のさまざまな分野で適切な貢献ができるため、人間形成についての研究方法の学習、人間形成に関わる専門知識とスキルを習得し、研究者としての基礎能力と態度を身に付け、方法論では最新の状況や国際的な動向についても理解し、多様な問題にも冷静に対応できる力量の形成を図る。人間文化研究科DPにある、知識・技能として、専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確な応用力、思考・判断・表現として、自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる力、意欲・態度として、次世代の「生きる力」を育み、多様な実践現場の人々と協働して、高い倫理観と高度な専門性にもとづいた貢献を果たすことを目的とする。本講義は、10年以上の社会教育リーダーの経験と国立教育政策研究所における生涯学習研究の実務経験を有する講師が担当し、その経験を理論と実践の講義に活用する。

<到達目標>

実践的かつ柔軟な思考能力を養い、社会のさまざまな分野で適切な貢献ができるため、文献の収集と整理能力の獲得、研究方法の具体的な理解、研究論文の書き方と提示の実践、実践的研究能力の向上を図る。特に、次の各スキルの習得を目指す。

1. 理論的仮説に基づく研究法が習得できる
2. 質問紙が作成できるようになる
3. 数量的調査の分析と考察ができるようになる。
4. 体系的な論文が作成できるようになる。
5. 専門文献リストが作成できる。

<授業のキーワード>

フィールドワーク、質問紙作成、統計的分析、仮説の検証、成果の発表

<授業の進め方>

問題意識、仮説設定、研究方法の説明をすると共に、実際に研究実践の中で力量向上を図る

<授業時間外に必要な学修>

課題提出では、時間前に2時間以上をかけてレポートの作成を行い、提出すること。自己研究では、文献収集と整理、購読を1時間以上かけて行うこと。

<提出課題など>

ミニレポートは毎回次回に講義でフィードバックし、中間レポート、最終レポートは、提出前に案を作成の上、講師からのフィードバックの助言を得た上で提出すること。

<成績評価方法・基準>

ミニレポート20%、中間レポート40%、最終レポート40%の総合判断

<授業計画>

オリエンテーション 授業の目標・内容と方法、評価の説明

第2回	教育研究の方法1 問題意識、仮説設定、研究方法の説明
第3回	教育研究の方法2 事例研究と統計処理
第4回	資料収集と整理 データベース、文献検索等
第5回	レポート作成の基本 レポート作成の基本について説明
第6回	レポート作成実習1 課題説明、研究レポート作成の実習
第7回	レポート作成実習2 課題説明、研究レポート作成の実習
第8回	レポート作成実習3 課題説明、研究レポート作成の実習
第9回	レポート作成実習4 研究レポート作成の実習・中間発表
第10回	レポート作成実習5 研究レポート作成の実習・中間発表
第11回	レポート作成実習6 研究レポート作成の実習・中間発表
第12回	レポート作成実習7 研究レポート作成の実習・中間発表
第13回	レポート作成実習8 研究レポート作成の実習・中間発表
第14回	発表とまとめ1 各自の研究成果を発表し、研究課題をまとめ、改善していく
第15回	発表とまとめ2 各自の研究成果を発表し、研究課題をまとめ、改善していく

	2022年度 後期
	2単位
	人間形成論方法論
	立田 慶裕

	<授業の方法>
	遠隔授業(リアルタイム授業)
	講義と演習
	基本的には研究についての個別指導の演習を中心とするが、データベース作成や研究法については、講義形式を

取る。

< 授業の目的 >

実践的かつ柔軟な思考能力を養い、社会のさまざまな分野で適切な貢献ができるため、人間形成についての研究方法の学習、人間形成に関わる専門知識とスキルを習得し、研究者としての基礎能力と態度を身に付け、方法論

では最新の状況や国際的な動向についても理解し、多様な問題にも冷静に対応できる力量の形成を図る。人間文化研究科DPにある、知識・技能として、専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確な応用力、思考・判断・表現として、自ら発見した問題に対して、広い視野に立ち、さまざまな角度から検討を加え、妥当な解決への道筋を提示できる力、意欲・態度として、次世代の「生きる力」を育み、多様な実践現場の人々と協働して、高い倫理観と高度な専門性にもとづいた貢献を果たすことを目的とする。本講義は、10年以上の社会教育リーダーの経験と国立教育政策研究所における生涯学習研究の実務経験を有する講師が担当し、その経験を理論と実践の講義に活用する。

< 到達目標 >

実践的かつ柔軟な思考能力を養い、社会のさまざまな分野で適切な貢献ができるため、文献の収集と整理能力の獲得、研究方法の具体的な理解、研究論文の書き方と提示の実践、実践的研究能力の向上を図る。特に、次の各スキルの習得を目指す。

1. 理論的仮説に基づく研究法が習得できる
2. 質問紙が作成できるようになる
3. 数量的調査の分析と考察ができるようになる。
4. 体系的な論文が作成できるようになる。
5. 専門文献リストが作成できる。

< 授業のキーワード >

フィールドワーク、質問紙作成、統計的分析、仮説の検証、成果の発表

< 授業の進め方 >

問題意識、仮説設定、研究方法の説明をすると共に、実際に研究実践の中で力量向上を図る

< 授業時間外に必要な学修 >

課題提出では、時間前に2時間以上をかけてレポートの作成を行い、提出すること。自己研究では、文献収集と整理、購読を1時間以上かけて行うこと。

< 提出課題など >

ミニレポートは毎回次回に講義でフィードバックし、中間レポート、最終レポートは、提出前に案を作成の上、講師からのフィードバックの助言を得た上で提出すること。

< 成績評価方法・基準 >

ミニレポート20%、中間レポート40%、最終レポート40%の総合判断

< 授業計画 >

オリエンテーション 授業の目標・内容と方法、評価の説明

第2回

教育研究の方法1 問題意識、仮説設定、研究方法の説明

第3回

教育研究の方法2 事例研究と統計処理

第4回

資料収集と整理 データベース、文献検索等

第5回

レポート作成の基本 レポート作成の基本について説明

第6回

レポート作成実習1 課題説明、研究レポート作成の実習

第7回

レポート作成実習2 課題説明、研究レポート作成の実習

第8回

レポート作成実習3 課題説明、研究レポート作成の実習

第9回

レポート作成実習4 研究レポート作成の実習・中間発表

第10回

レポート作成実習5 研究レポート作成の実習・中間発表

第11回

レポート作成実習6 研究レポート作成の実習・中間発表

第12回

レポート作成実習7 研究レポート作成の実習・中間発表

第13回

レポート作成実習8 研究レポート作成の実習・中間発表

第14回

発表とまとめ1 各自の研究成果を発表し、研究課題をまとめ、改善していく

第15回

発表とまとめ2 各自の研究成果を発表し、研究課題をまとめ、改善していく

2022年度 前期

1単位

表現言語論ワークショップ

中村 健史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学研究科修士課程のディプロマボ
リシーのうち「専門領域において十分な知識と技能を蓄
積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対し
て的確に応用することができる」ことを目指して実施さ
れる。

この科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻
に開講する科目である。

この科目は漢文の講読を行う。今季取りあげるのは『
論語徴集覧』である。『論語』には古くから数多くの注
釈があり、甲論乙駁、なおその明解を見ない箇所も少な
くない。松平頼寛（1703? 63年）の編んだ『論語
徴集覧』（1760年）は、そうした注釈類のうちから、
魏・何晏（190? 249年）の『集解』、宋・朱熹（
1130? 1200年）の『集註』、伊藤仁斎（162
7? 1705年）の『古義』を選び、荻生徂徠（166
6? 1728年）の『論語徴』に附して比較対象を容易
ならしめた書物である。

授業の目的は以下の通りである。

- (1) 漢文を正しく訓読できるようになる。
- (2) 漢文を正しく現代語訳できるようになる。
- (3) 漢文の任意の箇所について文法（句法）の説明
を行えるようになる。
- (4) 『論語』解釈をとおして儒教思想史に関する知
識を得る。

この科目は、教職科目（国語）に属する。実務経験（
高等学校を中心とする国語科教員）のある教員が担当す
るので、必要に応じて教育現場での実例や知見にも触れ
つつ授業を進めてゆく。

<到達目標>

- (1) 漢文を正しく訓読し、文章・口頭で表現できる。
- (2) 漢文を正しく現代語訳し、文章・口頭で表現で
きる。
- (3) 漢文の任意の箇所について文法（句法）の説明
を行える。
- (4) 『論語』を通して把握した各時代の儒教思想の
特色を、文章で説明できる。

<授業のキーワード>

論語、孔子、伊藤仁斎、荻生徂徠

<授業の進め方>

演習形式で行うが、担当者をあらかじめ決めることはし
ないので、全員が毎回予習してくる必要がある。その場
で指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表
する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する
説明を追加で求めることもある。

なお、授業の性質上、授業計画（進度、内容）に変更
を加える場合がある。

<履修するにあたって>

漢文を白文で読める程度の学力があることを前提として
授業を進める。かならず下記URLから教材の内容を確認
した上で授業に出席すること。このテキストを辞書なし

で訓読できる程度の学力がない場合は、この授業を履修
する際に大きな支障が生じる。

{https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ro12/ro12_00091/ro12_00091_0002/ro12_00091_0002.pdf}

<授業時間外に必要な学修>

授業時間外に必要な学修の目安となる時間は、1回あた
り3時間程度である。次の授業に向けて講読箇所を訓読
・現代語訳し、必要に応じて文法的な分析を加えて予習
しておくこと。また、必要に応じて、前時の授業内容を
復習し、理解・記憶すること。

<提出課題など>

予習状況を確認するため数回ノートの提出を求める。ま
た期末レポートの提出が必要である。ノート提出や授業
時の発表については、必要に応じてその場で講評し、受
講生にフィードバックする。期末レポートについては、
提出後、優秀作を提示してフィードバックとする。（し
たがって、この授業における提出物はフィードバックに
利用する場合があることを、受講生はあらかじめ了承し
ておくこと。なお全体に配布・掲示する場合には、氏名
・学籍番号等が分からないように加工する。）

<成績評価方法・基準>

授業内で指名されて講読・解釈したときの回答内容を4
0%として評価する。評価基準は、「到達目標」（1）
（2）（3）及び「適切に予習を行っているか」である。

授業時に数回、ノートの提出を求める。ノートに記入
された予習内容を30%として評価する。評価基準は、
「到達目標」（1）（2）及び「適切に予習を行ってい
るか」である。

期末レポートを30%として評価する。評価基準は、
「到達目標」（1）（2）（4）である。

<テキスト>

下記を印刷して持参すること。

{https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ro12/ro12_00091/ro12_00091_0002/ro12_00091_0002.pdf}

<参考図書>

授業時に漢和辞典を持参すること。電子辞書でも可。

<授業計画>

『論語徴集覧』講読（1） 為政篇? 4丁を講読する。
指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表す
る。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説
明を追加で求めることもある。「授業の目的」（1）?
（4）に対応（以下すべて同じ）。

第2回

『論語徴集覧』講読（2） 為政篇? 6丁を講読する。
指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表す
る。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説
明を追加で求めることもある。

第3回

『論語徴集覧』講読（3） 為政篇? 8丁を講読する。
指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表す

る。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第4回

『論語徴集覧』講読（４） 為政篇？ 10丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第5回

『論語徴集覧』講読（５） 為政篇？ 12丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第6回

『論語徴集覧』講読（６） 為政篇？ 14丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第7回

『論語徴集覧』講読（７） 為政篇？ 16丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第8回

『論語徴集覧』講読（８） 為政篇？ 18丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第9回

『論語徴集覧』講読（９） 為政篇？ 20丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第10回

『論語徴集覧』講読（10） 為政篇？ 22丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第11回

『論語徴集覧』講読（11） 為政篇？ 24丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第12回

『論語徴集覧』講読（12） 為政篇？ 26丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第13回

『論語徴集覧』講読（13） 為政篇？ 28丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を

表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第14回

『論語徴集覧』講読（14） 為政篇？ 30丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

第15回

『論語徴集覧』講読（15） 為政篇？ 32丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法（句法）に関する説明を追加で求めることもある。

2022年度 後期

1単位

表現言語論ワークショップ

長谷川 弘基

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

「表現言語論ワークショップI」に引き続き、英語の詩を意味だけではなくスタイルや口調を意識して日本語に訳してみる。

この授業は主に人間文化学研究科ディプロマポリシーに示す「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」能力の涵養を目指すものである。

<到達目標>

- 1) 英語の詩を正確に理解する。
- 2) 英語の詩の内容のみならずスタイルの特徴も理解する。
- 3) 日本語表現を工夫し、詩の形に訳す。

<授業の進め方>

最初に英語の詩の読解を行い、ディスカッションを通してその詩の特徴を理解する。その後、各自で翻訳を進め、最終的に自分自身の翻訳を「作品」として提示する。

<授業時間外に必要な学修>

おおむね2時間程度の準備を求める。

<成績評価方法・基準>

授業内での質疑応答を評価する（50%）。残りの50%は成果物を評価する。

<テキスト>

最初の授業で翻訳の対象とする英語の詩を配布する。

<授業計画>

イントロダクション 翻訳において注意すべきこと

第2回

詩の翻訳について 詩の翻訳に固有の問題の整理

第3回

翻訳の実際 1 著名な英詩の既存の日本語訳を数種類比較検討する
第4回
翻訳の実際 2 著名な英詩の既存の日本語訳を数種類比較検討する。特にシンタクスの違いに注目する。
第5回
翻訳の試み 1 比較的平易な詩を実際に訳し、お互いの結果を比較検討する。
第6回
翻訳の試み 2 比較的平易な詩を実際に訳し、お互いの結果を比較検討する。
第7回
翻訳の試み 3 比較的平易な詩を実際に訳し、お互いの結果を比較検討する。
第8回
論点整理 1 これまでの演習を通して浮き彫りになった問題点を整理する。
第9回
論点整理 2 これまでの演習を通して浮き彫りになった問題点を整理する。
第10回
解説 日本語・英語間の翻訳の問題と詩の翻訳の問題について解説する。
第11回
翻訳の試み 4 翻訳したい詩を選定し、翻訳するために必要となる読解・解釈を行う。
第12回
翻訳の試み 5 翻訳したい詩を選定し、翻訳するために必要となる読解・解釈を行う。
第13回
翻訳の試み 6 翻訳したい詩を選定し、翻訳するために必要となる読解・解釈を行う。
第14回
翻訳の検討 一つの英詩を複数のスタイルで訳し、その効果の違いを検討する。
第15回
成果発表 自らの翻訳について、工夫を凝らした点などを発表する。

2022年度 前期～後期

4単位

表現言語論演習(E) (2年次)

長谷川 弘基

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この授業は主に人間文化学研究科ディプロマポリシーに示す「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に

応用することができる」能力の涵養を目指すものである。

20世紀、21世紀の代表的文学理論の概要を理解し、文学研究における理論の役割と意義を理解した上で、それらの知見を自らの修士論文に反映させる。

<到達目標>

- 1) 20世紀の代表的批評理論の大筋を理解する。
- 2) 学んだ批評理論を用いて、個々の作品を解釈する。
- 3) 自らの修士論文に以上の知見を反映させる。

<授業の進め方>

選定したテキストの精読と解釈作業、本人の研究発表が中心となる。授業を通して随時助言と解説を加える。

<授業時間外に必要な学修>

10? 20時間の準備を想定している。

<提出課題など>

毎回の発表に対してはその都度コメントを付して評価する。

論文の草稿などは修正指示を付して返却する。

<成績評価方法・基準>

授業内での発表・質疑応答を評価する(50%)。

残りの50%は論文草稿を評価する。

<テキスト>

Understanding Poetry (Cleanth Brooks & Robert Penn Warren, 1938)、How to Read a Poem (Terry Eagleton, 2006)、その他、自ら選出したもの

<授業計画>

イントロダクション 批評的研究の意義について

第2回

研究計画の見直し 研究計画の見直し、再検討、再確認

第3回

研究計画の見直し #2 引き続き、修士論文研究計画の再検討を行う。

第4回

研究計画の見直し #3 引き続き、修士論文研究計画の再検討を行う。

第5回

修士論文主題確定 これまでの学習を通して、利用できる作品、関連のある解釈などを再検討し、最終的に修士論文の主題を確定する。

第6回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 #1 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第7回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 #2 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第8回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 #3 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第9回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 # 4 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第10回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 # 5 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第11回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 # 6 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第12回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 # 7 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第13回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 # 8 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第14回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 # 9

修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第15回

修士論文で扱う作品の読解と解釈 # 10 修士論文で扱う作品の解釈を深め、初稿の執筆を進める。

第16回

修士論文第1稿の執筆・発表 これまでの成果を発表する。

第17回

第1稿の改良 #1

第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第18回

第1稿の改良 #2

第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第19回

第1稿の改良 #3

第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第20回

第1稿の改良 #4

第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第21回

第1稿の改良 #5

第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第22回

第1稿の改良 #6 第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第23回

第1稿の改良 #7 第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第24回

第1稿の改良 #8 第1稿の問題点を洗い出し、改良を工夫する。

第25回

第1稿の改良 #9 第1稿の問題点を洗い出し、改良を

工夫する。

第26回

修士論文決定稿の執筆・発表 第1稿の問題点を修正し、修士論文の完成を目指す。

修士論文の射程をあらためて確認する。

第27回

修士論文決定稿の執筆・発表 # 2 第1稿の問題点を修正し、修士論文の完成を目指す。

修士論文の射程をあらためて確認する。

第28回

修士論文決定稿の執筆・発表 # 3 第1稿の問題点を修正し、修士論文の完成を目指す。

修士論文の射程をあらためて確認する。

第29回

修士論文決定稿の執筆・発表 # 4 第1稿の問題点を修正し、修士論文の完成を目指す。

修士論文の射程をあらためて確認する。

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

表現言語論演習（E）（1年次）

長谷川 弘基

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この授業は主に人間文化学研究科ディプロマポリシーに示す「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」能力の涵養を目指すものである。

文学作品に対して批評的研究が進められるための知識と技能を獲得し、自らの修士論文に結実する研究テーマを見つけ、研究計画をまとめることを主たる目的とする。

<到達目標>

- 1) 20世紀前半を支配した文学理論と現代の文学理論を比較し、その共通点と相違点を認識する。
- 2) 代表的文学理論の概要を理解し、文学研究における理論の役割と意義を理解する。
- 3) 学んだ批評理論を用いて、個々の作品を解釈する。
- 4) 学んだ批評理論を背景に、自らの修士論文テーマを定め、研究計画をまとめる。

<授業のキーワード>

批評、new criticism、close reading、モダニズム

<授業の進め方>

演習の前半は指定したテキストの精読が中心となる。授業を通して随時解説を加える。

後半は、自らが研究対象とする作品について、自らの解釈を加え、発表してもらおう。授業を通して、随時批判・助言を行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

2? 4時間の準備を想定している。

< 提出課題など >

レポートと研究計画書草案は添削して返却する。

< 成績評価方法・基準 >

授業内での質疑応答を評価する (30%)。

2回のレポートの評価 (合計して30%)。

年度末に提出する研究計画書草案 (40%)。

< テキスト >

Understanding Poetry (Cleanth Brooks & Robert Penn Warren, 1938)、How to Read a Poem (Terry Eagleton, 2006)

< 授業計画 >

イントロダクション New CriticismとClose Reading, について

第2回

Understanding Poetryを読む 1 内容の理解と解説

第3回

Understanding Poetryを読む 2 内容の理解と解説

第4回

Understanding Poetryを読む 3 内容の理解と解説

第5回

Understanding Poetryを読む 4 内容の理解と解説

第6回

Understanding Poetryを読む 5 内容の理解と解説

第7回

New Criticismのまとめ New Criticismの意義とそれに対する批判の核心

第8回

How to Read a Poemを読む 1 内容の理解と解説

第9回

How to Read a Poemを読む 2 内容の理解と解説

第10回

How to Read a Poemを読む 3 内容の理解と解説

第11回

How to Read a Poemを読む 4 内容の理解と解説

第12回

How to Read a Poemを読む 5 内容の理解と解説

第13回

How to Read a Poemを読む 6 内容の理解と解説

第14回

「作品」とは何か 「作品」というものの概念の

変遷について、これまでの講義を踏まえて概観する

第15回

前半のまとめ 作品の読解における文学理論の役割とその限界について

第16回

研究課題策定に向けて #1 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第17回

研究課題策定に向けて #2 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第18回

研究課題策定に向けて #3 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第19回

研究課題策定に向けて #4

自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第20回

研究課題策定に向けて #5 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第21回

研究課題策定に向けて #6 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第22回

研究課題策定に向けて #7 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第23回

研究課題策定に向けて #8 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第24回

研究課題策定に向けて #9 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第25回

研究課題策定に向けて #10 自身の研究で扱う予定の作品について、演習で学んだ知識・技能を活用し、適宜解釈を加え、発表する。

第26回

研究課題確定 前回までに行った解釈の実践を通して、研究課題を確定し、研究課題に相応しい対象作品の絞り込み、選出を行うと共に、課題追求に最も相応しい批評的アプローチを決定する。

第27回

研究計画作成 #1 修士論文執筆のための具体的な研究計画をディスカッションを通して作成する。

第28回

研究計画作成 # 2 修士論文執筆のための具体的な研究計画をディスカッションを通して作成する。

第29回

研究計画作成 # 3 修士論文執筆のための具体的な研究計画をディスカッションを通して作成する。

第30回

2022年度 前期

2単位

表現言語論特殊講義 (E)

長谷川 弘基

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

西洋文学にはギリシア・ローマ時代から「エクフラシス (ekphrasis)」と呼ばれるジャンルがある。絵画や彫刻などのビジュアル・アートを題材にしたエクフラシスは、特に18世紀以降様々な注目を集めてきた。近代になってエクフラシスが注目を浴びる理由とその意味について、主にW. J. T. Mitchellの批評を参照にしつつ、実際のエクフラシス作品を読み解きながら、理解を深める。視覚芸術と言語芸術の関係、特に詩文の中に表現される視覚芸術の意味を理解し、批評理論が文学研究に果たす役割を意識できるようになる。

この授業は主に人間文化学研究科ディプロマポリシーに示す「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」能力の涵養を目指すものである。

< 到達目標 >

- 1) 言語と視覚イメージの相違を、主に記号論的立場から理解する。
- 2) 言語と視覚イメージの対立が自己と他者の対立のアナロジーであることの意味を理解する。
- 3) エクフラシスの現代的意味を理解する。

< 授業のキーワード >

言語、記号、視覚イメージ、エクフラシス、自己、他者

< 授業の進め方 >

英文の文献を利用しながら、その内容に沿った形で講義を行う。

< 履修するにあたって >

相当量の英文を読むことになるので、事前の準備を怠らないこと。

< 授業時間外に必要な学修 >

2時間程度の準備が必要である。

< 提出課題など >

レポート。提出したレポートには意見・修正点・評価などを記した上で返却する。

< 成績評価方法・基準 >

学期末のレポート。

< テキスト >

最初の授業にプリントを配布する。

< 参考図書 >

W. J.T. Mitchell: Picture Theory (Univ. of Chicago Press, 1995)

< 授業計画 >

イントロダクション：エクフラシスとは何か エクフラシスに関する大まかな解説；英文学における代表的作品の紹介

第2回

エクフラシスの文体論的分析 1：W. H. Auden: "Musee des Beaux Art" 作品の解説

第3回

エクフラシスの文体論的分析 2：W. H. Auden: "Musee des Beaux Art" 作品の文体論的特徴の確認とその意義について

第4回

エクフラシスの文体論的分析 3：John Keats:: "Ode on a Grecian Urn" 作品の解説

第5回

エクフラシスの文体論的分析 4：John Keats:: "Ode on a Grecian Urn" 作品の文体論的特徴の確認とその意義について

第6回

エクフラシスの文体論的分析 5：W. B. Yeats:: "Lapis Lazuli" 作品の解説

第7回

エクフラシスの文体論的分析 6：W. B. Yeats:: "Lapis Lazuli" 作品の文体論的特徴の確認とその意義について

第8回

レッシングの『ラオコーン』 18世紀ジャンル論争の背景と意味

第9回

言語学と記号論 1 エクフラシスを記号論的に分析するために記号論の基礎を学ぶ第一回（ソシュールの記号論）

第10回

言語学と記号論 2 エクフラシスを記号論的に分析するために記号論の基礎を学ぶ第二回（パースの記号論）

第11回

言語学と記号論 3 エクフラシスを記号論的に分析するために記号論の基礎を学ぶ第三回（グッドマンの記号論）

第12回

言語学と記号論（まとめ） 記号論的思考のメリットとデメリット

第13回

絵画に対する記号論的・分析的アプローチ1 フーコーの「ラス・メニーヤス」に関する分析を検討する

第14回

絵画に対する記号論的・分析的アプローチ2 前回の続き

第15回

詩の構造と絵画の構造の比較 文体論的・構造的アプローチによるエクフラシス理解の限界について

2022年度 前期

2単位

表現言語論特殊講義 (J)

中村 健史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学研究科修士課程のディプロマポリシーのうち「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」ことを目指して実施される。

この科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻に開講する科目である。

この科目は日本の戯曲を読み、論文を執筆する。今季取りあげるのは山崎正和『世阿弥』である。

授業の目的は以下の通りである。

- (1) 戯曲の主題を正しく把握できるようになる。
- (2) 戯曲作品における表現の意図を正しく把握できるようになる。
- (3) 戯曲を構成・執筆する上での各種の技巧を修得する。
- (4) 1～3を文章のかたちにまとめることができる。

この科目は、教職科目(国語)に属する。実務経験(高等学校を中心とする国語科教員)のある教員が担当するので、必要に応じて教育現場での実例や知見にも触れつつ授業を進めてゆく。

< 到達目標 >

- (1) 戯曲の主題を正しく把握し、口頭で表現できる。
- (2) 戯曲作品における表現の意図を正しく把握し、口頭で表現できる。
- (3) 戯曲を構成・執筆する上での各種の技巧を修得し、説明できる。
- (4) 1～3を文章のかたちにまとめることができる。

< 授業のキーワード >

戯曲

< 授業の進め方 >

演習形式で行うが、担当者をあらかじめ決めることはしないので、全員が毎回予習してくる必要がある。

なお、授業の性質上、授業計画(進度、内容)に変更を加える場合がある。

< 履修するにあたって >

授業開始までに作品を通読し、1場ごとに場面の主題をまとめた2000字程度のレポートを作成しておくこと。第2回の授業時にレポートが準備できていない場合は受講を謝絶することがある。

< 授業時間外に必要な学修 >

授業時間外に必要な学修の目安となる時間は、1回あたり4時間程度である。次の授業に向けて発表の準備もしくは論文の執筆を行うなどの予習が必要である。

< 提出課題など >

第2回～第10回の授業では、全員が毎回発表を行う。第11回～第14回の授業では、全員が毎回論文を執筆し提出する。このほかに期末レポートの提出が必要である。提出物や授業時の発表については、必要に応じてその場で講評し、受講生にフィードバックする。期末レポートについては、提出後、優秀作を提示してフィードバックとする。(したがって、この授業における提出物はフィードバックに利用する場合があることを、受講生はあらかじめ了承しておくこと。なお全体に配布・掲示する場合には、氏名・学籍番号等が分からないよう加工する。)

< 成績評価方法・基準 >

期末レポートを100%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)(4)である。

< テキスト >

『山崎正和全戯曲』 河出書房新社 2016年 32606円 ISBN-13 : 978-4309921051

現在品切れになっているが、『世阿弥』は単行本(河出書房)、新潮文庫、『山崎正和著作集』第1巻などでも読むことができるので、これらのいずれか、もしくはそのコピーでも構わない。

< 授業計画 >

『世阿弥』講読(1) 第1幕を講読する。「授業の目的」(1)?(4)に対応(以下すべて同じ)。

第2回

『世阿弥』講読(2) 第2幕を講読する。

第3回

『世阿弥』講読(3) 第3幕を講読する。

第4回

『世阿弥』講読(4) 第4幕以降を講読する。

第5回

『世阿弥』施注(1) 受講生が第1幕に施注したものを発表する。

第6回

『世阿弥』施注(2) 受講生が第2幕に施注したものを発表する。

第7回

『世阿弥』施注(3) 受講生が第3幕に施注したものを発表する。

を発表する。

第8回

『世阿弥』施注(4) 受講生が第4幕以降に施注したものを発表する。

第9回

論文執筆(1) 『世阿弥』を主題とする論文の構想を受講生が発表する。

第10回

論文執筆(2) 前回の発表を踏まえて内容に修正を施し、再度構想を発表する。

第11回

論文添削(1) 受講生があらかじめ執筆した『世阿弥』の主題に関わる論文を添削する。

第12回

論文添削(2) 前回の添削を踏まえて、再度論文を執筆しなおしたものを、さらに添削する。

第13回

論文添削(3) 受講生があらかじめ執筆した『世阿弥』の表現に関わる論文を添削する。

第14回

論文添削(4) 前回の添削を踏まえて、再度論文を執筆しなおしたものを、さらに添削する。

第15回

まとめ 『世阿弥』の読解を通じて、戯曲という形式の一般的特性や技巧としてどのようなことが読み取れるか、受講生が発表する。

2022年度 後期

2単位

表現言語論特殊講義 (E)

長谷川 弘基

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この授業は主に人間文化学研究科ディプロマポリシーに示す「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」能力の涵養を目指すものである。

[目的] 言語によるコミュニケーションについて、日常行われている実際の言語活動に関して言語学や記号論の知見がどのような意味を持つのか、そもそも言語によるコミュニケーションとはどのようなものであるのかを、じっくりと考察する。

< 到達目標 >

- 1) 「ことば」の不可解さを意識し、その理由を大まかに説明できる。
- 2) 記号論の基本的な考え方を理解する。
- 3) コミュニケーションが抱える問題を理解し、その危

険性を意識できるようになる。

< 授業のキーワード >

言語、意味、記号論、文化コード

< 授業の進め方 >

シラバスに沿って講義を行う。

< 履修するにあたって >

授業で紹介する参考文献や、配布する資料を各自で必ず読むことが必要である(そうしないと、授業内容が理解できなくなる)。

< 授業時間外に必要な学修 >

読まねばならない参考文献も多く、おおむね2時間ほどの予習と復習が求められる。

< 提出課題など >

学期末に課題としてレポートを課す。また、毎回の授業で問題が提出され、解答が求められる。

授業中に口頭でフィードバックする。

< 成績評価方法・基準 >

学期末のレポート(50%)、授業ごとの解答の合算(50%)

< 授業計画 >

イントロダクション 文学、言語学、言語哲学の関連性について

第2回

「意味」とは何か#1 「意味がわかる」「意味がわからない」というとき、いったい何を問題にしているのか? そもそも「意味」とは何なのか? 「言葉」の不可解さについて、フレーゲの記述を参考にして概観する。

第3回

「意味」とは何か#2 引き続き、「意味」について、ウィットゲンシュタインの言説を中心に考察する。

第4回

意味伝達のメカニズムと問題点の確認 日常のコミュニケーションに潜在する興味深い問題点を確認し、以後の講義の道筋を見定める。

第5回

言語の詩的機能 ヤコブソンの言語機能論を参照に、いわゆる言語の「詩的機能」について確認した上で、言語の基本的機能について学ぶ。

第6回

言語機能論 引き続き、ヤコブソンの言語機能論について考察する。

第7回

ソシュールの記号論 ソシュールの記号論を概観し、言語学から記号論への移行の意義について考察する。

第8回

パースの記号論 パースが記号論の分野で果たした役割について概観する。

第9回

ネルソン・グッドマンの二つの記号体系について ネルソン・グッドマンの提唱するアナログ的記号体系とデジ

タル的記号体系の意味と差異について概観する。

第10回

ネルソン・グッドマンの二つの記号体系について #2

引き続き、ネルソン・グッドマンの記号論について考察する。

第11回

ディノテーションとコノテーション ロラン・バルトの指摘を参照に、ディノテーションとコノテーションの差異を確認し、日常のコミュニケーションの仕組みを考察する。

第12回

ディノテーションとコノテーション #2 引き続きディノテーションとコノテーションの問題について考察を深める。

第13回

文化コードとイデオロギー コミュニケーションにおける文化コードの働きについて考察する。

第14回

言葉と記号 以上の講義を振り返り、言語を記号として理解することの意義、記号論の今日的可能性について考察する。

第15回

まとめ 全体のまとめとして、人間にとっての言葉の意味について、新たな視点から考察する。

2022年度 後期

2単位

表現言語論特殊講義 (J)

中村 健史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学研究科修士課程のディプロマポリシーのうち「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」ことを目指して実施される。

この科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻に開講する科目である。

この科目は日本の戯曲を読み、論文を執筆する。今季取りあげるのは井上ひさし『父と暮らせば』である。

授業の目的は以下の通りである。

- (1) 戯曲の主題を正しく把握できるようになる。
- (2) 戯曲作品における表現の意図を正しく把握できるようにする。
- (3) 戯曲を構成・執筆する上での各種の技巧を修得する。
- (4) 1～3を文章のかたちにまとめることができる。

この科目は、教職科目(国語)に属する。実務経験(

高等学校を中心とする国語科教員)のある教員が担当するので、必要に応じて教育現場での実例や知見にも触れつつ授業を進めてゆく。

< 到達目標 >

- (1) 戯曲の主題を正しく把握し、口頭で表現できる。
- (2) 戯曲作品における表現の意図を正しく把握し、口頭で表現できる。
- (3) 戯曲を構成・執筆する上での各種の技巧を修得し、説明できる。
- (4) 1～3を文章のかたちにまとめることができる。

< 授業のキーワード >

戯曲

< 授業の進め方 >

演習形式で行うが、担当者をあらかじめ決めることはしないので、全員が毎回予習してくる必要がある。

なお、授業の性質上、授業計画(進度、内容)に変更を加える場合がある。

< 授業時間外に必要な学修 >

授業時間外に必要な学修の目安となる時間は、1回あたり4時間程度である。次の授業に向けて発表の準備もしくは論文の執筆を行うなどの予習が必要である。

< 提出課題など >

第2回～第10回の授業では、全員が毎回発表を行う。第11回～第14回の授業では、全員が毎回論文を執筆し提出する。このほかに期末レポートの提出が必要である。提出物や授業時の発表については、必要に応じてその場で講評し、受講生にフィードバックする。期末レポートについては、提出後、優秀作を提示してフィードバックとする。(したがって、この授業における提出物はフィードバックに利用する可能性があることを、受講生はあらかじめ了承しておくこと。なお全体に配布・掲示する場合には、氏名・学籍番号等が分からないように加工する。)

< 成績評価方法・基準 >

期末レポートを100%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)(4)である。

< テキスト >

井上ひさし『父と暮らせば』新潮文庫 2001年 473円 I SBN-13 : 978-4101168289

< 授業計画 >

- 『父と暮らせば』講読(1) 第1場を講読する。「授業の目的」(1)?(4)に対応(以下すべて同じ)。
- 第2回 『父と暮らせば』講読(2) 第2場を講読する。
- 第3回 『父と暮らせば』講読(3) 第3場を講読する。
- 第4回 『父と暮らせば』講読(4) 第4場を講読する。
- 第5回 『父と暮らせば』施注(1) 受講生が第1場に施注し

たものを発表する。

第6回

『父と暮らせば』施注(2) 受講生が第2場に施注したものを発表する。

第7回

『父と暮らせば』施注(3) 受講生が第3場に施注したものを発表する。

第8回

『父と暮らせば』施注(4) 受講生が第4場に施注したものを発表する。

第9回

論文執筆(1) 『父と暮らせば』を主題とする論文の構想を受講生が発表する。

第10回

論文執筆(2) 前回の発表を踏まえて内容に修正を施し、再度構想を発表する。

第11回

論文添削(1) 受講生があらかじめ執筆した『父と暮らせば』の主題に関わる論文を添削する。

第12回

論文添削(2) 前回の添削を踏まえて、再度論文を執筆しなおしたものを、さらに添削する。

第13回

論文添削(3) 受講生があらかじめ執筆した『父と暮らせば』の表現に関わる論文を添削する。

第14回

論文添削(4) 前回の添削を踏まえて、再度論文を執筆しなおしたものを、さらに添削する。

第15回

まとめ 『父と暮らせば』の読解を通じて、戯曲という形式の一般的特性や技巧としてどのようなことが読み取れるか、受講生が発表する。

2022年度 前期

2単位

表現言語論方法論 (E)

長谷川 弘基

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この授業は主に人間文化学研究科ディプロマポリシーに示す「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」能力の涵養を目指すものである。

- 1) ロマン派詩人John Keatsの主要作品を読み、Keatsが残した作品の特異性と今日的意義について考える。
- 2) ロマン派の今日的意義について理解する。
- 3) 詩の表現の特異性を理解する。

< 到達目標 >

- 1) 英語の詩が正確に読める。
- 2) 英文の正確な理解に基づき、作品の解釈ができる。
- 3) 正当な解釈に基づいた批評ができる。

< 授業の進め方 >

英語の詩の精読が中心となる。授業中に適宜解説を加える。

< 授業時間外に必要な学修 >

2時間程度の準備が必要である。

< 提出課題など >

レポート。提出したレポートには、意見・修正点・評価などを記した上で返却する。

< 成績評価方法・基準 >

授業内発表50%、期末レポート50%

< テキスト >

Keatsの全詩が収められた詩集(どの出版社でもよい)

< 授業計画 >

Hyperion 1 詩句の解説と解釈

第2回

Hyperion 2 詩句の解説と解釈

第3回

Hyperion 3 詩句の解説と解釈

第4回

Hyperion 4 Hyperionに認められるキーツの思想

第5回

The Fall of Hyperion 1 詩句の解説と解釈

第6回

The Fall of Hyperion 2 詩句の解説と解釈

第7回

The Fall of Hyperion 3 詩句の解説と解釈

第8回

The Fall of Hyperion 4 HyperionからThe Fall of Hyperionへの変化とその意味

第9回

Ode on Indolence 詩句の解説と解釈

第10回

Ode to Psyche 詩句の解説と解釈

第11回

Ode to a Nightingale 詩句の解説と解釈

第12回

Ode on a Grecian Urn 詩句の解説と解釈

第13回

Ode on Melancholy 詩句の解説と解釈

第14回

To Autumn 詩句の解説と解釈

第15回

まとめ キーツの成し遂げたこととその今日的意味

2022年度 前期

2単位

表現言語論方法論 (J)

中村 健史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学研究科修士課程のディプロマポリシーのうち「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」ことを目指して実施される。

この科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻に開講する科目である。

この科目は漢文の講読を行う。今季取りあげるのは梁田蛻巖『蛻巖集』である。蛻巖、名は邦美、字は景鸞。明石藩に仕え、その奔放率直な人柄のとおり、優れた詩を残した。『蛻巖集』巻四には絶句を収める。その文藻の一端を示せば、鉄騎三千庄雲山、翠華一去竜顔惨。臙腫赤幟春風色、留在夕陽松嶼間。あるいは古壘烏啼不見人、嶺雲澗水共春傷。誰知夜半風前笛、吹落梅花作戰塵。史に材をとってロマンティズムを発揮すること、徂徠派の登場を予見せしむるものがある。また前苑鞦韆後苑歌、枕頭花近語声多。醒來斜倚繡屏坐、眉重如山又奈何。あるいは綵籠鸚鵡寂無言、却恨風箏驚夢魂。欲対残粧開鏡匣、深牕花樹易黄昏。同じく唐詩選あたりに範をとって妓楼脂粉の香を詩となすあたり、服部南郭の先蹤といふべきか。名のみ高くして読まれることの少ない詩人であるが、その作は凡俗を超えるものがある。

授業の目的は以下の通りである。

(1) 漢文を正しく訓読できるようになる。

(2) 漢文を正しく現代語訳できるようになる。

(3) 漢文の任意の箇所について文法(句法)の説明を行えるようになる。

(4) 蛻巖の詩を的確に鑑賞し、その特色や文学史的位置づけを指摘できるようになる。

この科目は、教職科目(国語)に属する。実務経験(高等学校を中心とする国語科教員)のある教員が担当するので、必要に応じて教育現場での実例や知見にも触れつつ授業を進めてゆく。

< 到達目標 >

(1) 漢文を正しく訓読し、文章・口頭で表現できる。

(2) 漢文を正しく現代語訳し、文章・口頭で表現できる。

(3) 漢文の任意の箇所について文法(句法)の説明を行える。

(4) 個々の蛻巖詩について、特色や文学史的位置づけを説明できる。

< 授業のキーワード >

漢詩、梁田蛻巖、蛻巖集

< 授業の進め方 >

演習形式で行うが、担当者をあらかじめ決めることはないので、全員が毎回予習してくる必要がある。その場で指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

なお、授業の性質上、授業計画(進度、内容)に変更を加える場合がある。

< 履修するにあたって >

漢文を白文で読める程度の学力があることを前提として授業を進める。

< 授業時間外に必要な学修 >

授業時間外に必要な学修の目安となる時間は、1回あたり3時間程度である。次の授業に向けて講読箇所を訓読・現代語訳し、必要に応じて文法的な分析を加えて予習しておくこと。また、必要に応じて、前時の授業内容を復習し、理解・記憶すること。

< 提出課題など >

予習状況を確認するため数回ノートの提出を求める。また期末レポートの提出が必要である。ノート提出や授業時の発表については、必要に応じてその場で講評し、受講生にフィードバックする。期末レポートについては、提出後、優秀作を提示してフィードバックとする。(したがって、この授業における提出物はフィードバックに利用する場合があることを、受講生はあらかじめ了承しておくこと。なお全体に配布・掲示する場合には、氏名・学籍番号等が分からないように加工する。)

< 成績評価方法・基準 >

授業内で指名されて講読・解釈したときの回答内容を40%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)(3)及び「適切に予習を行っているか」である。

授業時に数回、ノートの提出を求める。ノートに記入された予習内容を30%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)及び「適切に予習を行っているか」である。

期末レポートを30%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)(4)である。

< テキスト >

下記を印刷して持参すること。

{https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko11/bunko11_a1251/bunko11_a1251_0004/bunko11_a1251_0004.pdf}

< 参考図書 >

授業時に漢和辞典を持参すること。電子辞書でも可。

< 授業計画 >

『蛻巖集』講読(1) 巻四? 4丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追

加で求めることもある。「授業の目的」(1)?(4)に対応(以下すべて同じ)。

第2回

『蛻巖集』講読(2) 巻四? 6丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第3回

『蛻巖集』講読(3) 巻四? 8丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第4回

『蛻巖集』講読(4) 巻四? 10丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第5回

『蛻巖集』講読(5) 巻四? 12丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第6回

『蛻巖集』講読(6) 巻四? 14丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第7回

『蛻巖集』講読(7) 巻四? 16丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第8回

『蛻巖集』講読(8) 巻四? 18丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第9回

『蛻巖集』講読(9) 巻四? 20丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第10回

『蛻巖集』講読(10) 巻四? 22丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第11回

『蛻巖集』講読(11) 巻四? 24丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。

場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第12回

『蛻巖集』講読(12) 巻四? 26丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第13回

『蛻巖集』講読(13) 巻四? 28丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第14回

『蛻巖集』講読(14) 巻四? 30丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第15回

『蛻巖集』講読(15) 巻四? 31丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

2022年度 後期

2単位

表現言語論方法論 (E)

長谷川 弘基

<授業の方法>

演習を取り入れた講義

<授業の目的>

この授業は主に人間文化学研究科ディプロマポリシーに示す「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」能力の涵養を目指すものである。

1) アイルランドの詩人W.B.Yeatsの主要作品を読み、Yeatsが残した作品の特異性と今日的意義について考える。

2) いわゆる「イギリス文学」と「アイルランド文学」の差異について理解を深める。

3) モダニズム詩の表現の特異性を理解する。

<到達目標>

1) 英語の詩が正確に読める。

2) 文学におけるナショナリズムを意識できるようになる。

3) 正当な解釈に基づいた批評ができる。

<授業の進め方>

英語の詩の精読が中心となる。授業中に適宜解説を加える。

< 授業時間外に必要な学修 >

2時間ほどの準備が必要である。

< 提出課題など >

レポートは添削して返却する。

< 成績評価方法・基準 >

授業内発表50%、期末レポート50%

< テキスト >

Yeatsの全詩が収められた詩集(どの出版社でもよい)

< 授業計画 >

Crossways Crosswaysから2編の詩をえらび、詩句の解説と解釈を行う。

第2回

The Roseより The Roseから2編の詩をえらび、詩句の解説と解釈を行う。

第3回

The Wind among the Reeds The Wind among the Reedsから2編の詩をえらび、詩句の解説と解釈を行う。

第4回

In the Seven Woods Crosswaysから2編の詩をえらび、詩句の解説と解釈を行う。

第5回

初期Yeatsの特徴 これまで扱った作品をもとに、初期Yeatsの特徴を概観し、イギリス・ロマン派の影響とアイルランド的要素の融合を確認する。

第6回

The Green Helmet and Other Poems The Green Helmet and Other Poemsから2編の詩をえらび、詩句の解説と解釈を行う。

第7回

Responsibilities

Responsibilitiesから2編の詩をえらび、詩句の解説と解釈を行う。

第8回

The Wild Swans at Coole The Wild Swans at Cooleから2編の詩をえらび、詩句の解説と解釈を行う。

第9回

Michael Robertes and the Dancer Michael Robertes and the Dancerから2つの詩を選び、詩句の解説と解釈を行う。

第10回

中期Yeatsの特徴 中期の詩の作風が明らかに世紀末風から脱却し、いわゆるモダニズムへの傾斜を反映し

ていることを確認する。

第11回

The Tower The Towerから2つの詩を選び、詩句の解説と解釈を行う。

第12回

The Towerの文学史的意義 詩集The Towerの文学史的意義を文体面と文化面の双方から概観する。

第13回

The Winding Stair and Other Poems The Winding Stair and Other Poems から2つの詩を選び、詩句の解説と解釈を行う。

第14回

Last Poems Last Poemsから2つの詩を選び、詩句の解説と解釈を行う。

第15回

後期Yeatsの特徴 Yeatsのスタイルの変化を概観し、成し遂げたこととその今日的意味について考察する。

2022年度 後期

2単位

表現言語論方法論 (J)

中村 健史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学研究科修士課程のディプロマポリシーのうち「専門領域において十分な知識と技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる」ことを目指して実施される。

この科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻に開講する科目である。

この科目は漢文の講読を行う。今季取りあげるのは梁田蛻巖『蛻巖集』である。蛻巖、名は邦美、字は景鸞。明石藩に仕え、その奔放率直な人柄のとおり、優れた詩を残した。『蛻巖集』巻二には律詩を収める。その文藻の一端を示せば、鉄騎三千压雲山、翠華一去顔顔慘。臙腫赤幟春風色、留在夕陽松嶼間。あるいは古壘烏啼不見人、嶺雲澗水共春傷。誰知夜半風前笛、吹落梅花作戰塵。史に材をとってロマンティズムを発揮すること、徂徠派の登場を予見せしむるものがある。また前苑鞦韆後苑歌、枕頭花近語声多。醒来斜倚繡屏坐、眉重如山又奈何。あるいは綵籠鸚鵡寂無言、却恨風箏驚夢魂。欲对残粧開鏡匣、深窓花樹易黄昏。同じく唐詩選あたりに範をとって妓楼脂粉の香を詩となすあたり、服部南郭の先蹤というべきか。名のみ高くして読まれることの少ない詩人であるが、その作は凡俗を超えるものがある。

授業の目的は以下の通りである。

(1) 漢文を正しく訓読できるようになる。

(2) 漢文を正しく現代語訳できるようになる。

(3) 漢文の任意の箇所について文法(句法)の説明を行えるようになる。

(4) 蛻巖の詩を的確に鑑賞し、その特色や文学史的な位置づけを指摘できるようになる。

この科目は、教職科目(国語)に属する。実務経験(高等学校を中心とする国語科教員)のある教員が担当するので、必要に応じて教育現場での実例や知見にも触れつつ授業を進めてゆく。

<到達目標>

(1) 漢文を正しく訓読し、文章・口頭で表現できる。

(2) 漢文を正しく現代語訳し、文章・口頭で表現できる。

(3) 漢文の任意の箇所について文法(句法)の説明を行える。

(4) 個々の蛻巖詩について、特色や文学史的な位置づけを説明できる。

<授業のキーワード>

漢詩、梁田蛻巖、蛻巖集

<授業の進め方>

演習形式で行うが、担当者をあらかじめ決めることはしないので、全員が毎回予習してくる必要がある。その場で指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

なお、授業の性質上、授業計画(進度、内容)に変更を加える場合がある。

<履修するにあたって>

漢文を白文で読める程度の学力があることを前提として授業を進める。

<授業時間外に必要な学修>

授業時間外に必要な学修の目安となる時間は、1回あたり3時間程度である。次の授業に向けて講読箇所を訓読・現代語訳し、必要に応じて文法的な分析を加えて予習しておくこと。また、必要に応じて、前時の授業内容を復習し、理解・記憶すること。

<提出課題など>

予習状況を確認するため数回ノートの提出を求める。また期末レポートの提出が必要である。ノート提出や授業時の発表については、必要に応じてその場で講評し、受講生にフィードバックする。期末レポートについては、提出後、優秀作を提示してフィードバックとする。(したがって、この授業における提出物はフィードバックに利用される場合があることを、受講生はあらかじめ了承しておくこと。なお全体に配布・掲示する場合には、氏名・学籍番号等が分からないように加工する。)

<成績評価方法・基準>

授業内で指名されて講読・解釈したときの回答内容を40%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)(3)及び「適切に予習を行っているか」である。

授業時に数回、ノートの提出を求める。ノートに記入された予習内容を30%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)及び「適切に予習を行っているか」である。

期末レポートを30%として評価する。評価基準は、「到達目標」(1)(2)(4)である。

<テキスト>

下記を印刷して持参すること。

{https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko11/bunko11_a1251/bunko11_a1251_0002/bunko11_a1251_0002.pdf}

<参考図書>

授業時に漢和辞典を持参すること。電子辞書でも可。

<授業計画>

『蛻巖集』講読(1) 巻二1丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。「授業の目的」(1)?(4)に対応(以下すべて同じ)。

第2回

『蛻巖集』講読(2) 巻二2丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第3回

『蛻巖集』講読(3) 巻二3丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第4回

『蛻巖集』講読(4) 巻二4丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第5回

『蛻巖集』講読(5) 巻二5丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第6回

『蛻巖集』講読(6) 巻二6丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第7回

『蛻巖集』講読(7) 巻二7丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第8回

『蛻巖集』講読(8) 巻二8丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第9回

『蛻巖集』講読(9) 巻二9丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第10回

『蛻巖集』講読(10) 巻二10丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第11回

『蛻巖集』講読(11) 巻二11丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第12回

『蛻巖集』講読(12) 巻二13丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第13回

『蛻巖集』講読(13) 巻二12丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第14回

『蛻巖集』講読(14) 巻二14丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

第15回

『蛻巖集』講読(15) 巻二15丁を講読する。指名された担当者が訓読を読み上げ、現代語訳を発表する。場合によっては漢文知識や文法(句法)に関する説明を追加で求めることもある。

2022年度 前期

1単位

文化構造論ワークショップ

赤井 敏夫

< 授業の方法 >

対面授業

配布資料に関しては適宜その都度ドットキャンパスでの指示の中でリンクを示す。

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学研究科のDPに示す、「地域の人と文化について独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元しようという意欲」を涵養することを目的とする。

映画から文化の特性を読み取る

各文化圏の民族映画には独自の文化特性が表されている。映画を単なる1ストーリーとして楽しむだけではなく、そこに表現されている文化特性を作品の多様な相から読み取り、異文化理解のためのテキストとしてとらえる視点を養う。

< 到達目標 >

1本の映像作品(映画)をキャラクター設定、ストーリー展開、映像表現など多様な相から分析し、そこに表出されている文化特性を理解できるようにする。

映画に表現されている特異性と普遍性がどのように融合しているかを理解し、自文化と異文化の相違点と共通点を確認できるようにする。

そこからさらに進んでグローバルな共同体の一員としての各文化圏の相対位置を確認し、異文化理解の基礎知識を身につける。

< 授業の進め方 >

担当教員によるレクチャーと受講者による研究発表、およびそれに対する全員による相互批評。

< 授業時間外に必要な学修 >

図書館やレンタルショップなどから得た作品を中心に積極的にインド映画を鑑賞し、その映像表現の様式に親しむ。(目安として1時間ほど)

< 提出課題など >

発表のまとめ2回(チーム毎)、講義ノート2回(各人)、レポート1回(各人)

< 成績評価方法・基準 >

チーム発表2回(30%)、全体ディスカッションの積極性(20%)、講義ノートの提出2回(30%)、レポート1回(20%)

< 授業計画 >

オリエンテーション 本演習の運営方法を説明する。あわせて次週に行う自己紹介のモデルを示し、そこで取り上げるべき映画の書誌的情報の提示の仕方を示す。

第2回

受講生による自己紹介 単なる自己紹介だけではなく、ここでは「自分が勧めるこの映画」と関係させて紹介を行う。紹介する映画の書誌学的情報や鑑賞ポイントなど、説得的なプレゼンテーションを行うことが求められる。

第3回

チーム編成と映画を「読み取る」鑑賞方法の学習 # 1 受講生全員を4チームに分けて構成する。「読み取る」映画のサンプラーとしてインド映画の作品をとりあげ、前半60分は文化特性が表象されている特有の映像表現を

確認してゆく。後半の30分はチーム毎に読み取れた特徴をディスカッションして記録に留める。

第4回

チーム編成と映画を「読み取る」鑑賞方法の学習 # 1

受講生全員を4チームに分けて構成する。「読み取る」映画のサンプラーとしてインド映画の作品をとりあげ、前半60分は文化特性が表象されている特有の映像表現を確認してゆく。後半の30分はチーム毎に読み取れた特徴をディスカッションして記録に留める。

第5回

チーム編成と映画を「読み取る」鑑賞方法の学習 # 1

受講生全員を4チームに分けて構成する。「読み取る」映画のサンプラーとしてインド映画の作品をとりあげ、前半60分は文化特性が表象されている特有の映像表現を確認してゆく。後半の30分はチーム毎に読み取れた特徴をディスカッションして記録に留める。

第6回

全体のディスカッション # 1

各チームから代表がチーム内の前3回のディスカッションの内容をまとめて発表し、全体で内容を吟味して深化する。担当者からの批評もふくめる。

第7回

全体のディスカッション # 1

各チームから代表がチーム内の前3回のディスカッションの内容をまとめて発表し、全体で内容を吟味して深化する。担当者からの批評もふくめる。

第8回

ミニ・レクチャーと問題点の調査 # 1 担当者から映画製作の背景もふくめたミニ・レクチャーを行う。その後ゼミ生はネット情報を中心にディスカッションの問題点となったポイントに関して調査を行う。

第9回

映画を「読み取る」鑑賞方法の学習 # 2 「読み取る」映画の第2のサンプラーとして別のインド映画の作品をとりあげる。運用方法は第3? 5回に同じ。

第10回

映画を「読み取る」鑑賞方法の学習 # 2 「読み取る」映画の第2のサンプラーとして別のインド映画の作品をとりあげる。運用方法は第3? 5回に同じ。

第11回

映画を「読み取る」鑑賞方法の学習 # 2 「読み取る」映画の第2のサンプラーとして別のインド映画の作品をとりあげる。運用方法は第3? 5回に同じ。

第12回

全体のディスカッション # 2

運用方法は第6? 7回に同じだが、これまで学習した知識をもってより深い内容のディスカッションが求められる。

第13回

全体のディスカッション # 2 運用方法は第6? 7回に

同じだが、これまで学習した知識をもってより深い内容のディスカッションが求められる。

第14回

ミニ・レクチャーと問題点の調査 # 2 演習で取り上げた映画と既知の映画との映像表現上での相違点を確認し、文化的特性の評価を行う。

第15回

総合批評への準備

演習で取り上げた映画と既知の映画との映像表現上での相違点を確認し、文化的特性の評価を行う。

2022年度 前期～後期

4単位

文化構造論演習 (2年次)

赤井 敏夫

<授業の方法>

演習、対面授業

<授業の目的>

この科目は、人間文化学科DPに定める、「地域の人と文化について独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元しようという意欲をもつ」意識を高め、かつ「地域の人と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献でき、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができる」人材を養育することを目的とするものである。先行研究によって蓄積された資料を読み解いて分析し、自ら構築した理論を補強する資料として用いられるようにする。

<到達目標>

演習で検討した検証した基礎データを論理立てて修士論文の骨子とする。

<授業の進め方>

資料の輪読、提出された課題を担当者が添削

<授業時間外に必要な学修>

事前学習：各自のプレゼンテーションは、授業時間外に準備しておくこと。論文執筆は、各自で適宜進めること。(60?90分)

事後学習：プレゼンテーションや修士論文の草稿は講評するので、修士論文完成の参考とすること。(60分)

<提出課題など>

プレゼンテーション、修士論文。プレゼンテーションや修士論文の草稿は講評するので、修士論文完成の参考とすること。

<成績評価方法・基準>

プレゼンテーション30%、論文70%で評価する。

<テキスト>

特に定めない。適宜、授業内で指示する。

<参考図書>

特に定めない。

< 授業計画 >

オリエンテーション 授業の目的、到達目標、進め方および成績評価の基準について説明する。研究倫理についても確認する。

第2回

方法論の検討 先行研究を整理し、修士論文の執筆に向けた方法論を検討する。

第3回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第4回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第5回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第6回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第7回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第8回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第9回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第10回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第11回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第12回

プレゼンテーション準備 修士論文中間発表会に向けて、プレゼンテーション準備をおこなう。

第13回

プレゼンテーション準備 修士論文中間発表会に向けて、プレゼンテーション準備をおこなう。

第14回

プレゼンテーション準備 修士論文中間発表会に向けて、プレゼンテーション準備をおこなう。

第15回

プレゼンテーション 修士論文中間発表会において、プレゼンテーションおよびディスカッションをおこなう。

第16回

問題点の確認 修士論文中間発表会において提起された問題点を確認し、その対応について議論する。

第17回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第18回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第19回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第20回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第21回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第22回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第23回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第24回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第25回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第26回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第27回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第28回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第29回

修士論文の提出 完成した修士論文を提出する。

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

文化構造論演習（1年次）

赤井 敏夫

< 授業の方法 >

演習、対面授業

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学学科DPに定める、「地域の人と文化について独創的な研究を進め、自らの研究成果を学

界および社会に還元しようという意欲をもつ」意識を高め、かつ「地域の人と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献でき、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができる」人材を養育することを目的するものである。先行研究によって蓄積された資料を読み解いて分析し、自ら構築した理論を補強する資料として用いられるようにする。

<到達目標>

演習で検討した検証した基礎データを論理立てて修士論文の骨子とする。

<授業の進め方>

資料の輪読。与えられた課題を担当者が添削。

<授業時間外に必要な学修>

事前学習：各自のプレゼンテーションは、授業時間外に準備しておくこと。論文執筆は、各自で適宜進めること。(60?90分)

事後学習：プレゼンテーションや修士論文の草稿は講評するので、修士論文完成の参考とすること。(60分)

<提出課題など>

プレゼンテーション、修士論文。プレゼンテーションや修士論文の草稿は講評するので、修士論文完成の参考とすること。

<成績評価方法・基準>

プレゼンテーション30%、論文70%で評価する。

<テキスト>

特に定めない。適宜、授業内で指示する。

<参考図書>

特に定めない。

<授業計画>

オリエンテーション 授業の目的、到達目標、進め方および成績評価の基準について説明する。研究倫理についても確認する。

第2回

方法論の検討 先行研究を整理し、修士論文の執筆に向けた方法論を検討する。

第3回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第4回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第5回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第6回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第7回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読

をおこなう。

第8回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第9回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第10回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第11回

テキストの講読 先行研究からテキストを選択し、講読をおこなう。

第12回

プレゼンテーション準備 修士論文中間発表会に向けて、プレゼンテーション準備をおこなう。

第13回

プレゼンテーション準備 修士論文中間発表会に向けて、プレゼンテーション準備をおこなう。

第14回

プレゼンテーション準備 修士論文中間発表会に向けて、プレゼンテーション準備をおこなう。

第15回

プレゼンテーション 修士論文中間発表会において、プレゼンテーションおよびディスカッションをおこなう。

第16回

問題点の確認 修士論文中間発表会において提起された問題点を確認し、その対応について議論する。

第17回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第18回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第19回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第20回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第21回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第22回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第23回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第24回

修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第25回
修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第26回
修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第27回
修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第28回
修士論文の執筆 修士論文の執筆を、策定したスケジュールに従って進め、教員がフィードバックをおこなう。

第29回
修士論文の提出 完成した修士論文を提出する。

第30回

2022年度 前期

2単位

文化構造論特殊講義

上田 学

< 授業の方法 >

講義、演習

< 授業の目的 >

・本授業は、人間文化学研究科DPが示す、「専門領域において十分な学識を蓄積し、それを実社会の諸問題に対して的確に応用する能力」の修得を目指すものである。具体的には、日本映画の通史的な理解を深め、その表現的模索の歴史的過程についての知識を修得する。

・本授業は、人間文化学研究科の地域文化論専攻の開講科目に位置づけられる。

< 到達目標 >

1. 映画史に関して専門書を読み込み、その内容を自らまとめることで、人文学的な研究の方法を身につけて深化させる。

2. テキスト等から得た知識を活用し、プレゼンテーションやレポートを通じて、自らの考えを的確に表現できるようにする。

< 授業の進め方 >

・第1回から第9回まで、映画作品の抜粋映像を視聴しながら、日本映画史の基礎知識を修得する。

・第10回から第14回まで、関西の映画史跡およびフィルム・アーカイブに関する調査を実施し、日本映画史の基礎知識を修得する。

< 授業時間外に必要な学修 >

事前学習：各自のプレゼンテーションは、授業時間外に準備しておくこと。(60?120分)

事後学習：受講生のプレゼンテーションは講評するので、

期末レポート作成の参考とすること。(60分)

< 提出課題など >

小課題、プレゼンテーション、期末レポート。受講生のプレゼンテーションは講評するので、期末レポート作成の参考とすること。

< 成績評価方法・基準 >

質疑応答・小課題15%、プレゼンテーション30%、期末レポート55%で評価する。

< テキスト >

特に定めない。適宜、授業内で指示する。

< 参考図書 >

田中純一郎『日本映画発達史』1～5、中央公論社、1975～1981年

No?I Burch, To the Distant Observer: Form and Meaning in Japanese Cinema, University of California Press, 1979.

< 授業計画 >

オリエンテーション 授業の目的、到達目標、進め方および成績評価の基準について説明する。受講生は自己紹介をして、プレゼンテーションの日程を決定する。

第2回

絵であること / 写真であること 写真油絵など、19世紀に出現した絵画と写真の中間的な表現から、映像文化の定義を考える。

第3回

江戸時代の映像文化 写真や映画といった複製技術以前から存在した、多様な映像文化の魅力について学ぶ。

第4回

映像のオリエンタリズム 映画が発明されてから、なぜそれがすぐに日本に伝来したのか、その政治性を考える。

第5回

地域が生み出す映像文化 東京と京都という日本映画の製作拠点が、地域とどのように結びついて成立したのかを学ぶ。

第6回

無声映画の音 無声映画という映像表現の特徴と、その時代にみられた、多様な音の実践について考える。

第7回

日本映画という表現形式 日本映画のどのような表現形式が国際的に高く評価され、それがなぜ形成されたのかを学ぶ。

第8回

政治のなかの文化映画 亀井文夫と三木茂の「ルーペ論争」が、どのような映像の問題を提示しているのかを考える。

第9回

デジタル時代の記録映画 デジタル配信が進む現代の映像文化に、記録映画がどのような可能性をもっているのかを考える。

第10回

身近な映像文化を知る1 関西の映画史を学ぶ 映画が初輸入された神戸や現在も撮影所を抱える京都と映画史の関係を学習する。

第11回

身近な映像文化を知る2 京都の映画史跡とテーマ選択 京都の映画史跡に関する講義後、受講生は特定の史跡をテーマに選択する。

第12回

身近な映像文化を知る3 プレゼンテーションの準備 京都の映画史跡および関西のフィルム・アーカイブに関する予備調査をおこなう。

第13回

身近な映像文化を知る4 プレゼンテーション 選択した映画史跡、およびフィルム・アーカイブについてのプレゼンテーションを実施する。

第14回

身近な映像文化を知る5 プレゼンテーション 選択した映画史跡、およびフィルム・アーカイブについてのプレゼンテーションを実施する。

第15回

まとめ 授業全体のまとめをし、今後の研究に向けた関連文献の紹介をおこなう。

2022年度 後期

2単位

文化構造論特殊講義

赤井 敏夫

< 授業の方法 >

対面講義。少人数授業なので担当者が提供する外国語文献を輪読し、履修者が関連資料を調査してグループもしくは個人でペーパー提出というかたちで調査発表を行う。

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学科DPに定める、「地域の人と文化について独創的な研究を進め、自らの研究 成果を 学 界および社会に還元しようという意欲をもつ」意識を高め、かつ「地域の人と文化に関する 豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献でき、さまざまな実践現場で中核的・ 指導的役割を担うことができる」人材を養育することを目的するものである。文化構造論特殊講義の最終型と位置づけられ、過去に蓄積された資料を読み解いて分析し、自ら構築した理論を補強する資料として用いられるようにする。

< 到達目標 >

以下の2つの論点に関して専門的知見を修得する。

1 日本マンガのグローバル化

2 日本アニメのグローバル化の要因

< 授業の進め方 >

テキストを輪読し、関連文献を精査したうえで、それらに対する批評をペーパーにまとめる。提出されたペーパー

は相互批評のうえ精度を高める。

< 履修するにあたって >

専門的な英文資料を精読するので十分な準備と英語力を必要とする。他講座からの受講を歓迎するが特別の配慮はしないので綿密な予習復習が必須である。

< 授業時間外に必要な学修 >

テキスト指定箇所の読解とペーパー作成のための調査。指定文献の分析に毎回 1 時間

< 提出課題など >

研究発表するペーパー

< 成績評価方法・基準 >

ペーパー提出2回(25点×2=50点)+ディスカッションの内容の評価(50点)

< テキスト >

Global Manga, Manga in America: Transnational Book Publishing and the Domestication of Japanese Comics (2016)からの数章

Laz Carter, "Going 'Global': 'Studio Ghibli', 'Global Anime' and the Popularisation of a 'Medium-Genre'" (2018)

< 授業計画 >

ガイダンス 授業の運営方法の説明。テキストの紹介。

第2回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第3回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第4回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第5回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第6回

ペーパー相互批評 提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第7回

ペーパー相互批評

提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第8回

ペーパー相互批評

提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第9回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第10回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第11回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第12回

輪読 テキストの指定部分の輪読。

第13回

ペーパー相互批評

提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第14回

ペーパー相互批評

提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第15回

ペーパー相互批評

提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

2022年度 前期

2単位

文化構造論方法論

上田 学

< 授業の方法 >

講義、演習

< 授業の目的 >

・本授業は、人間文化学研究科DPが示す、「専門領域において十分な学識を蓄積し、それを実社会の諸問題に対して的確に応用する能力」の修得を目指すものである。具体的には、『フィルム・アート』を取り上げ、受講生とともに、映画の形式、物語、ジャンルに関わる各章の講読をおこない、映画表現への理解を深める。

・本授業は、人間文化学研究科の地域文化論専攻の開講科目に位置づけられる。

< 到達目標 >

1. 専門書を読み込み、その内容を自らまとめることで、人文学的な研究の方法を身につけて深化させる。
2. テキスト等から得た知識を活用し、プレゼンテーションやレポートを通じて、自らの考えを的確に表現できるようにする。

< 授業の進め方 >

・第1回から第3回まで、講義形式で、授業の進め方、プレゼンテーションの方法、テキストの背景について説明する。

・第4回から第14回まで、受講生各自が、それぞれ分担したテキストの担当範囲について、事前に内容をまとめ、プレゼンテーションする。プレゼンテーションの担当者以外も、事前に当該箇所のテキストを読み込み、質疑応答を通じて授業に参加する。

< 履修するにあたって >

テキストを原書とするか翻訳書とするかは、受講生の構成を鑑みて、第一回の授業で決定する。

< 授業時間外に必要な学修 >

事前学習：各自の担当範囲のプレゼンテーションは、授業時間外に準備しておくこと。また、自分が担当していない箇所についても、授業で取り上げる前に、必ず予習として目を通しておくこと。(60?90分)

事後学習：受講生のプレゼンテーションは講評するので、本文を参照し復習の上で、期末レポート作成の参考とすること。(60分)

< 提出課題など >

プレゼンテーション、期末レポート。受講生のプレゼンテーションは講評するので、期末レポート作成の参考とすること。

< 成績評価方法・基準 >

質疑応答・小課題15%、プレゼンテーション30%、期末レポート55%で評価する。

< テキスト >

デイヴィッド・ボードウェル、クリスティン・トンプソン著、藤木秀朗監訳『フィルム・アート 映画芸術入門』名古屋大学出版会、2007年

David Bordwell and Kristin Thompson, Film Art: A n Introduction, 7th ed., McGraw-Hill Education, 2003.

< 参考図書 >

特に定めない。適宜、授業内で指示する。

< 授業計画 >

オリエンテーション 授業の全体的な概要、進行方法と成績評価の基準について説明する。受講生は自己紹介をして、テキストの担当範囲を振り分ける。

第2回

プレゼンテーションの方法 テキストの一節を取り上げながら、具体的なプレゼンテーションの方法について説明する。

第3回

フィルム・スタディーズ フィルム・スタディーズという学問分野と、テキストが書かれた背景について説明する。

第4回

テキストの講読 テキストの各節について、担当した受講生がプレゼンテーションし、他の受講生を交えて質疑応答する。

第5回

テキストの講読 テキストの各節について、担当した受講生がプレゼンテーションし、他の受講生を交えて質疑応答する。

第6回

テキストの講読 テキストの各節について、担当した受講生がプレゼンテーションし、他の受講生を交えて質疑応答する。

第7回

テキストの講読 テキストの各節について、担当した受講生がプレゼンテーションし、他の受講生を交えて質疑応答する。

第8回

テキストの講読 テキストの各節について、担当した受講生がプレゼンテーションし、他の受講生を交えて質疑応答する。

第9回

テキストの講読 テキストの各節について、担当した受講生がプレゼンテーションし、他の受講生を交えて質疑

応答する。

第10回

テキストの講読 テキストの各節について、担当した受講生がプレゼンテーションし、他の受講生を交えて質疑応答する。

第11回

プレゼンテーション テキストから修得した方法論を用いて、受講生各自が選択した映画作品を分析する。

第12回

プレゼンテーション テキストから修得した方法論を用いて、受講生各自が選択した映画作品を分析する。

第13回

プレゼンテーション テキストから修得した方法論を用いて、受講生各自が選択した映画作品を分析する。

第14回

プレゼンテーション テキストから修得した方法論を用いて、受講生各自が選択した映画作品を分析する。

第15回

まとめ 授業全体のまとめをし、今後の研究に向けた関連文献の紹介をおこなう。

2022年度 後期

2単位

文化構造論方法論

赤井 敏夫

< 授業の方法 >

対面講義

担当教員の提示する2種類のテキストを輪読し、読み取った内容をペーパーにまとめて提出(計2回)、それを相互批評する。担当教員は適宜寸評と指導を行う。

< 授業の目的 >

この科目は、人間文化学科DPに定める「地域の人と文化について独創的な研究を進め、自らの研究成果を学会および社会に還元しようとする意欲」を高め、かつ「地域と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献でき、さまざまな実践現場で中核的・指導的役割を担うことができる」人材を養育することを目的とする。

< 到達目標 >

以下の2つの論点に関して専門的知見を修得する。

コミック批評の方法論

日本マンガの社会学的分析

< 授業のキーワード >

アニメ論、コミック研究

< 授業の進め方 >

先行研究から必要な部分を抽出して輪読し、関連文献を精査したうえで、それらに対する批評をペーパーにまとめる。提出されたペーパーは相互批評して精度を高める。

< 履修するにあたって >

他講座からの履修を歓迎するが特別の配慮は行わないので綿密な予習復習が必要である。

< 授業時間外に必要な学修 >

指定文献の分析に毎回1時間

< 提出課題など >

ペーパー2回

< 成績評価方法・基準 >

ペーパー提出2回(25点×2=50点)+相互批評の内容の評価(50点)=100点

< テキスト >

山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く:「好き」を学問にする方法』

< 参考図書 >

輪読する先行研究については授業中に適宜指示する。

< 授業計画 >

ガイダンス 授業の運営方法の説明とテキストの紹介。

第2回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第3回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第4回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第5回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第6回

ペーパー相互批評 提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第7回

ペーパー相互批評 提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第8回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第9回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第10回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第11回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第12回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第13回

テキスト輪読 テキストの指定部分の輪読

第14回

ペーパー相互批評 提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

第15回

ペーパー相互批評 提出されたペーパーをもとに相互批評を行う。

2022年度 後期

1単位

歴史情報論ワークショップ

北村 厚

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

『史学概論』を読む

このワークショップでは、歴史学の理論に関する集大成ともいえるべき、遅塚忠躬『史学概論』を精読し、人間文化学研究所DPにある、専門領域における十分な知識・技能を蓄積し、それを学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用することができる能力を培う。

遅塚忠躬『史学概論』は、日本の歴史学における歴史理論書の金字塔である。フランス近代史の大家である遅塚氏は、近年拡散しあいまになりつつある歴史学の理論について集大成的な概論を書き上げた。歴史学の学術的核心は「論理整合性」と「事実立脚性」にあるとする遅塚は、歴史の事実認識を構築するための認識論を本論で展開している。本書を精読することによって歴史学の考え方を身に付け、実際の研究活動や身の回りの歴史に対する考え方に活用できるようになることが、このワークショップの目的である。

< 到達目標 >

1. 歴史学の方法を身に付け、自身の研究に応用することができる。
2. 事実の客観性とその問題点について思考し、議論することができる。

< 授業のキーワード >

歴史学 史学概論 史料批判 客観性 因果関係

< 授業の進め方 >

毎週、担当者がレジュメを作成し、論点を考えて報告を行います。テキストはコピーを配布します。

< 授業時間外に必要な学修 >

予習と報告準備に3時間は必要です。

< 成績評価方法・基準 >

報告レジュメ、質疑応答、テキストに対する理解の深さなどを総合して成績を付けます。

< 参考図書 >

遅塚忠躬『史学概論』東京大学出版会、2010年

< 授業計画 >

ガイダンス 受講生の自己紹介と、テキストの配布と説明をします。

第2回

歴史学の成立要因 テキスト「はしがき」を精読し、歴史学の成立要件について考えます。

第3回

歴史学の目的 1 テキスト第1章「歴史学の目的」より、第1節「歴史学の目的の三分区」を精読し、議論します。

第4回

歴史学の目的 2 テキスト第1章「歴史学の目的」より、第2節「三様の歴史学の相違点と相互関係」を精読し、議論します。

第5回

歴史学の目的 3 テキスト第1章「歴史学の目的」より、第3節「歴史学の目的と効用」を精読し、議論します。

第6回

歴史学の対象とその認識 1 テキスト第2章「歴史学の対象とその認識」の第1節「人類の過去の文化」を精読します。

第7回

歴史学の対象とその認識 2 テキスト第2章「歴史学の対象とその認識」の第2節「事実についての予備的考察」を精読します。

第8回

歴史学の対象とその認識 3 テキスト第2章「歴史学の対象とその認識」の第3節「事実の種類とそれぞれの性質」を精読します。

第9回

歴史学の対象とその認識 4 テキスト第2章「歴史学の対象とその認識」の第4節「史料による事実の確認と復元」を精読します。

第10回

歴史学の対象とその認識 5 テキスト第2章「歴史学の対象とその認識」の第5節「事実認識についての学会の論議」を精読します。

第11回

歴史認識の基本的性格 1 テキスト第4章「歴史認識の基本的性格」の第1節「歴史学の主観性と客観性」を精読します。

第12回

歴史認識の基本的性格 2 テキスト第4章「歴史認識の基本的性格」の第2節「歴史認識の蓋然性と歴史の趨勢」を精読します。

第13回

歴史認識の基本的性格 3 テキスト第4章「歴史認識の基本的性格」の第3節「歴史における因果関係と因果的必然性」を精読します。

第14回

歴史認識の基本的性格 4 テキスト第4章「歴史認識の基本的性格」の第4節「歴史における偶然性と自由意志」を精読します。

第15回

歴史認識の基本的性格 5 テキスト第4章「歴史認識の基本的性格」の第5節「歴史における相互連関の円環構造」を精読します。

2022年度 前期～後期

4単位

歴史情報論演習（2年次）

大原 良通

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本演習科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻の演習科目として位置づけられ、歴史情報講座の連携した指導のもとおこなわれる。修士論文の大筋を院生・教員共同で検討し、人間文化研究科地域文化論専攻のDPに示されている「人と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献できる」「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」知識技能を教授し、「独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元することができる」思考・判断・表現を指導し、あわせて、「将来にわたって、学問・研究への関心をもちつづけ、さまざまな実践現場で専門知識や技能にもとづいた貢献を果たすことができる」意欲・態度を育成することを目的とする。

< 到達目標 >

自分の研究について、研究をおこなうための前提となる事柄を論理説明でき（知識）、人の意見に耳を傾け、協調的・建設的な議論ができる研究的協働の（態度・習慣）を身につけ、客観的な根拠に基づいたオリジナリティのある主張を構築できる（態度・技能）身につく。また、研究に必要な情報の検索・収集の方法を獲得する（技能）。結果として、自らの研究に必要な調査方法を習得し、自分の主張を筋道をたてて文章で適切に表現できるようになる（技能）。最終的には、自分の主張を筋道をたてて口頭または、文章等で適切に表現できるようになる（技能）。

< 授業の進め方 >

基本対面、社会的状況、個人的状況により、遠隔（ZOOM、ブログ、Googledriveで実施する。

演習順は、状況により変えることがあるが、事前に周知する。

< 授業時間外に必要な学修 >

授業外でも各自で最大限の時間をあてて修士論文にとりくむようにしてください。具体的な方法はテーマに応じて指導します。（毎週6時間以上）

< 提出課題など >

1. 研究内容提示の際は、発表内容をまとめた資料（提出日、氏名、資料頁、出典明示）を作成し提出する。評価できる点、改善すべき点については、毎回コメントする。
2. 発表の後、修正したものを点検し、発表週内に指導教員に提出する。教員はこれを点検し、必要に応じてコメ

ントをする。

3. 中間発表、人文学会等発表の提出前には、指定の日時に草稿を提出する。

< 成績評価方法・基準 >

研究内容・意見交換への参加・コメント内容50%、中間報告書を始めとする課題提出50%をあわせて評価します。中間報告書の提出が期限内におこなわれなかった場合は、評価の対象としません。

< 授業計画 >

研究指導のガイダンス テーマの選択、研究方法、対象に関して、その指導法、指導手法に関するガイダンスをおこなう。

第2回

研究倫理 調査される迷惑、個人情報保護、剽窃防止、研究記録の作成、アカデミックハラスメント防止等に関して、指導する。

第3回

指導者の研究1 歴史情報講座の合同研究室紹介をする。森栗（歴史民俗学とまちづくり、総合社会科教育）、大原（中国・チベット史、衣服・茶の歴史）、北村（ドイツ現代史、グローバルヒストリーと教育）。

第4回

院生の研究と展望 院生テーマの相互検討をおこなう。

第5回

フィールドワーク1 時間外の野外実習をおこなう。

第6回

研究仮説と先行研究 2年生などの研究仮説を中心に指導する。

第7回

問いと先行研究 2 1年生の問いと研究展望を中心に指導する。

第8回

個別研究指導 個別研究に対して指導する。

第9回

先行研究と研究方法1 2年生などが集めた先行研究から、研究方法を検討する。

第10回

先行研究と研究方法2 1年生が集めた先行研究から、研究方法を検討する。

第11回

中間発表1 修士論文の構想を発表する。学部生や他研究室の学生も参加できるように、当該時間以外の日時場所を設定することもある。

第12回

指導者の研究2 現時点での指導研究者の研究動態を知る。（研究の構想と仮説、先行研究探査、対象限定の方法）

第13回

個別研究指導 個別研究に対して指導する（時間外に、フィールドでの指導も必要に応じて行う）。

第14回
個別研究指導 個別研究に対して指導する（時間外に、フィールドでの指導も必要に応じて行う）。

第15回
夏期研究活動の指導 夏期休暇中の卒業研究の進め方の指導をする。

第16回
自他の研究成果のふりかえり1 人文学会他、学会学術講演会への参加、または発表

第17回
フィールドワーク2 時間外の野外実習

第18回
論文構成のみなおし1 相互に、論文の構造をみなおす。

第19回
論文構成のみなおし2 相互に、論文の構造をみなおす

第20回
個別研究指導 個別研究に対して最終指導をする。

第21回
中間発表2 学部生、他研究室の聴講可能な時間方法を設定する。

第22回
教員の今の研究 研究の構想と問い、先行研究探査、対象限定を知る

第23回
個別論文指導1 個別に論文の最終チェックをおこなう。

第24回
修士論文の最終チェック 相互にチェックする。

第25回
個別論文指導1 個別に論文の指導をおこなう。

第26回
修士論文最終チェック 集団で相互チェックを行う。

第27回
事後指導 修士論文提出後の集団指導。

第28回
個別発表準備 プレゼンテーション、資料の整備に関する個別指導

第29回
修士論文発表会の事前報告 発表の事前指導を共同指導する。

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

歴史情報論演習（2年次）

森栗 茂一

<授業の方法>

演習（状況により遠隔になることがある）

<授業の目的>

本演習科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻

の演習科目として位置づけられ、歴史情報講座の連携した指導のもとおこなわれる。修士論文の大筋を院生・教員共同で検討し、人間文化研究科地域文化論専攻のDPに示されている「人と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献できる」「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」知識技能を教授し、「独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元することができる」思考・判断・表現を指導し、あわせて、「将来にわたって、学問・研究への関心をもちつづけ、さまざまな実践現場で専門知識や技能にもとづいた貢献を果たすことができる」意欲・態度を育成することを目的とする。

<到達目標>

自分の研究について、研究をおこなうための前提となる事柄を論理説明でき（知識）、人の意見に耳を傾け、協調的・建設的な議論ができる研究的協働の（態度・習慣）を身につけ、客観的な根拠に基づいたオリジナリティのある主張を構築できる（態度・技能）身につく。また、研究に必要な情報の検索・収集の方法を獲得する（技能）。結果として、自らの研究に必要な調査方法を習得し、自分の主張を筋道をたてて文章で適切に表現できるようになる（技能）。最終的には、自分の主張を筋道をたてて口頭または、文章等で適切に表現できるようになる（技能）。

<授業の進め方>

"基本対面、社会的状況、個人的状況により、遠隔（ZOOM, ブログ、Googledriveで実施する。演習順は、状況により変えることがあるが、事前に周知する。"

<授業時間外に必要な学修>

授業外でも各自で卒業最大限の時間をあてて修士研究と取り組むようにしてください。具体的な方法はテーマに応じて指導します。（毎週6時間以上）

<提出課題など>

1. 研究内容提示の際は、発表内容をまとめた資料（提出日、氏名、資料頁、出典明示）を作成し提出する。評価できる点、改善すべき点については、毎回コメントする。
2. 発表の後、修正したものを点検し、発表週内に指導教員に提出する。教員はこれを点検し、必要に応じてコメントをする。
3. 中間発表、人文学会等発表の提出前には、指定の日時に草稿を提出する。

<成績評価方法・基準>

研究内容・意見交換への参加・コメント内容50%、中間

報告書を始めとする課題提出50%をあわせて評価します。中間報告書の提出が期限内におこなわれなかった場合は、評価の対象としません。

< 授業計画 >

研究指導のガイダンス

テーマの選択，研究方法、対象に関して、その指導法、指導手法に関するガイダンスをおこなう。

第2回

研究倫理 調査される迷惑、個人情報保護、剽窃防止、研究記録の作成、アカデミックハラスメント防止等に関して、指導する。

第3回

指導者の研究 1 歴史情報講座の合同研究室紹介をする。森栗（歴史民俗学とまちづくり、総合社会科教育）、大原（中国・チベット史、衣服・茶の歴史）、北村（ドイツ現代史、グローバルヒストリーと教育）。

第4回

院生の研究と展望 院生テーマの相互検討をおこなう。

第5回

フィールドワーク 1 定められた時間外に野外実習をおこなう。

第6回

研究仮説と先行研究 2年生などの研究仮説を中心に指導する。

第7回

問いと先行研究 2 1年生の問いと研究展望を中心に指導する。

第8回

個別研究指導 個別研究に対して指導する。

第9回

先行研究と研究方法 1 2年生などが集めた先行研究から、研究方法を検討する。

第10回

先行研究と研究方法 2 1年生が集めた先行研究から、研究方法を検討する。

第11回

中間発表 1 修士論文の構想を発表する。学部生や他研究室の学生も参加できるように、定められた時間以外の日時場所を設定することもある。

第12回

指導者の研究 2 現時点での指導研究者の研究動態を知る。（研究の構想と仮説、先行研究探査、対象限定の方法）

第13回

個別研究指導 個別研究に対して指導する（時間外に、フィールドでの指導も必要に応じて行う）。

第14回

個別研究指導 個別研究に対して指導する（時間外に、フィールドでの指導も必要に応じて行う）。

第15回

夏期研究活動の指導 夏期休暇中の研究の進め方の指導をする。

第16回

自他の研究成果のふりかえり 1

人文学会他、学会学術講演会への参加、または発表も含めて

第17回

フィールドワーク 2 定められた時間外の野外実習を行う。

第18回

論文構造のみなおし 1 相互に、論文の構造をみなおす。

第19回

論文構造の見直し 2 相互に、論文の構造をみなおす。

第20回

個別研究指導 個別研究に対して最終指導をする。

第21回

中間発表 2 学部生、他研究室の聴講可能な時間方法を設定する。

第22回

研究の総合的検討 研究の構想と問い、先行研究探査、対象限定を知る

第23回

個別論文指導 1 個別に論文のチェックをおこなう。

第24回

修士論文のチェック

相互にチェックする。

第25回

個別論文指導 1 個別に論文の指導をおこなう。

第26回

修士論文最終チェック 集団で最終相互チェックを行う。

第27回

事後指導 修士論文提出後の集団指導。

第28回

個別発表準備 プレゼンテーション、資料の整備に関する個別指導

第29回

修士論文発表会の事前報告

発表の事前指導を共同実施する。

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

歴史情報論演習 (1年次)

大原 良通

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本演習科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻の演習科目として位置づけられ、歴史情報講座の連携した指導のもとおこなわれる。修士論文の大筋を院生・教員共同で検討し、人間文化研究科地域文化論専攻のDPに示されている「人と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献できる」「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」知識技能を教授し、「独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元することができる」思考・判断・表現を指導し、あわせて、「将来にわたって、学問・研究への関心をもちつづけ、さまざまな実践現場で専門知識や技能にもとづいた貢献を果たすことができる」意欲・態度を育成することを目的とする。

< 到達目標 >

自分の研究について、研究をおこなうための前提となる事柄を論理説明でき(知識)、人の意見に耳を傾け、協調的・建設的な議論ができる研究的協働の(態度・習慣)を身につけ、客観的な根拠に基づいたオリジナリティのある主張を構築できる(態度・技能)身につく。また、研究に必要な情報の検索・収集の方法を獲得する(技能)。結果として、自らの研究に必要な調査方法を習得し、自分の主張を筋道をたてて文章で適切に表現できるようになる(技能)。最終的には、自分の主張を筋道をた

てて口頭または、文章等で適切に表現できるようになる(技能)。

< 授業の進め方 >

基本対面、社会的状況、個人的状況により、遠隔(ZOOM、ブログ、Googledriveで実施する。

演習順は、状況により変えることがあるが、事前に周知する。

< 授業時間外に必要な学修 >

授業外でも各自で最大限の時間をあてて修士研究にとりくむようにしてください。具体的な方法はテーマに応じて指導します。(毎週6時間以上)

< 提出課題など >

1.研究内容提示の際は、発表内容をまとめた資料(提出日、氏名、資料頁、出典明示)を作成し提出する。評価できる点、改善すべき点については、毎回コメントする。
2.発表の後、修正したものを点検し、発表週内に指導教員に提出する。教員はこれを点検し、必要に応じてコメントをする。

3.中間発表、人文学会等発表の提出前には、指定の日時に草稿を提出する。

< 成績評価方法・基準 >

研究内容・意見交換への参加・コメント内容50%、中間報告書を始めとする課題提出50%をあわせて評価します。中間報告書の提出が期限内におこなわれなかった場合は、評価の対象としません。

< 授業計画 >

研究指導のガイダンス テーマの選択、研究方法、対象に関して、その指導法、指導手法に関するガイダンスをおこなう。

第2回

研究倫理 調査される迷惑、個人情報保護、剽窃防止、研究記録の作成、アカデミックハラスメント防止等に関して、指導する。

第3回

指導者の研究 1 歴史情報講座の合同研究室紹介をする。森栗(歴史民俗学とまちづくり、総合社会科教育)、大原(中国・チベット史、衣服・茶の歴史)、北村(ドイツ現代史、グローバルヒストリーと教育)。

第4回

院生の研究と展望 院生テーマの相互検討をおこなう。

第5回

フィールドワーク 1 時間外の野外実習をおこなう。

第6回

研究仮説 と 先行研究 2年生などのを研究仮説を中心に指導する。

第7回

問い と 先行研究 2 1年生の問いと研究展望を中心に指導する。

第8回

個別研究指導 個別研究に対して指導する。

第9回

先行研究と研究方法 1 2年生などが集めた先行研究から、研究方法を検討する。

第10回

先行研究と研究方法 2 1年生が集めた先行研究から、研究方法を検討する。

第11回

中間発表 1 修士論文の構想を発表する。学部生や他研究室の学生も参加できるように、当該時間以外の日時場所を設定することもある。

第12回

指導者の研究 2 現時点での指導研究者の研究動態を知る。(研究の構想と仮説、先行研究探査、対象限定の方法)

第13回

個別研究指導 個別研究に対して指導する(時間外に、フィールドでの指導も必要に応じて行う)。

第14回

個別研究指導 個別研究に対して指導する(時間外に、フィールドでの指導も必要に応じて行う)。

第15回

夏期研究活動の指導 夏期休暇中の卒業研究の進め方の指導をする。

第16回

自他の研究成果のふりかえり 1 人文学会他、学会学術講演会への参加、または発表

第17回

フィールドワーク 2 時間外の野外実習

第18回

論文構成のみなおし 1 相互に、論文の構造をみなおす。

第19回

論文構成のみなおし 2 相互に、論文の構造をみなおす

第20回

個別研究指導 個別研究に対して最終指導をする。

第21回

中間発表 2 学部生、他研究室の聴講可能な時間方法を設定する。

第22回

教員の今の研究 研究の構想と問い、先行研究探査、対象限定を知る

第23回

個別論文指導 1 個別に論文の最終チェックをおこなう。

第24回

修士論文の最終チェック 相互にチェックする。

第25回

個別論文指導 1 個別に論文の指導をおこなう。

第26回

修士論文最終チェック 集団で相互チェックを行う。

第27回

事後指導 修士論文提出後の集団指導。

第28回

個別発表準備 プレゼンテーション、資料の整備に関する個別指導

第29回

修士論文発表会の事前報告 発表の事前指導を共同指導する。

第30回

2022年度 前期～後期

4単位

歴史情報論演習 (1年次)

森栗 茂一

<授業の方法>

演習(状況により遠隔もある)

<授業の目的>

本演習科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻の演習科目として位置づけられ、歴史情報講座の連携した指導のもとおこなわれる。修士論文の大筋を院生・教員共同で検討し、人間文化研究科地域文化論専攻のDPに示されている「人と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献できる」「人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」知識技能を教授し、「独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元することができる」思考・判断・表現を指導し、あわせて、「将来にわたって、学問・研究への関心をもちつづけ、さまざまな実践現場で専門知識や技能にもとづいた貢献を果たすことができる」意欲・態度を育成することを目的とする。

<到達目標>

自分の研究について、研究をおこなうための前提となる事柄を論理説明でき(知識)、人の意見に耳を傾け、協調的・建設的な議論ができる研究的協働の(態度・習慣)を身につけ、客観的な根拠に基づいたオリジナリティのある主張を構築できる(態度・技能)身につく。また、研究に必要な情報の検索・収集の方法を獲得する(技能)。結果として、自らの研究に必要な調査方法を習得し、自分の主張を筋道をたてて文章で適切に表現できるようになる(技能)。最終的には、自分の主張を筋道をたてて口頭または、文章等で適切に表現できるようになる(技能)。

<授業の進め方>

"基本対面、社会的状況、個人的状況により、遠隔(ZOOM, ブログ、Googledriveで実施する。

演習順は、状況により変えることがあるが、事前に周知する。"

< 授業時間外に必要な学修 >

授業外でも各自で卒業最大限の時間をあてて修士研究と
りくむようにしてください。具体的な方法はテーマに応
じて指導します。(毎週6時間以上)

< 提出課題など >

1. 研究内容提示の際は、発表内容をまとめた資料(提出
日、氏名、資料頁、出典明示)を作成し提出する。評価
できる点、改善すべき点については、毎回コメントする。
2. 発表の後、修正したものを点検し、発表週内に指導教
員に提出する。教員はこれを点検し、必要に応じてコメ
ントをする。
3. 中間発表、人文学会等発表の提出前には、指定の日時
に草稿を提出する。

< 成績評価方法・基準 >

研究内容・意見交換への参加・コメント内容50%、中間
報告書を始めとする課題提出50%をあわせて評価します。
中間報告書の提出が期限内におこなわれなかった場合は、
評価の対象としません。

< 授業計画 >

研究指導のガイダンス

テーマの選択、研究方法、対象に関して、その指導法、
指導手法に関するガイダンスをおこなう。

第2回

研究倫理 調査される迷惑、個人情報保護、剽窃防止、
研究記録の作成、アカデミックハラスメント防止等に関
して、指導する。

第3回

指導者の研究1 歴史情報講座の合同研究室紹介をする。
森栗(歴史民俗学とまちづくり、総合社会科教育)、大
原(中国・チベット史、衣服・茶の歴史)、北村(ドイ
ツ現代史、グローバルヒストリーと教育)。

第4回

院生の研究と展望 院生テーマの相互検討をおこなう。

第5回

フィールドワーク1 定められた時間外に野外実習をお
こなう。

第6回

研究仮説と先行研究 2年生などのを研究仮説を中心に
指導する。

第7回

問いと先行研究2 1年生の問いと研究展望を中心に指

導する。

第8回

個別研究指導 個別研究に対して指導する。

第9回

先行研究と研究方法1 2年生などが集めた先行研究か
ら、研究方法を検討する。

第10回

先行研究と研究方法2 1年生が集めた先行研究から、
研究方法を検討する。

第11回

中間発表1 修士論文の構想を発表する。学部生や他研
究室の学生も参加できるように、定められた時間以外の
日時場所を設定することもある。

第12回

指導者の研究2 現時点での指導研究者の研究動態を知
る。(研究の構想と仮説、先行研究探査、対象限定の方
法)

第13回

個別研究指導 個別研究に対して指導する(時間外に、
フィールドでの指導も必要に応じて行う)。

第14回

個別研究指導 個別研究に対して指導する(時間外に、
フィールドでの指導も必要に応じて行う)。

第15回

夏期研究活動の指導 夏期休暇中の研究の進め方の指導
をする。

第16回

自他の研究成果のふりかえり1

人文学会他、学会学術講演会への参加、または発表も
含めて

第17回

フィールドワーク2 定められた時間外の野外実習を行
う。

第18回

論文構造のみなおし1 相互に、論文の構造をみなおす。

第19回

論文構造の見直し2 相互に、論文の構造をみなおす。

第20回

個別研究指導 個別研究に対して最終指導をする。

第21回

中間発表2 学部生、他研究室の聴講可能な時間方法を設定する。

第22回

研究の総合的検討 研究の構想と問い、先行研究探査、対象限定を知る

第23回

個別論文指導1 個別に論文のチェックをおこなう。

第24回

修士論文のチェック
相互にチェックする。

第25回

個別論文指導1 個別に論文の指導をおこなう。

第26回

修士論文最終チェック 集団で最終相互チェックを行う。

第27回

事後指導 修士論文提出後の集団指導。

第28回

個別発表準備 プレゼンテーション、資料の整備に関する個別指導

第29回

修士論文発表会の事前報告
発表の事前指導を共同実施する。

第30回

2022年度 前期

2単位

歴史情報論特殊講義

森栗 茂一

< 授業の方法 >

講義（対面、状況により遠隔）

< 授業の目的 >

本演習科目は人間文化学研究科修士課程地域文化論専攻の演習科目として位置づけられ、歴史情報論講座の連携した指導のもとおこなわれる。修士論文の大筋を院生・教員共同で検討し、人間文化研究科地域文化論専攻のDPに示されている「人と文化に関する豊かな学識と幅広い教養をもって地域社会と文化の発展に貢献できる」「

人と文化に関する専門分野の研究を深め、研究者として自立することができる」知識技能を教授し、「独創的な研究を進め、自らの研究成果を学界および社会に還元することができる」思考・判断・表現を指導し、あわせて、「将来にわたって、学問・研究への関心をもちつづけ、さまざまな実践現場で専門知識や技能にもとづいた貢献を果たすことができる」意欲・態度を育成することを目的とする。

< 到達目標 >

自分の研究について、研究をおこなうための前提となる事柄を論理説明でき（知識）、人の意見に耳を傾け、協調的・建設的な議論ができる研究的協働の（態度・習慣）を身につけ、客観的な根拠に基づいたオリジナリティのある主張を構築できる（態度・技能）身につく。また、研究に必要な情報の検索・収集の方法を獲得する（技能）。結果として、自らの研究に必要な調査方法を習得し、自分の主張を筋道をたてて文章で適切に表現できるようになる（技能）。最終的には、自分の主張を筋道をたてて口頭または、文章等で適切に表現できるようになる（技能）。

< 授業の進め方 >

個人指導だけでなく、多様な大学院生とともに、研究のあり方を検討する。

< 授業時間外に必要な学修 >

授業外でも各自で卒業最大限の時間をあてて修士研究と取り組むようにしてください。具体的な方法はテーマに応じて指導します。（毎週6時間以上）

< 提出課題など >

1. 研究内容提示の際は、発表内容をまとめた資料（提出日、氏名、資料頁、出典明示）を作成し提出する。評価できる点、改善すべき点については、毎回コメントする。
2. 発表の後、修正したものを点検し、発表週内に指導教員に提出する。教員はこれを点検し、必要に応じてコメントをする。

< 成績評価方法・基準 >

研究内容・意見交換への参加・コメント内容50%、課題提出50%をあわせて評価します。中間報告書の提出が期限内におこなわれなかった場合は、評価の対象としません。

< 授業計画 >

歴史民俗学のガイダンス

第2回

歴史民俗研究の研究倫理

第3回

フィールドワーク実践

第4回
博士論文事例研究
第5回
博士論文事例研究
第6回
宮本常一研究 1
第7回
宮本常一研究 2
第8回
宮本常一研究 3
第9回
網野善彦研究 1
第10回
網野善彦研究 2
第11回
網野善彦研究 3
第12回
地域の歴史 1
第13回
地域の歴史 2
第14回
地域の歴史 3
第15回
修士論文と多様な研究

2022年度 後期
2単位
歴史情報論特殊講義
大原 良通

< 授業の方法 >
講義（対面授業および遠隔授業併用）
< 授業の目的 >
修士論文作成に必要な、情報を中心に講義する（DP：知識・技能）。
漢文等の専門用語や論文に必要な知識を講義する。（DP：知識・技能）。
< 到達目標 >
歴史に関する専門用語が理解できるようになる。
論文作成に必要な情報を得ることができる。

< 授業の進め方 >
受講者の修士論文の題目につながるような歴史論文を読みながら、解説、講義する。
適宜、内容の理解度の確認や、討論、議論をおこなう。

< 履修するにあたって >
しっかり復習する。
課題図書がある場合には予習する。
< 授業時間外に必要な学修 >

予習、復習にそれぞれ一時間ほど。
< 提出課題など >
適宜、レポート提出。
< 成績評価方法・基準 >
授業の理解度をその都度図り、さらにレポートの内容とで、それぞれ約50パーセントとして総合的に判断する。
< 授業計画 >
授業の進め方確認 授業の進め方について確認する。
第2回
論文検索 授業で扱う論文について、検索、確定する。
受講生の修士論文作成計画を加味して、受講生にとっても有意義になるようなものを選ぶ。
第3回
論文解説 論文を読みながら、その構成や内容について解説する。
第4回
論文解説 2 論文を解説しながら、内容の理解を深める。
第5回
論文解説 3 論文を解説しながら、内容の理解を深める。
第6回
論文解説 4 論文の内容について確認。
第7回
論文解説 5 論文の内容や意義について、確認・議論。
第8回
論文解説 6 論文の問題点や課題について討論、議論する。
第9回
資料概説 歴史論文に必要な資料について、その基礎知識について講義する。
第10回
考古資料概説 歴史論文に必要な考古資料について、基本情報を講義する。
第11回
文献資料解説 1 文献資料つまり、史料について、特に正史を中心に解説する。
第12回
文献資料解説 2 正史以外の史料について解説する。
第13回
文献資料解説まとめ 史料のまとめとして、その扱い方の問題点や注意点について解説する。
第14回
言語資料 神話、伝説、フィールド調査による、言語資料について解説する。
第15回
まとめ 論文作成に必要な情報や知識についてまとめ、内容理解について確認する。

2022年度 後期

2単位

歴史情報論方法論

森栗 茂一

< 授業の方法 >

on-line 対面 ブログ 併用ハイブリッド講義

< 授業の目的 >

本授業は、人間文化研究科のDPが示すとおり、学問上の研究課題や実社会の諸問題に対して的確に応用する専門的な「知識・技能」を身につけ、都市史の問題発見の能力を高め、次世代の「生きる力」を育むための講義である。学位論文執筆のため大学院に必要な基本的歴史情報の構造化技術を修得すること、を目的としている。

・具体的には、都市の発生、都市の意味などについて、歴史学のみならず民俗学、公共論、地理的立地論、境界として都市の哲学などをもとに、総合的に都市史の知識を獲得することを第一目的とする。

・総合的都市史の知識を活用し、図書館・デジタルデータ等を活用し、身近な地域の都市的なるものの形成史を探求し、

・引用を明示してプレゼンで表現し、他者との対話のなかから、多様な視点を発見し、主体的に学ぶ経験を第二目的とする。

なお、この授業担当者は、高等学校教諭を7年、国立歴史民俗博物館客員助教授を3年つとめ、神戸まちづくり研究所を設立運営してきた高校教育と博物館展示企画、歴史的まちづくりに関する実務経験のある教員である。これらの経験を柔軟に活かし、総合的な人文研究、歴史学に対する知識や経験の少ない留学生、社会人に対しては極めて解り易く講じ、既に専門的な知識や経験を有する学生には学位論文にむけた高度な教育が可能である。

< 到達目標 >

・都市史という歴史課題を、民俗学、公共論、地理的立地論、境界として都市の哲学から、より深く、総合的に学ぶ知識と態度を獲得することができる。

・図書館・デジタルデータなどの身近な地域の都市的なるものの形成史を探求し、発表し対話することで、主体的に学ぶ態度を身につけることができる。

< 授業のキーワード >

都市、被差別、職人、公界、歴史探求

< 授業の進め方 >

高校の歴史科には、答えある。大学院の歴史学には答え無い。問、仮説、探求・推論、発見だ。

毎回、「問」たて、KP（紙芝居プレゼンテーション、簡易グループワーク）、GW（簡易ワークショップ的なグループ学習）、RT（ラウンドテーブル：サークル型で自由に語り合う）。協働、発見、わかちあい。ふりかえって、reflection。

文献、引用、毎回予習。授業前日、23：59まで、添付で提出、お約束。

講

義1? 4 京阪神の河原町の紹介をして、境界論としての歴史民俗的な都市論からその機能を考える。

講義5-9で、個別発表「身近な河原町」のテーマ・資料に関する絞り込みを行い、

講義9-12でプレゼンと総括を行ない、

講義13-15で、プレゼン経験をもとに新指導要領の歴史探求、歴史総合のあり方と歴史学の新潮流を協働で考える。

< 履修するにあたって >

この授業、step by stepですすすめます。主体的、学ぶ経験ない人にも、歴史探求、面白い。自ずと力がついてくる。それだけに、自ら予習、発表する、主体的思考、大変です。苦しく楽しい授業です。

第1回には、かならず参考文献「日本中世都市史研究とドイツ中世都市」（全2頁）を必ず、読んでくること。

なお、受講者数、教室の都合によって、シラバスどおり、授業すすまぬこともあり。

< 授業時間外に必要な学修 >

参考文献や資料検索には、60分以上、そのレポート記述には30分以上が、時間外学修として必要となる。

< 提出課題など >

毎回、授業の予習として、参考文献、資料検索等により、A4 1枚程度の下調べをし、引用等を明示してレポート提出する。その予習で、次回の授業を展開する。

< 成績評価方法・基準 >

毎回の宿題、復習によるKP12回×5点、および 発表プレゼンおよびコメント 40点 による総合評価

< テキスト >

ブログ「森栗茂一のコミュニティコミュニケーション」またはボックスに掲載した資料

< 参考図書 >

森栗茂一『河原町の民俗地理論』明石書店、2003年（図書館に複数用意する）

< 授業計画 >

日本の都市史の特色はなんだろうか？ 初回{<https://zoom.us/j/3252388118>}で議論します。

日本の都市史の意味、および欧州の都市史の特色を概説

する。その上で、
KP 参考文献を予習し、日本の都市史の特色、ドイツとの共通点について述べよ。

第2回

問 神戸の新開地は歴史がありそうな町なのに なぜ「新」開地というのか？ KP 自己紹介と感
じたこと、知っとうこと自慢

新開地は、兵庫と神戸の間の河川敷だった。

宿題 京都の盛り場の歴史について調べ、
引用・頁をつけ 簡潔なPPTプレゼン1枚で示せ。

第3回

問 京都の河原町は、河原のように、氾濫原なのに、なぜ盛り場になったのか？ KP 新京極、
河原町の謎 VS 千本 鉾町の冷ややかな眼

盛り場と
は何か。都心と異なるのか。

宿題 京都の盛り場の
歴史について調べ、引用をつけ 簡潔なPPTプレゼン1枚
で示せ。

第4回

問 大阪の難波は旧墓地、梅田は湿田の埋田だという。
なぜ居住に適さない墓地や湿地に、鉄道のターミナルが
できたのか？ KP 大坂大阪の近世近代都市化、工業
化、郊外化と近代交通史のなかで河原町機能を考えよ

地図...水路と鉄道駅、水路と芝居小屋、水路と
遊郭 遊郭と湿地

宿題 京阪神の河原町の機能、および
疑問点を、教科書・参考資料・その他の図書館資料・デ
ジタル資料を読んで考え、プレゼン1枚にする

第5回

ふりかえりラウンドテーブル 京阪神の河原町機能とは
何か？ 疑問点は？

RT 考えたこと、大発見と頓珍漢のコンテス

宿題 探求したい都市の河原町、
河原町の機能、外国の境界都市 について、地名辞書、
県史市史、歴史地図・文献を参考に仮テーマを考え、プ
レゼン1枚にする

ヒント...山崎の歴史とその所属
国名(府名)、ストックホルム、堺は和泉か摂津か、吉
崎御坊門前町の立地

第6回

個々の仮テーマのわかちあい KP 個々の仮テーマわか
ちあい

宿題

県立図書館、神戸市立図書館、大阪府立図書館、まちづ

くり会館まちラボなどを活用しテーマとテーマに関する
資料を検討し、プレゼン1枚にしておく

第7回

個々の資料、参考図書わかちあい KP 個々の資料、参
考図書わかちあい

宿題

資料図書を検討し、問題意識を明確化させたテーマを
考え、プレゼン1枚に書く

第8回

問題意識を明示した本タイトルのしぼりこみ KP 問題
意識を明示したテーマのしぼりこみ(タイトルが決まれば、
論文は50%以上できあがりという意見もある)

宿題 テーマに関する新聞、NHKアーカ
イブ、小説、サイトなど、多様な資料を探し、プレゼン
1枚にする

第9回

こんな資料を使うと一味違うコンテスト + 引用方法、
資料信頼度、剽窃発見ソフト KP 資料の信頼度を含む
多様な資料コンテスト

宿題 タイト
ル・問題意識、資料提示と分析、考察、結論と参考文献
の構想を考え、引用をつけた4枚のプレゼンにし提出(頁
番号、日時明記)

第10回

仮プレゼンわかちあい KP 問題意識、資料提示、考察、
結論 コンテスト

プレゼン発表を完成

させプレゼン配布資料を用意する

第11回

プレゼン発表 と コメント 発表が終わったものが、
次の発表のコメントをする

第12回

プレゼン発表 と コメント 発表が終わったものが、
次の発表のコメントをする

第13回

プレゼン発表 と コメント 発表が終わったものが、
次の発表のコメントをする

第14回

プレゼン体験から考える歴史総合と歴史探求 KP
プレゼン体験から考える歴史総合と歴史探求復習
新指導要領における歴史総合、歴史探求、地理探求を調
べ、プレゼン1枚にする

第15回

歴史学の新しい動き「防災減災の歴史学」「まちづくり
歴史学」 KP 新しい歴
史科目に求められている歴史科教師とは